佐賀県文化財調査報告書第43集

生石・森の下遺跡

昭和53年３月

佐賀県教育委員会

佐賀県教育庁文化課

はじめに

昭和52年度に国庫補助金を得て、佐賀県農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施したもののうち、この肥前町所在の生石遺跡と唐津市宇木所在の森の下遺跡をまとめたものであります。生石遺跡は上場地域における旧石器時代の解明の先鞭として、また、森の下遺跡は下場地域の古墳時代前期の住居址であり、ともに学術的に貴重なものであります。この報告書が、考古学の研究の一助として広く活用されることを期待いたします。

なお、両調査に御協力いただいた九州農政局上場農業水利事業所、県農地林務部をはじめ、上場開発推進対策室その他の関係機関の御協力に対し感謝申し上げるとともに、本書の刊行を担当された各位に対し、厚く御礼申し上げます。

昭和53年3月31日

佐賀県教育委員会
教育長　池　田　武　生

第Ⅰ部　生石遺跡……1

第Ⅱ部　森の下遺跡……69

第　I　部

生石遺跡
いき　いし

＝東松浦郡肥前町＝

もくじ

1．発掘調査の経過……1
(1) 発掘調査団……1
(2) 発掘調査の経過……1
(3) 発掘調査日誌抄……2
2．生石遺跡の位置と環境……3
(1) 地理的環境……3
(2) 歴史的環境……3
3．生石遺跡の遺構と遺物……7
(1) 生石遺跡の遺構……7
① 生石遺跡の土層……7
② 生石遺跡の遺構……7
(2) 生石遺跡の遺物の分布……8
(3) 生石遺跡の遺物……10
① ナイフ形石器……12
② 細石刃……21
③ 台形石器……22
④ 彫器……27
⑤ 細石核……28
⑥ 石核……28
⑦ 尖頭器状石器……30
⑧ 掻器・削器……31
⑨ その他の石器・刃器・剥片……31

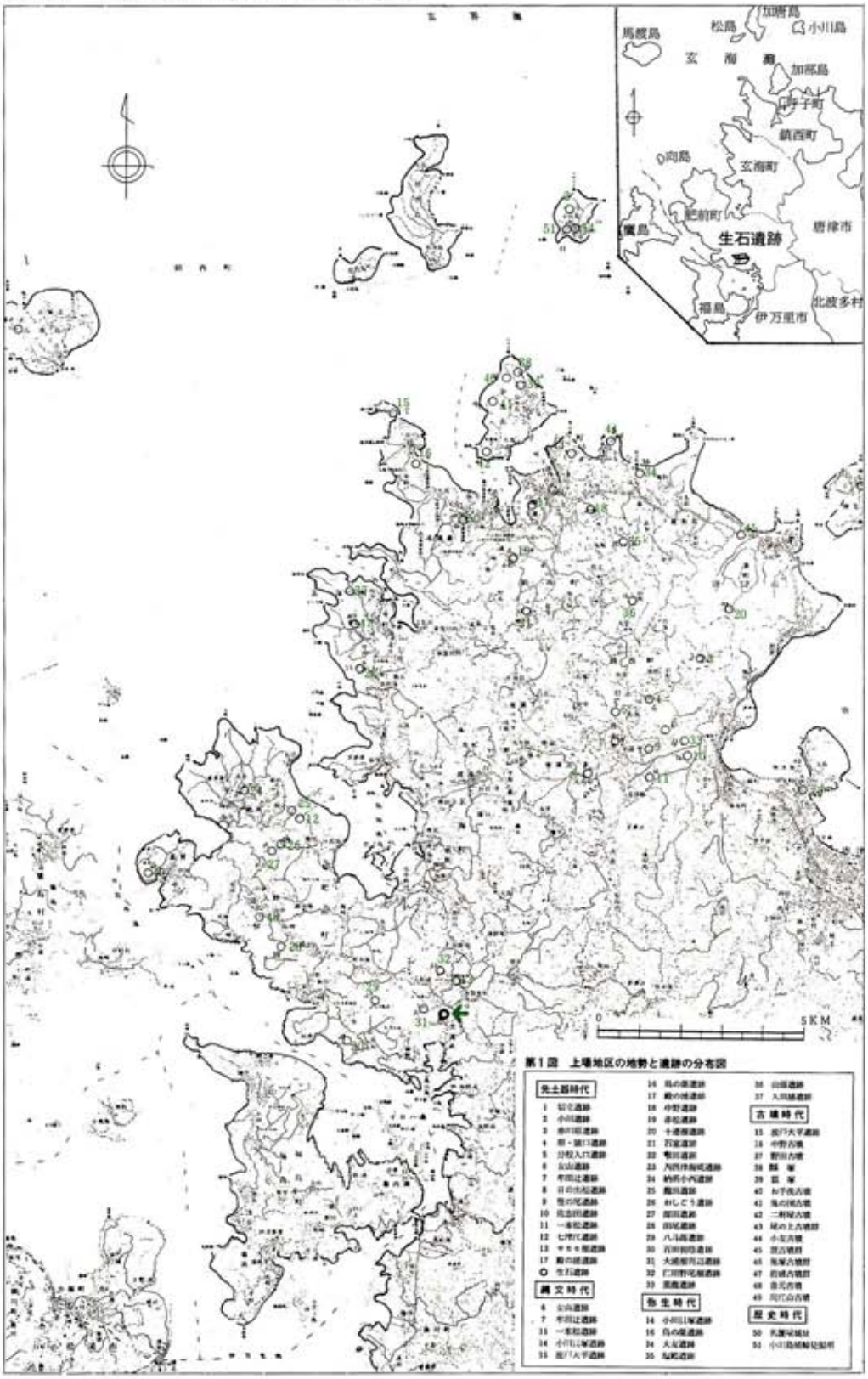
挿　図　も　く　じ

第１図　上場地区の地勢と遺跡の分布図……6
第２図　生石遺跡の周辺……5
第３図　生石遺跡の地形と発掘地点……6
第４図　II区南壁土層の実測図……7
第５図　ＭＯ区配石遺構実測図……8
第６－１図　II区２層遺物分布図……9
第６－２図　II区３層遺物分布図……10
第６－３図　II区４層遺物分布図……11
第６－４図　II区５層遺物分布図……12
第７図　９II区遺物分布図……13
第８図　10II区遺物分布図……13
第９図　12II区遺物分布図……14
第10図　ＬＯ区遺物分布図……14
第11図　ＭＯ区遺物分布図……15
第12図　層位別出土遺物数……15
第13図　第２・３・４層石器百分比……15
第14図　ナイフ形石器の計測……17
第15図　ナイフ形石器の分類一覧……18
第16図　細石刃の計測……23
第17図　細石刃の折断部位……25
第18図　細石刃の大きさの分類……26
第19図　使用痕のある細石刃率……26
第20図　石核の分類一覧……29
第21図　ナイフ形石器実測図……33
第22図　細石刃実測図……37
第23図　台形石器実測図……40
第24図　彫器実測図……41
第25図　細石核実測図……41
第26図　石核実測図……42
第27図　尖頭器状石器実測図……43
第28図　掻器・削器実測図……44
第29図　刃器・剥片等実測図……45
第30図　石鏃実測図……48

図 版 も く じ

図版１－１　遺跡の遠望（西側峰より）……51
　　２　遺跡より伊万里湾を望む……51
図版２－１　トレンチ……52
　　２　Ⅱ区南壁土層……52
図版３－１　Ⅱ区３層遺物出土状況（東側より）……53
　　２　Ⅱ区４層遺物出土状況（北側より）……53
図版４－１　遺物実測糸張り……54
　　２　遺物出土状況……54
図版５－１　ＭＯ区配石遺構（北側より）……55
　　２　ＭＯ区配石遺構（南側より）……55
図版６－１　ＭＯ区配石遺構（中央部）……56
　　２　ＭＯ区配石遺構（環状石組）……56
図版７　ナイフ形石器　①……57
図版８－１　ナイフ形石器……58
　　２　台形石器……58
図版９　細石刃①……59
図版10－１　彫　器……60
　　２　石　鏃……60
図版11－１　石核・細石核……61
　　２　石　核……61
図版12　尖頭器状石器……62
図版13－１　掻器・削器……63
図版14－１　刃器・剥片……64
図版15－１　刃器・剥片……65
　　２　接合資料・スポール……65

第１図　上場地区の地勢と遺跡の分布図



1．発掘調査の経過

上場地区では、農林省による上場農業水利事業（国営）と、県による上場地区土地改良事業（県営）に伴う、道路工事、農地造成・農地区画整理工事、ダム工事等が数年前から実施されてきている。52年度にはいり、この事業工事に先だって、埋蔵文化財保護の見地から、4月27日より5月7日にかけて事業区域内の踏査を行ない、6月1日より遺跡確認のための発掘調査を実施した。この生石遺跡は、国営の『万賀里川42団地』の事業区内にあり、地番は東松浦郡肥前町大浦字生石(いきいし)976番地である。

(1)発掘調査団

この遺跡の発掘調査は佐賀県教育委員会が担当し、事務局を文化課において実施した。発掘調査団は、次のとおり編成された。

調査主任　木下　巧　県教育庁文化課文化財調査第二係長
調査員　堀川　義英　県教育文化課文化財調査第二係
〃　松尾　吉高　県教育庁文化課嘱託
調査補助　山上　龍　九州大学学生
調査助言　麻生　優　国学院大学講師
協　力　肥前町・町教育委員会・町開発課・九州農政局上場農業水利事業所・肥前町切木地区地元有志他

(2)発掘調査の経過

国営事業『万賀里川42団地』事業区内の踏査を昭和52年4月28日に実施、団地中央部の農道切通し地点からナイフ形石器2点と黒耀石製剝片5点を採集した。

この結果、同年7月より8月までの41日間にかけて発掘調査を実施した。グリッドは、4㎡マスを基本単位として設定した（第3図）。表土中の遺物は、全域に広がっていたが第2層以下の遺物の集中地点は、II区、LO区、9II区、10II区、12II区、MO区等にみられた。農道より西側では、遺物の出土はほとんどみられなかった。II区西部分は、土層状態は良好で、第5層まで遺物の出土を確認できたが、II区の中央部・東部分は乳牛の放牧場であったため、表土が深く入りこんでいた。III区は、表土がうすくて基盤にすぐ達する土層状態であった。IV区は、数年前みかん畑造成で、ブルがはいった際に南側が削平されていた。また、MO区では、配石遺構が検出された。

(3)発掘調査日誌抄

7月2日　器材搬入

7月4日　Ⅰ・Ⅱ区にグリッドを設定し、Ⅱ区より表土はぎ作業にはいる。

7月6日　Ⅰ区表土はぎ開始。町助役ら3人見学。

7月7日　Ⅰ区1層の実測、遺物とり上げ、ナイフ形石器、石核、細石刃など出土。

7月9日　Ⅱ区2層の作業にはいる。

7月11日　Ⅱ区2層の写真撮影、実測、遺物のとりあげ。角礫を含む黄褐色土層（赤土）になると遺物の出土なし。

7月13日　Ⅲ区にグリッドを設定し表土はぎ作業にはいる。

7月16日　Ⅱ区を西側へ拡張する。Ⅲ区表土層からの出土は多いが、遺物包含層はうすくて基盤にあたる。

7月18日　Ⅱ区3層の作業にはいる。3層の実測写真撮影。

7月21日　Ⅲ区遺物取り上げ。

7月23日　Ⅱ区4層にはいる。Ⅲ区を東へ拡張しグリッドを設定する。

7月26日　Ⅲ区―17番通りの表土はぎ作業開始。Ⅱ区4層遺物取り上げ。

7月27日　Ⅳ区にグリッド設定。

7月28日　Ⅱ区4層の作業にはいる。上層では遺物なし。

8月1日　Ⅱ区5層をさらえて基盤まで掘り下げる。土層図の実測。ＬＯ・9Ⅱ区の拡張。8Ｍ区で配石遺構確認の為、東西部と南部へ拡張する。

8月3日　Ⅲ区写真撮影・実測・遺物の取り上げ。

8月6日　10Ⅱ区、12Ⅱ区を拡張する。

8月9日　麻生優先生の現地指導。Ⅰ区の東側を農道まで拡張する。町文化財専門委員見学。

8月10日から、18日まで遺物整理と盆休みで作業中断。

8月19日　ＭＯ区の配石遺構の実測を開始。遺跡の範囲確認のため西の峰の方へ30m間隔で4㎡マスのＮ区グリッドを設定する。作業員を本日より10名程度に減らす。

8月23日　ＬＯ区の2層を下げる。ＭＯ区の実測。

8月27日　Ｎ区の平板測量・土層実測。

8月30日　ＬＯ区の写真撮影・実測および遺物取り上げ。

8月31日　全地区の平板測量終了。土層断面図作成。発掘調査を完了する。

9月1日から　遺物整理作業。

11月3日から5日　肥前町第2回文化展へ遺物を出品する。

2．生石遺跡の位置と環境

(1)地理的環境

佐賀県の北部に、玄海灘にむかって掌を突き出したように位置している半島が東松浦半島である。この半島の北端から壱岐、対馬を経て、朝鮮半島・大陸につながるルートは、最も近く、古くから往来も開けていたものと推察される。この東松浦半島は通称上場台地とよばれ、行政上は1市（唐津市）4町（呼子、鎮西、玄海、肥前）に分かれているが、交通、産業、文化的には、一体化している。上場地方は佐賀県のチベットと俗称され文化的・産業的にもとり残されてきたが、近年になって国鉄呼子線の敷設、上場開発水利事業、県営畑総などの事業で急ピッチに開発の波がおしよせている。

上場台地を地質的にみると、玄武岩が広く面状に噴出して、第三紀層を覆った平坦な台地であり、この玄武岩山地が侵食をうけて細長い谷ができた頃地盤が沈降して、現在みられるような複雑な海岸線があらわれたとされている。つまり湾入部が古い谷で、岬や島はその峰にあたっていた場所であるといえる。上場台地上の高い地点は、石高山の262m を最高に、野高山の260m 、熊の峯の228m などがあげられるが、約200m ラインの広い準平原状の高原が波状的に広がっている卓状台地といえる。

生石遺跡は、伊万里湾を西に見て、上場台地の南西端、海抜約190m にあり、卓上部の最突端に位置し、海抜211m の丘陵の東側鞍部にある。

生石遺跡の周辺には、現在みられる溜池の近隣を中心にして数多い遺跡がある。例えば、半径1㎞の円内に、18か所と溜池と20か所の先土器・縄文の遺跡・遺物散布地（生石を含む）を数えることができるのであって、上場台地の溜池が原始時代以来人々の生活にいかに必要であったかを物語るものであろう。

南側は台地の急斜崖で大浦岡の民家の並ぶ標高100m ラインまで下り、そこより海岸線までは棚田が続くが遺跡より海まで直線距離にして700m である。また国道204号線を南下すると約20㎞に黒耀石の原産地である腰岳がある。

(2)歴史的環境

大陸に近い『上場台地』はその歴史も古い。先土器時代の遺跡として、猿口（まわごう）、分校入口、牟田辻、女山（おなやま）、佐志田、名場越（なばこし）、五反田、一本松、神集島（以上唐津市）、赤川原、原、轡原、切立、ダイラ（以上鎮西町）、敷田、日の出松、牟田、白畑西、花の木（以上玄海町）、小川、殿の浦（以上呼子町）、七津江、納所小西、龍田、おしごう（以上肥前町）などが知られている。1955年頃からの踏査採集で「わが国有数な先土器時代遺跡の密集地」であると指摘されてきたが本格的な発掘調査はまだ数少ない。

縄文時代になると、早期の遺跡として笹の尾、西唐津海底、前期に牟田の辻、中期に

赤松遺跡などが代表としてあげられる。その他、女山、黒龍、十連溜（以上唐津市）、波戸、管牟田、中川原、石室（以上鎮西町）、小友、大久保、殿の浦西（以上呼子町）、牟田、敷田、日の出松、高石海岸（以上玄海町）、深田、松の木、仁田野尾溜、八斗蒔溜（以上肥前町）などの遺跡もあげることができる。

先土器時代から縄文時代にかけては、上場台地全体が人々の生活の場であったが弥生時代に入り稲作農業が普及してくると、下場の鏡、宇木、北波多などの沖積低地部に人々の生活の場の中心は移っていったものと推察されるのであり、上場台地の遺跡数は大きく減っている。それでも海岸線付近には弥生時代の遺跡の散布がみられる。

弥生時代前期の遺跡に、鼓（つづみ）、野原（唐津市）、中期に、中川原、塩鶴（以上鎮西町）、大友、加部島（以上呼子町）、後期に、竹迫、馬場野、尾頭遺跡（以上唐津市）などがあげられる。

古墳時代になっても、ひき続き海岸線地帯が主な生活の舞台であったといえる。中期の古墳に鼓古墳（唐津市）があり、後期になって前方後円墳の瓢塚（加部島）が代表としてあげられる。その他に、鬼塚（唐津市）、小友、尾の上、狐塚、鉢の底、お手洗、鬼の国、唐平田、二軒屋（以上呼子町）、中野、波戸、大平、宮の本（以上鎮西町）、岩盛、野田、普恩寺（以上玄海町）、深田、音元（以上肥前町）などの古墳・集落遺跡があげられる。しかし、調査はまだ十分に行なわれていない。

その後、歴史的空白は長く続くが、16世紀末豊臣秀吉が、朝鮮進攻の本営を鎮西町名護屋に定めて一躍脚光をあびた。その名護屋城址と百数十の陣址の一部は今も残っている。

藩政時代にはいり、呼子を拠点とした捕鯨業は玄海漁民の活路を開いたが、畑作に生きる農民たちは台地農業の苦しさから脱脚できずに現代に及んでいる。

なお、上場（離島）地区の文化財調査で発掘調査が実施された遺跡は次の通りである。

- 分校入口遺跡　（先土器・縄文）1958
- 女山・笹の尾遺跡　（先土器・縄文）1960・10　日本考古学会
- 原遺跡　（先土器・縄文）1963・8　明治大学
- 馬渡切立遺跡　（先土器）1964・8、1965・8
- 赤松遺跡　（縄文）1967・8
- 大友甕棺遺跡　（弥生）1970・8　県教委
- 瓢塚　（古墳）1972・3　佐賀大学
- 鬼塚　（古墳）1972・1973・8　唐津市教委
- 小川貝塚遺跡　（縄文・弥生）1975・8　呼子町教委

第２図　生石遺跡の周辺

第３図　生石遺跡の地形の発掘地点

・　山城遺跡　（名護屋城陣址）1976・8　県教委

3．生石（いきいし）遺跡の遺構と遺物

(1)生石遺跡の遺構

①生石遺跡の土層　（第4図）

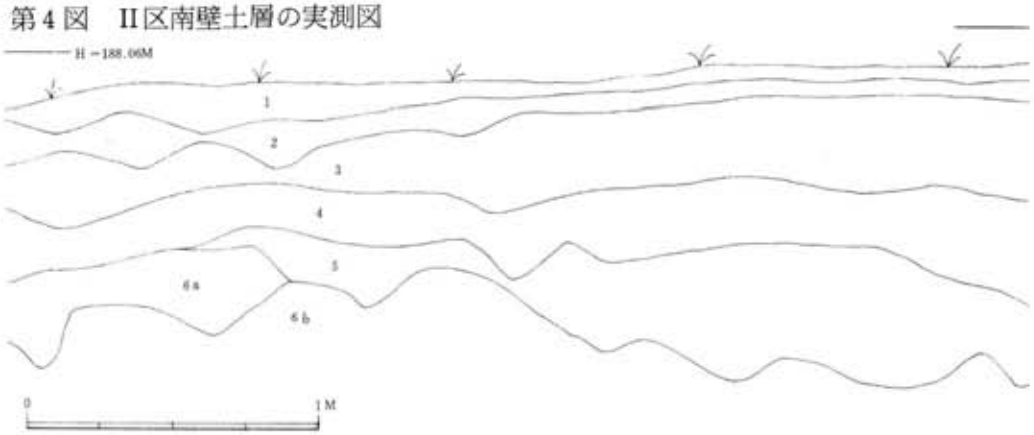
上場地区の土層で一般的にいえることは、基盤である玄武岩質安山岩の風土壌のローム層が薄く、表土からすぐ基盤に達する場所が多いということである。従って、畑地などでは、安山岩の風化礫が耕土の中に夥しくみられる所が多い。

生石遺跡でも、西区やⅢ区の東部ではこの傾向がみられ遺物包含層であるローム層質土層が薄い。Ⅳ区は、畑地造成の際削平されていた。そこで比較的良好なⅡ区南壁の土層を第4図に示した。

②生石遺跡の遺構　（第5図）

ＭＯ区で配石遺構と思われる石組が検出された。東寄の北向斜面に、東西6ｍ、南北11m に広がる三角形状の配石である。110cmから20cmぐらいの、大小約200個の玄武岩質

第4図　Ⅱ区南壁土層の実測図



1層（表土層）：表土粘性なく、しまりの悪い腐植土。

2層：黒褐色土層。しまりは悪く、粘性はやや良。1層より明るく、腐植分を含まない。

3層：褐色土層。しまりは悪く、粘性はやや良。2層よりやや明るい。含有物は2層と変らない。

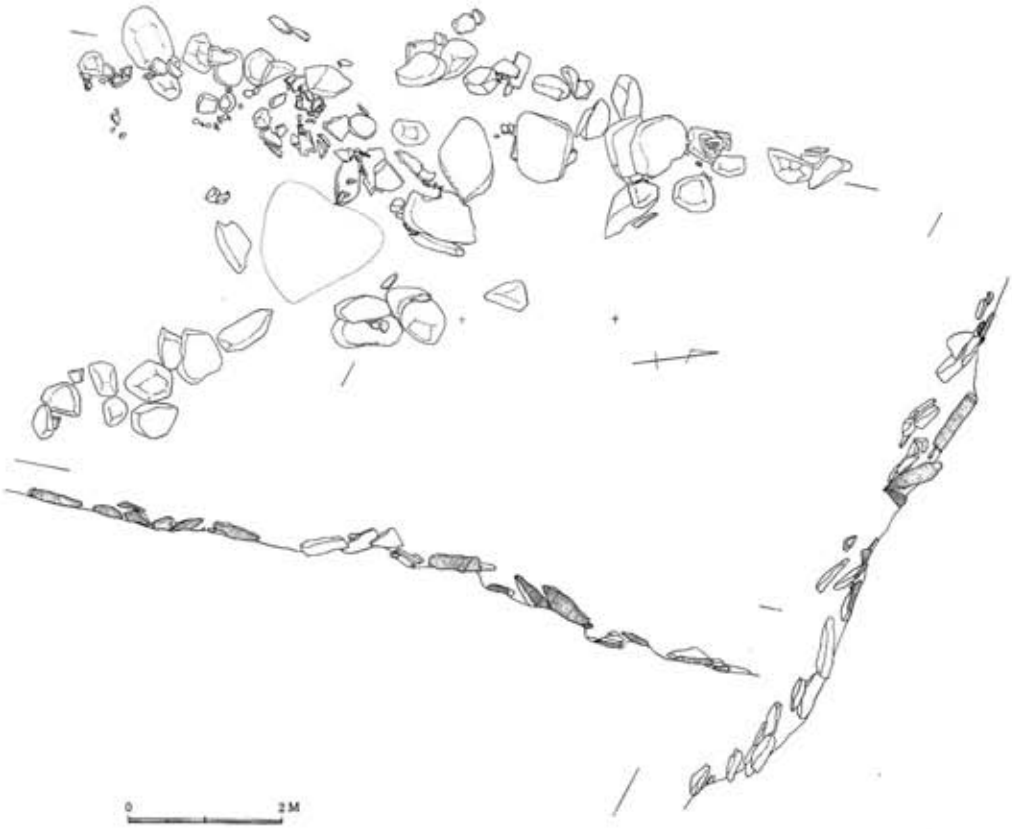
4層：茶褐色土層。しまりは悪く、粘性は良い。土粒が3層より小さく、比較的粘土質。

5層：赤褐色土層。しまり悪く、粘性は良い。いわゆる赤土。

6ａ層：黄褐色土層。基盤のブロックを多量に含み、基盤の上層部である。

6ｂ層：基盤。

第５図　ＭＯ区配石遺構実測図



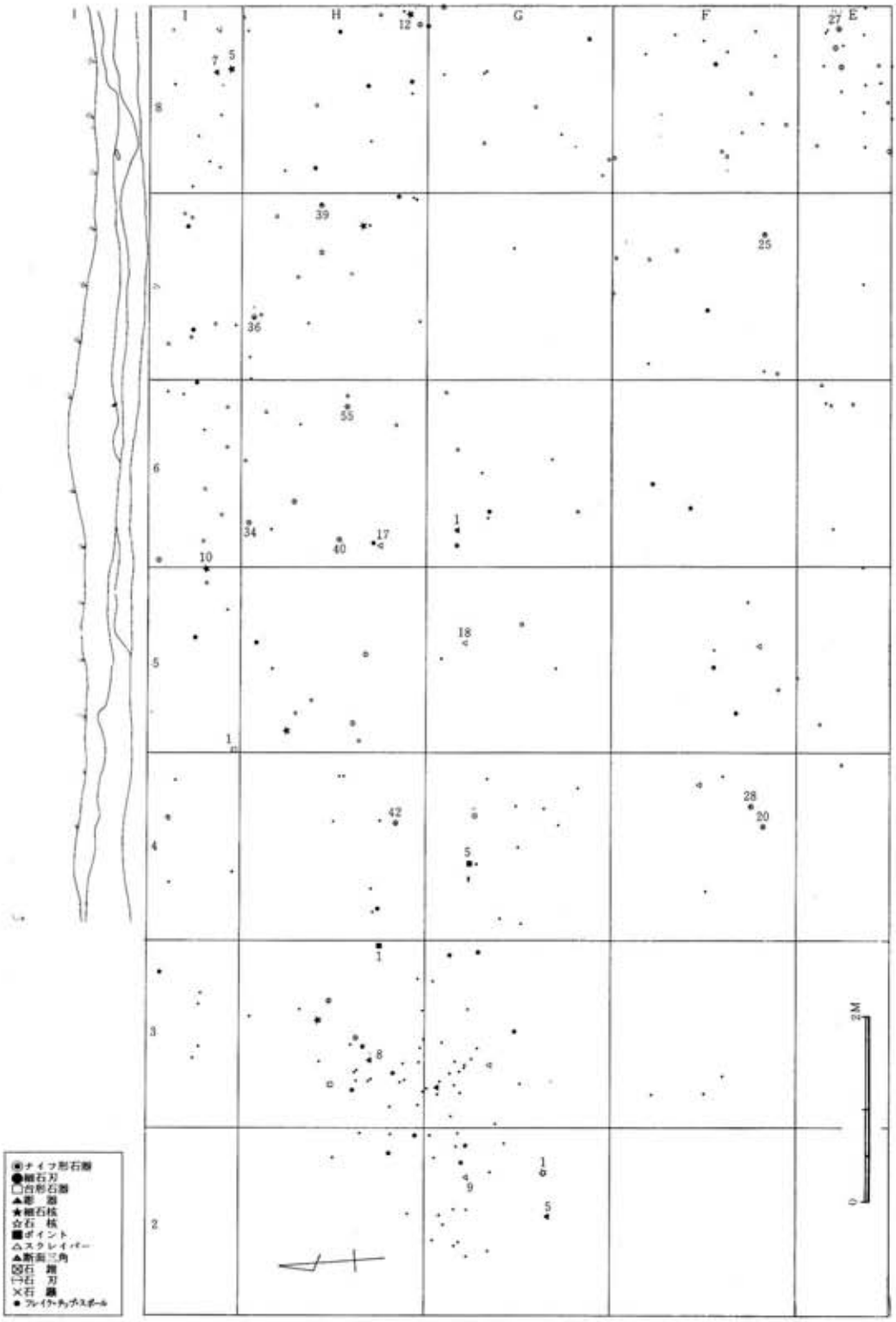
安山岩であって、岩石の多くは平坦面を横に用いている。石の上面のレベル差は約１ｍである。遺構は、中央部、南部、北部に分かれる。中央部は、南北約３ｍ、東西約４ｍの範囲にある。西側に40cmから20cmの約20個の角礫を環状に並べる。それを約40cmから100cmの丸石がＵ字状に囲む。環状石組の中からは炭化物や焼土の確認はできなかった。中央部から、50cmから70cmクラスの平石が中心部を約５ｍ南下し、その西側に丸石が並行している。中央部より北部にかけて、丘稜斜面を登るように、東西に分かれた一条ずつの配石である。

配石遺構は第２層から３層に及び、３層はわずかだが炭化物を含む。供伴遺物は２層からスクレイパー、台形石器、石刃など20点、３層から石刃の一点がある。

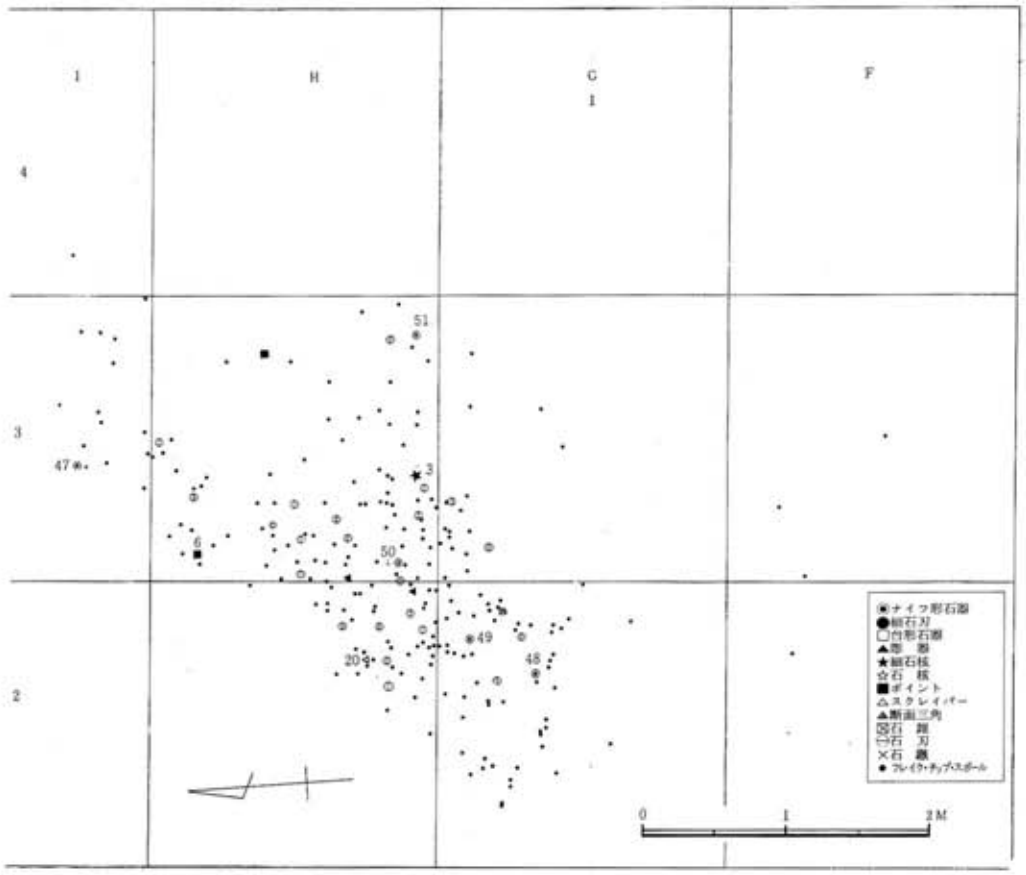
(2)生石遺跡の遺物の分布

４㎡桝掘りの結果、遺物の集中地点を見つけるために拡張したグリッドは、II区（第６図）、９II区（第７図）、10II区（第８図）、12II区（第９図）、ＬＯ区（第10図）、ＭＯ区（第11図）である。

第６－１図　II区２層遺物分布図



第6－2図　II区3層遺物分布図

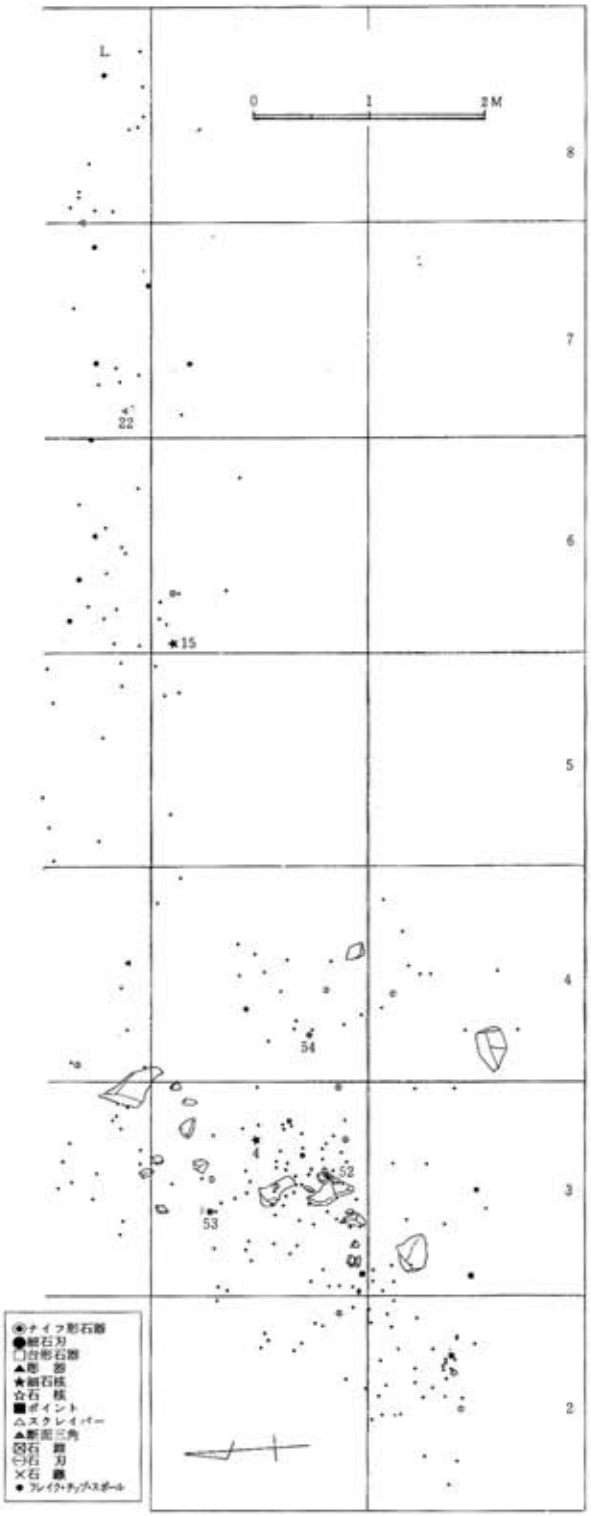


(3)生石遺跡の遺物

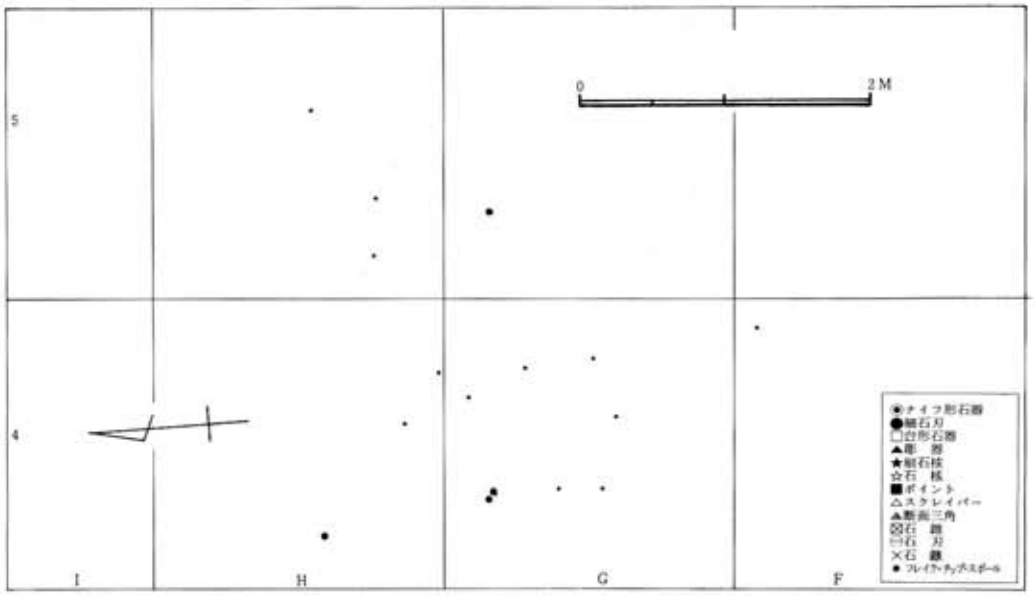
出土石器

生石遺跡の出土遺物総数は1880点であり、表土層（1層）より474点、2層より855点、3層で280点、4層で256点、5層で15点出土した。出土資料の割合は第12図、第13図に示すとおりである。石器率をみると3・4層が共通した点がみられそれと2層が若干異なる。前者の方が石器率は10％程（同時に剝片率も少い）低いが剝片率は20％程高い傾向を示す。細石刃は2・3・4層ともに30～40％と多量に出土しているのに比して、細石核は2層からの一点のみであることが注視される。ナイフ形石器は層位が下がるのに比して少なくなる。台形石器は2層に集中し、3層以下の出土はみられない。3層は2・4層に比して細石刃は10％程少ないが、刃器は逆に20％程多い傾向にある。石核は3・4層に比して2層が多い。石鏃が2層まで混入しているが耕作や攪乱の際に生じたものであろうし、同時に表土に包含された石器もそうした攪乱の際浮上したものであろう。土器片の出土は全くなかった。第5層の出土点数が極端に少ないのは第5層まで確認できる良質な場所が狭かったことにも起因している。以上のように各層位の間には特徴の

第６－３図　II区４層遺物分布図



第6－4図　II区5層遺物分布図



差は認められるが層位的に時代的な差を明らかにするまでにはいたっていない。

① **ナイフ形石器**〔Knife blades〕（第21図　1～54）

第1層から4層にかけて出土した54点のナイフ形石器（すべて黒曜石(obsidian)製）は第21図のとおりである。分類にあたっては『原(はる)遺跡』を参考にした。稜の通った刃器を素材として用い、ナイフ形石器としての形状、調整加工が整っている《a群》と、不整形な剝片の一部に調整加工を施した《b群》に分類した。b群は一般に鋭い尖端をもたない切截主体の機能をもつナイフ形石器が多く、一方整った形状をもつa群は鋭利な尖端とそれにつづく鋭利な刃部をもち、ナイフ形石器の主要な機能である刺突具としての形態を備えたものである。

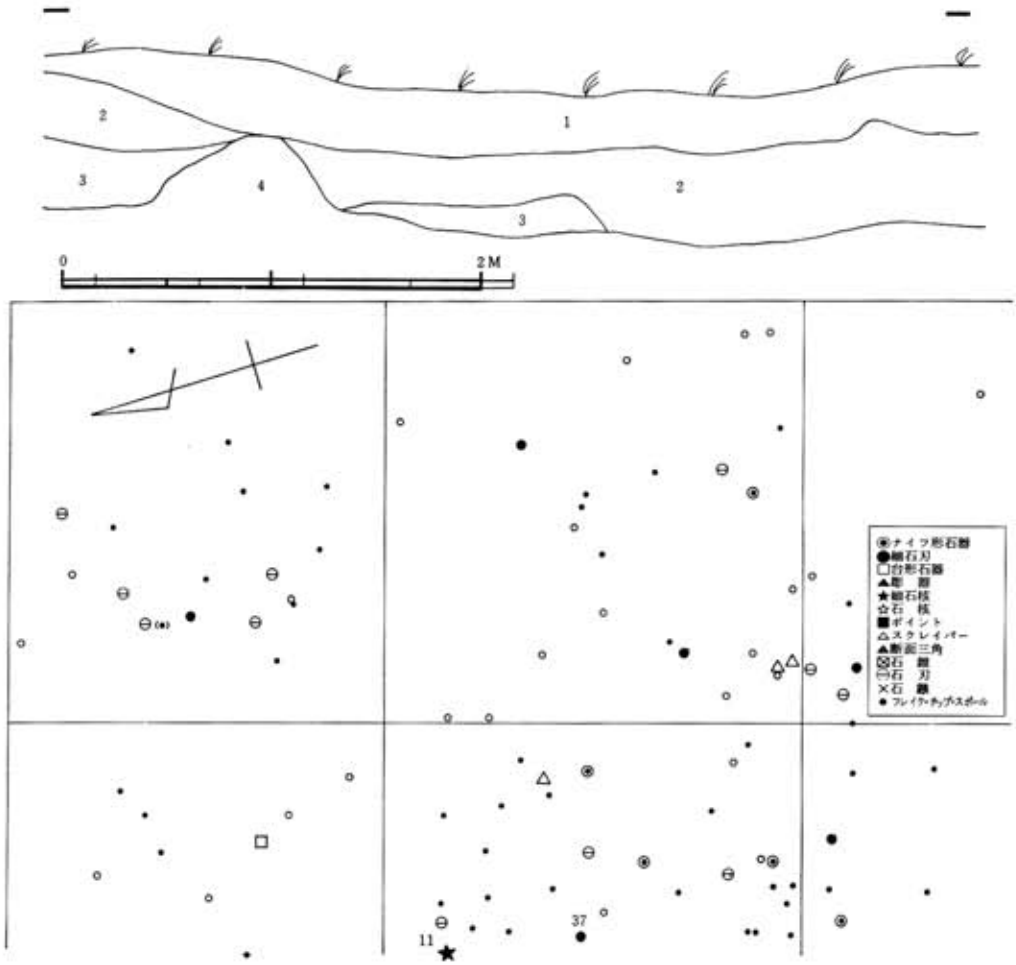
ナイフ形石器の形状

i）〈a1類〉　大形のナイフ形石器で、全長の2分の1ないしはそれ以上の長い刃部をもち剝離（blunting）が徹底して丹念に行なわれている。（**1・2・16～20**）

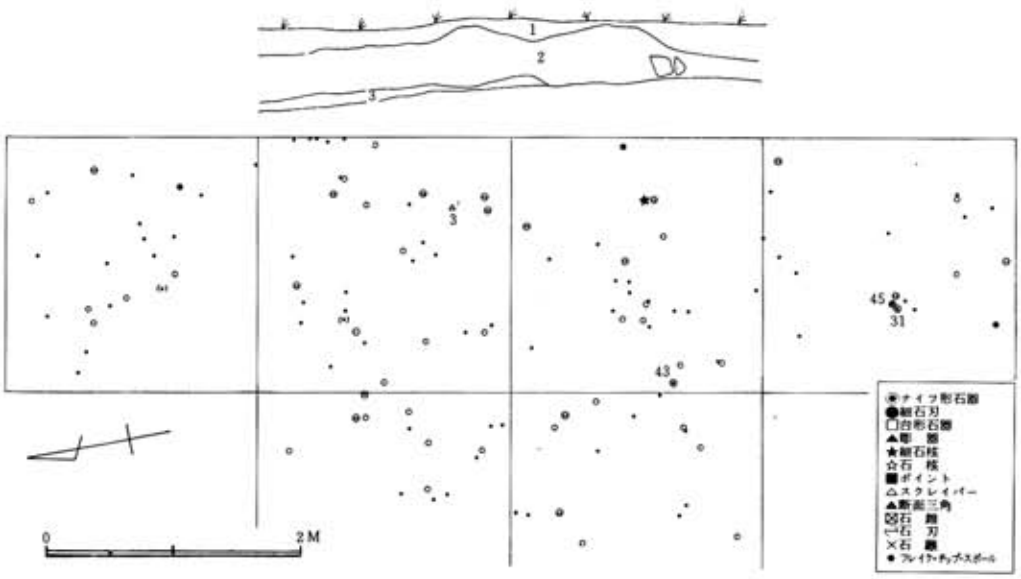
1．縞状に僅かに不純物をもつ不透明の黒曜石を用いている大形でかつ幅広の木の葉状をしたナイフ形石器である。刃長は器長の63％を占め、幅広の刃部には使用痕を思わせる剝離痕が著しい。背を作るための細部加工は下辺は傾斜がゆるやかであるが器厚の厚い上辺の部分は直角になり、先端部は鈍角に剝離されている。右辺は比較的ゆるやかな傾斜で加工されている。下辺では左右とも直線に近い外彎の傾向をみせ、上辺は内彎ぎみな直線で先端に達する。尖端をわずかに失損している。

2．半透明の良質の黒曜石を用いる。打瘤の方向は先端部にある。器長の64％もある長刃の刃部をもち、薄手で整った形をしている。縁辺は内彎し使用痕と思われる剝離痕、

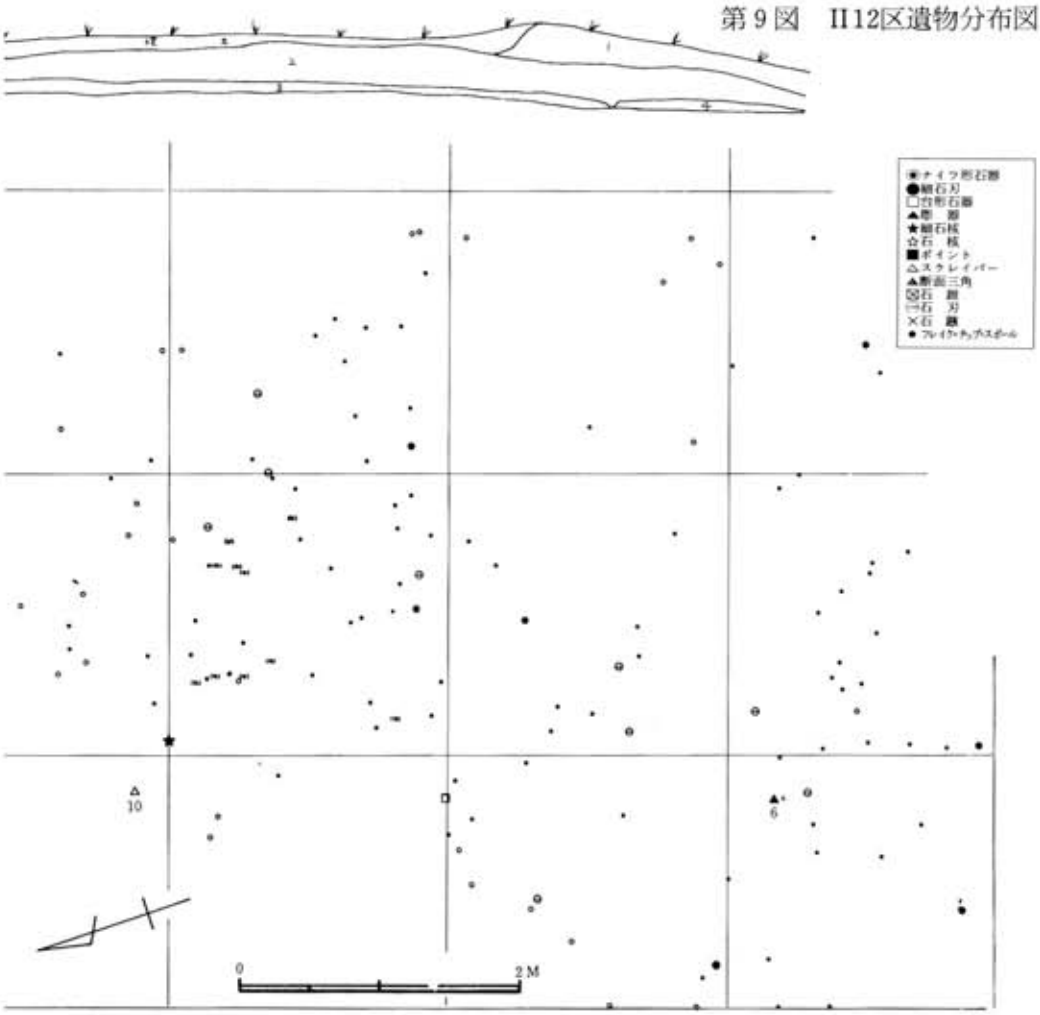
第７図　Ⅱ９区遺物分布図



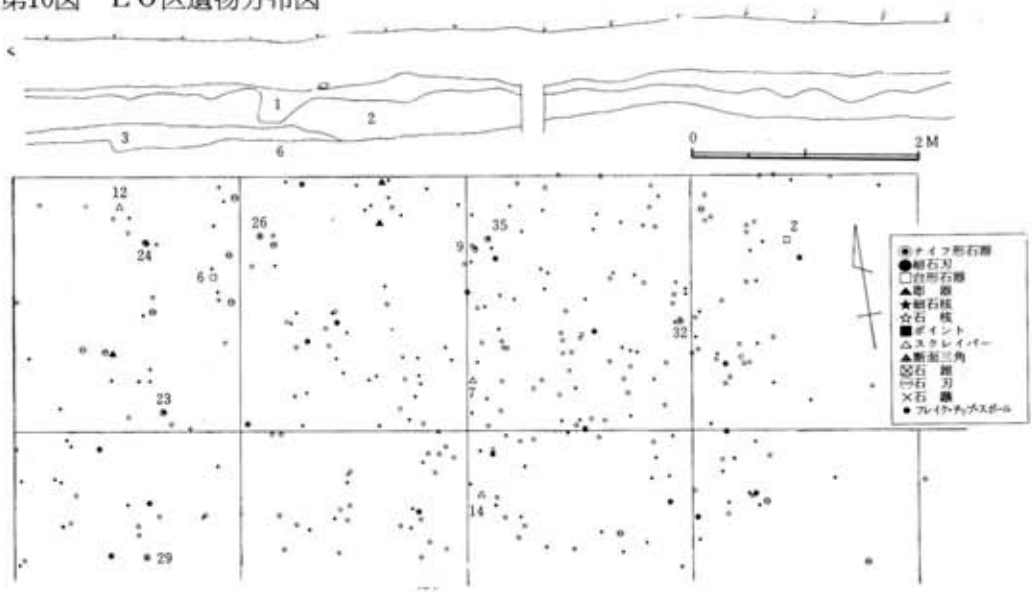
第８図　Ⅱ10区遺物分布図



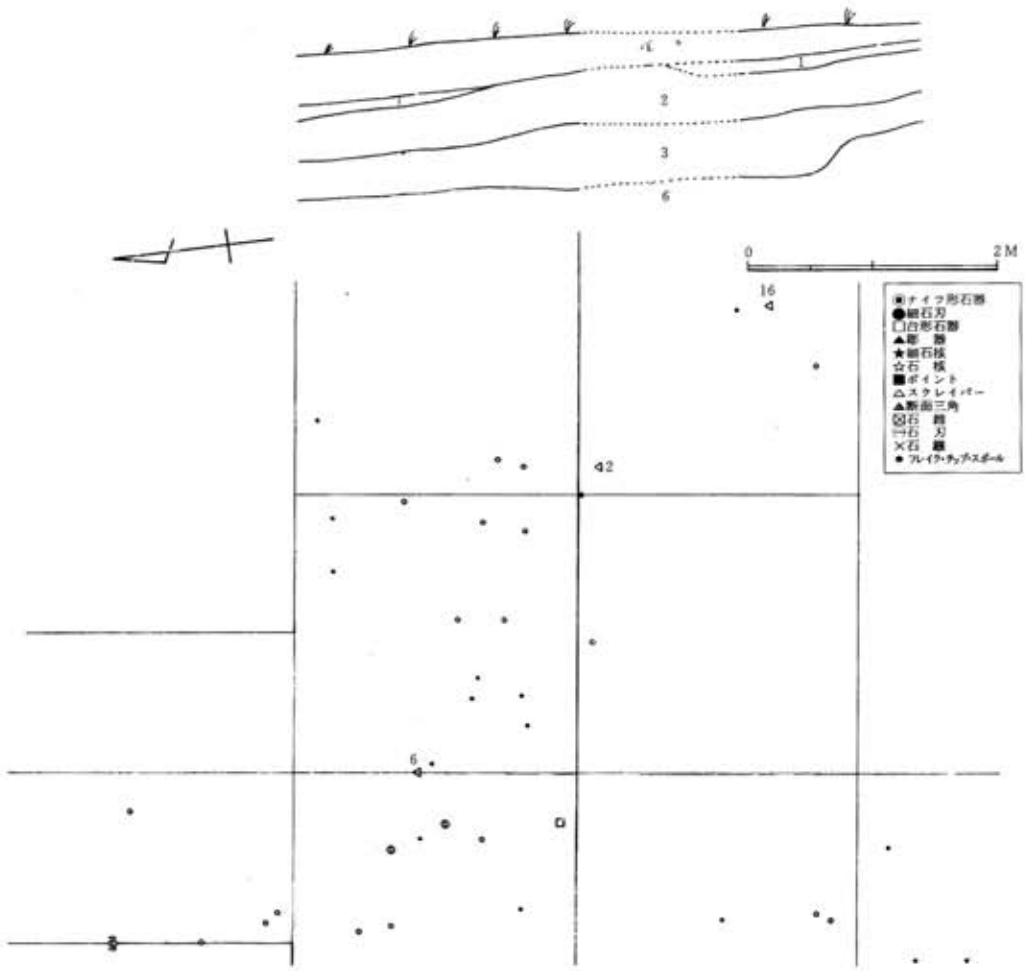
第９図　II12区遺物分布図



第10図　ＬＯ区遺物分布図



第11図　ＭＯ区遺物分布図



擦痕が残っている。先端は非常に尖鋭であり、わずかな欠損がある。細部加工（chipping）は、刃部の反対側にあたる左縁全体と基部に近い右縁の下辺に施される。また、先端部の1.3cmは正面側からも剥離加工している。先端部は鈍角の傾斜でわずかに外彎し、下辺は急傾斜の細かい剥離でわずかに内彎している。右辺の加工は細かい剥離で直線的である。保存状態はよい。

第12図　層位別出土遺物数

（　）は器種率

層位＼器種	ナイフ型石器	台形石器	彫器	細石刃	刃器	その他	細石核	石核	剥片と砕片	石鏃	計
1	15	2	0	41	38	7	0	11	353	7	474
2	31 (12)	6 (2)	7 (3)	99 (40)	83 (33)	24 (10)	1	11	593	3	855
3	5 (9)	0	0	16 (30)	28 (53)	4 (8)	0	1	226	—	280
4	3 (8)	0	1 (3)	17 (43)	14 (36)	4 (10)	0	2	215	—	256
5	0	0	0	3	0	0	0	0	12	—	15
計	54	8	8	176	163	36	1	25	1399	10	1880

第13図 2.3.4層の石器百分比

層位＼器種	石器	剥片	砕片	石核
1				
2	250 (29)%	229 (27)%	364 (43)%	12 (1)%
3	53 (19)	52 (19)	174 (62)	1 (0.4)
4	39 (15)	55 (21)	160 (63)	2 (1)
5				
計				

16．漆黒で良質の黒耀石を用いる。幅広で大形のナイフ形石器である。打瘤(Bulb)の方向は基部にあり、器長の66%をしめる刃部は右縁上辺にある。基部側は直線に近いが先端部ほど大きく外彎して使用痕と思われる剝離痕が表裏に多くみられる。背を作り出す細部加工は急傾斜の剝離が両端ほど丹念に施される。背部の外彎は対称になされ整っている。

17．半透明の良質の黒耀石を用いる。大形かつ幅広で比較的薄手の整った刃器(Blade)を素材にしている。刃部の使用痕は表裏とも多く、正面の縁辺に剝離痕が刃部上半身及び裏面には擦痕が不規則に走る。背の部分はほとんど直角に近い傾斜の細かい剝離で調整され、弓なりの整っかカーブ（直径約9㎝の弧）を作り出している。左辺の調整加工はほぼ刃長と同じ長さで大きく内彎させ細かい剝離が末端まで施されている。保存状態はとても良好。

18．出土した中で最大のナイフ形石器である。自然面を残したままの刃器を素材にしているが、比較的薄く整ったものである。背部の剝離は大きいが丹念に二重に調整され弓なりのカーブも整っている。保存状態が悪い。

ⅱ）〈ａ２類〉切出形のナイフ形石器といえるものである。小形のものが多いがなかには3.5㎝に近いものもある。稜が刃部にそって走るもの（横刃）と、稜が背部にそって走るもの（斜刃）、及び刃部が背に平行し基部器幅の中心にくるもの（縦刃）がある。

○横刃（4・5・21）○斜刃（3・22・47・48）○縦刃（23）

4．茶灰色に風化しているが良質の黒耀石を用いる。正面の中部と上部は横打の剝離のある刃器状剝片を素材にしている。細部加工は裏面からのみ行ない左右辺ともに急斜をなしている。背部は整ったカーブで外彎し、右辺は、内彎する尖端は背からの剝離で一層鋭利に作られている。刃縁は直線に近く刃こぼれが見られる。基部は左右から抉りぎににていねいに仕上げている。

5．器質、素材、形態とも4に似る。打瘤の方向は基部にあり、基部の加工は左右縁で抉って、細かい剝離が施されている。

21．縞状にわずかの不純物をもつ半透明の黒耀石が用いられている。正面は刃部の剝離面を除き自然面を残したままである。左上辺の刃部は外彎し、使用痕と思われる剝離痕が見られる。細部加工は左右辺とも細かい剝離で調整され、外彎する整ったカーブを示している。基部は両辺が鋭く交わる。先端は二本の樋状剝離（Fluting）で調整されている。

3．刃長の短かい部厚い刃部は直線に近い縁辺をもち、わずかに刃こぼれが見られる。背を作るための剝離は、先端部は正面側より、基部側は裏面より施し、基部に近くなる程細かくなり、外彎する。左辺は細かい剝離で直線を呈する。基部は薄くて少々欠損している。

第14図　ナイフ形石器の計測

（―― 測定不能）

石器番号	出土地点	層位	分類	素材	打点	最大器長	最大器幅	最大器厚	刃長	刃幅	欠損部	使用痕の有無	備　考
1	15B	1	a 1	刃器	先端	5.85 cm	1.95 cm	0.76 cm	3.71 cm	1.18 cm		○	
2	2 L	1	a 1	刃器	先端	4.40	1.42	0.43	2.80	0.72	完	○	両面加工
3	2区	1	a 2	刃器	先端	3.17	0.98	0.40	1.37	0.52	完		切り出し型で刃部が短い両面加工
4	2区	1	a 2	剥片	先端	3.51	1.24	0.49	1.86	0.72	完		
5	L O	1	a 2	剥片	基部	2.94	1.14	0.50	1.56	0.47	完		
6	2区	1	a 3	刃器	先端	3.20	1.52	0.49	1.90	1.07	先欠		a 3 型の典型的なもの 刃部が広い
7	12II	1	a 3	刃器	先端	——	14.5	0.37	——	——	先基欠		
8	2区	1	a 4	刃器	先端	——	1.10	0.24	1.81	0.40	基欠	○	
9	2区	1	a 5	刃器	先端	3.88	1.18	0.55	2.43	0.68	先欠	○	大型の a 5 型
10	2区	1	a 5	刃器	先端	——	0.86	0.50	1.55	0.65	基欠	○	
11	2区	1	?	剥片	先端	——	0.95	0.32	——	0.52	先欠		
12	12II	1	?	刃器	基部	——	1.62	0.43	——	——	先欠		基部裏面に調整剥離あり
13	L O	1	a ?	刃器	先端	——	1.35	0.40	——	0.97	先基欠	○	
14	13A	1	a ?	刃器	基部	——	——	0.27	——	——	先基欠		
15	L O	1	a ?	刃器	先端	——	——	——	——	——	先欠	○	小型
16	9 II	2	a 1	刃器	基部	4.81	1.95	0.59	3.16	1.04	完		基部をうすくするための剥離あり
17	13C	2	a 1	刃器	先端	6.42	1.91	0.58	2.97	0.85	完	○	
18	9 II	2	a 1	刃器	先端	4.44	2.62	0.62	——	1.40	基欠	○	大型のナイフ
19	12II	2	a 1	刃器	先端	——	2.08	0.79	——	1.20	先欠		主剥離面基部に加工
20	2区	2	a 1	刃器	先端	3.90	1.74	0.46	3.23	1.54	先欠		主剥離面基部に加工
21	9 II	2	a 2	剥片	先端	3.45	1.35	0.57	1.60	0.49	完		
22	9 D	2	a 2	刃器	先端	——	——	——	——	——	先基刃欠		
23	L O	2	a 2	刃器	先端	2.28	0.88	0.32	0.94	0.73	完	○	
24	L 1	2	a 3	刃器	先端	3.79	1.68	0.61	2.66	0.88	完	○	基部の調整が不完全
25	2区	2	a 3	刃器	先端	3.10	1.05	0.44	1.60	0.78	先欠		刃幅の広い切出し形
26	L 1	2	a 3	剥片	先端	3.70	1.24	0.55	2.13	0.70	完	○	
27	2区	2	a 4	刃器	先端？	——	1.01	0.32	——	0.57	基背欠		
28	2区	2	a 4	剥片	基部	——	0.92	0.30	——	0.55	基背欠	○	刃部を二段に加工
29	L O	2	a 4	刃器	先端	——	1.16	0.42	3.0	0.42	基欠		
30	1区	2	a 4	刃器	先端	——	1.19	0.36	——	0.78	基先欠	○	
31	10B	2	a ?	刃器	先端	——	——	——	——	——	基背欠	○	

石器番号	出土地点	層位	分類	素材	打点	最大器長	最大器幅	最大器厚	刃長	刃幅	欠損部	使用痕の有無	備　　考
32	LO	2	a ?	剥片	先端	—— cm	1.39 cm	4.1 cm	—— cm	0.74 cm	基欠	○	
33	9A	2	a 5	刃器	先端	3.07	0.90	0.31	1.67	0.63	完	○	刃部先端を加工
34	2区	2	a 5	刃器	先端	3.0	1.09	0.44	1.67	0.93	先欠		
35	LO	2	a 5	刃器	先端	2.90	1.06	0.42	1.52	0.57	完	○	
36	2区	2	a 5	剥片	先端	——	0.95	0.48	——	0.50	先欠	○	
37	13E	2	b	剥片	基部	4.71	1.98	0.73	4.24	1.17	完		刃部二節よりなる 裏面にも剥離 刃側に剥離がない
38	16A	2	b	刃器	先端	——	1.16	0.59	——	1.05	基欠		剥離を表裏から
39	2区	2	b	刃器	先端	——	1.56	0.69	3.03	0.60	基欠	○	
40	2区	2	b	剥片	基部	——	1.23	0.51	——	上0.38 下0.74	基先欠		
41	2区	2	b ?	刃器	基部	4.51	2.01	0.92	2.93	0.85	刃傷	○	
42	2区	2	a ?	刃器	基部	——	0.93	0.36	——	——	先欠	○	
43	10II	2	?	剥片	先端	——	——	0.60	——	——	先欠		
44	10D	2	a ?	刃器	?	——	——	0.27	——	0.61	先基欠	○	
45	10B	2	a ?	刃器	先端	——	——	——	——	——	先欠		基部裏面に加工あり
46	13C	2	a ?	剥片	基部	——	——	0.20	——	——	背欠	○	
47	2区	3	a 2	刃器	先端	2.35	0.92	0.34	1.17	0.46	先傷	○	
48	2区	3	a 2	刃器	先端	——	1.04	0.32	——	0.47	先欠	○	
49	2区	3	a 3	刃器	先端	3.62	1.19	0.36	1.95	0.91	先傷	○	
50	2区	3	a ?	刃器	先端	——	1.24	0.44	——	0.91	基欠		
51	2区	3	a 5	刃器	先端	——	0.93	0.25	——	0.36	先欠	○	
52	2区	4	a 4	刃器	先端	——	1.25	0.3	1.48	0.57	基部	○	
53	2区	4	a 4	刃器	先端	——	1.35	0.43	——	0.77	基先欠	○	基部裏調整あり
54	2区	4	a 5	刃器	先端	3.52	1.26	0.51	2.39	0.85	先傷	○	裏面に剥離使用痕　素材は雑な刃部を使う　プランティングは表裏両面から

第15図　ナイフ形石器の分類　　（番号は石器番号）

分類 / 層位	a 1	a 2	a 3	a 4	a 5	b	不明
1	1 . 2	3 . 4 . 5	6 . 7	8	9 . 10	———	11
2	16.17.18.19 20	21 . 22 . 23	24 . 25 . 26	27.28.29.30	33.34.35.36	37.38.39.40 41	31.32.42.43 44.45.46
3	———	47 . 48	49	———	———	———	50 . 51
4	———	———	———	52 . 53	54	———	———

47．半透明の良質の黒耀石を用いる。形態は３と似るが３より小形で部厚い。最大厚が基部にあり先端は鋭く、刃部には使用痕と思われる剥離痕が中央部から基部の方に集中している。

23．黒縞のはいる半透明の良質の黒耀石を用いる。器長器幅とも54点の中で最小のナイフ形石器である。背部の加工は細かく直角に近い急斜の剥離で彎曲の大きいカーブを示す。ほぼ中央部に大きな抉りのある点は注意される。左辺は背部の抉りと合わせるような内彎を示す。基部も丹念に加工されている。先端部は背からの剥離で鋭利に整えられている。背と平行に走る刃部に短かく使用痕が見られる。

ⅲ）〈ａ３類〉　全体に三角形に近い形状をもつもので、背部が直線に近いものが多い。また扁平で幅広い刃部を形成する例がある。（６、７、24～26、49）

６．縞文様のある良質の黒耀石を用い、幅広の刃部をもつ三角形の切出形のナイフ形石器である。背部加工は入念に施され、先端及び基部から中心にむかった二か所で内彎するが、この傾向は左辺にもみられる。基部は錐器を思わせるように鋭利である。刃部はほぼ直線を呈し、使用痕と思われる刃こぼれがある。

24．半透明の良質の黒耀石を用いる。主剥離面（Main flake surface）の凹凸の差が大きく、刃部が外彎する。幅広の刃部には、使用痕と思われる剥離痕が縁辺全体に残されている。背部を作り出す剥離は直角に近い急斜をなし、やや外彎ぎみである。先端は鋭く尖らせている。基部の器厚はうすく剥離調整はなされていない。

25．漆黒の黒耀石を用いている。全体的に部厚いが、小形精良のナイフ形石器である。刃長は器長の52％あり、刃こぼれがみられる。先端を欠失している。

26．中央部が極端に部厚い刃器状剥片（Blade flake）を用いている。左右辺とも先端部が鋭角の三角形を呈する。細部加工は入念に施されている。刃部はやや内外にカーブするが直線に近く、全縁に使用痕（剥離痕）がみられる。基部裏面に調整がある。刃部から二条の並行剥離（Ripple chipping）を施し、その内側に軽く背部側から加撃して剥離していて、基部が薄くなっている。

49．漆黒で良質の黒耀石を用いている。刃部の広い、基部のしっかりした、三角形を呈するナイフ形石器である。器厚は全体的に薄く、刃長が比較的短い整った形状を呈す。

ⅳ）〈ａ４類〉　刃部の形や位置はちょうどａ１類とａ２類の中間的といえるものである。薄手の素材が用いられ、全体に小形で木葉状の形状をもつものである。周辺の調整剥離が少ないのも特徴といえる。出土品の中で完形品がない。（８、27～30、52、53）

８．薄手で縦長のナイフ形石器である。細部加工は左右辺とも急斜で細かく剥離されている。先端は背部加工で約35度の鋭利さに仕上げられている。刃部はほぼ直線的で中央部基部側に多くの使用痕がみられる。基部を欠失している。

27．半透明の黒耀石を用い、細身で薄手の小形ナイフ形石器である。最厚部が先端に

あって，刃部が大きく外彎している。基部と背部を欠失している。

28．刃器状剝片を素材にした、小形薄手のナイフ形石器である。27と同様に基部と背部を欠失しているが、刃部側下辺の調整剝離は確認できない。背部は整った弓なりのカーブを画いている。打瘤の方向は基部にあり、刃こぼれが多い。

29．縦長で薄手である。背部を作り出す剝離はまず間隔をとって大きく施こし、そのあとに細かな二次調整を加えている。先端は内彎させながら鋭く作り出している。刃縁は凹凸はあるが直線に近い。使用痕も確認できる。最厚部は先端にあって、基部側は極端に薄くなり欠損している。

52．薄手幅広のナイフ形石器。最厚部が先端にあり細部加工は、背部の上半身のみに施される。基部は非常に薄く欠損している。刃部は中央部が外彎し使用痕がみられる。尖端は鋭い。

53．薄手で幅広、中形のナイフ形石器である。細部加工は52と同じく背部上半身のみに施されている。

V）〈a 5類〉　小形で柳葉形を呈する。槍先形尖頭器に近い形状をもつナイフ形石器である。（9、10、33～36、54）

9．半透明の微気孔の多い黒耀石を用いる。打瘤の方向は先端部にある。厚手ではあるが整った柳葉形である。背を作り出す剝離は、大きく急斜に加工されたあと二次調整が施されている。背部の厚さに比して刃部は薄手である。最厚部は基部にあり、それを薄く削るように裏面調整がなされている。裏面の加工は基部の方向から4回の剝離で調整されている。

10．半透明の黒耀石の部厚い刃器を素材にしている。小形で、刃部の断面角は鈍く中央部で42度ある。使用痕と思われる剝離痕は刃部の下辺に多く深く観察される。

33．漆黒の良質の黒耀石を用いる。小形で縦長の柳葉形の精良なナイフ形石器である。刃長は比較的長くて器長の54％あり、わずかに内彎している。先端は器心に向かう一本の樋状剝離（fluting）で更に鋭さを増し、尖端から元部まで使用痕がみられる。背を作る剝離は、基部側は傾斜がゆるやかだがだんだん急斜し、先端では鈍角になっている。右辺の調整は細かい剝離でなされている。

34．半透明の比較的良質の黒耀石を用いているが主剝離面（Main flakesurface）のringが深いために刃部が凹んでいる。細部加工は入念に施されて、先端部近くでは傾斜が少なく尖頭状の鋭利さを一そう増している。使用痕と思われる剝離痕が尖端部にもみられる。

35．主剝離面の屈曲が大きい刃器を用いているが、精良なナイフ形石器である。最厚部は基部にあり、三角状に丁寧に剝離調整がなされている。刃部は外彎し、全縁に使用痕がみられる。

54．器幅はやや広めで、整った形状のナイフ形石器である。背部を作り出す加工は、主剥離面から行なわれているが、尖端から中央部へ20mmは正面からも調整されている特殊加工である。刃部は、先端部の約16mmと中央部の約８mmの刃の二段の刃より成る。使用痕と思われる剥離痕は中央刃部にはほとんどみられないが、先端部の刃には深い剥離痕が一面にみられる。基部裏面に調整剥離があり、左より４撃右より３撃の剥離は並行剥離を思わせる。打瘤（Bulb）は先端の方向にある。

vi）〈ｂ類〉　不整形な剥離を素材にした切截主体の機能をもつナイフ形石器である。（37～41）

37．半透明の良質の黒耀石を素材にしている。右辺を刃部にしているが上下部に分かれ両刃とも内彎している。使用痕は両刃とも各々中央部分より先端側にみられる。背を作り出すための剥離は急斜角で、先端部をめぐって入念に施され整ったカーブを呈している。右辺の調整は最小限にとどめている。

38．表裏とも稜のない剥片（Flake）を素材にしている。背部の加工は、表裏面から調整する特殊加工である。裏面は全縁にわたって調整されていて、それに加え、正面からは先端部から18mmの部分を調整している。刃部側の調整剥離は行なわれていない。使用痕は全縁に認められるが上辺の方が大きい。基部を欠失している。

39．微小気孔の多い黒耀石の剥片を素材にしている。約7mmの最厚部が基部にあり、全体的に部厚い。背を作り出す剥離は急斜に入念に施され、ゆるやかなカーブを呈する。左辺の調整はとても少なく、基部は切取られている。使用痕と思われる剥離痕は全縁に入っていて上辺部は特に深くて大きい。

41．気孔の多いあまり良質でない黒耀石の剥片を利用している。細部加工はなくナイフ形石器と呼ぶには疑問だが、素材形態それに使用痕の状態からナイフ形石器として扱っておく。

②　細石刃　〔Micro blade〕（第22図　１～114）

第１層から５層にかけて出土した細石刃は176点である。そのうち99点（全体の56％）は２層より出土し、３・４・５層からの出土は激減する。細石刃の諸計測、使用痕の状況等については、第16図の一覧表に示した。

i）細石刃の切截

刃器や細石刃は別離されたままの完形で使用されるものでなく、分割して使用されたということは生石遺跡の場合でもいえるであろう。各層位別の折断部位の状況は第17図のとおりである。

第３層を除くと各層とも中間部が圧倒的に多い。全体で61％が中間部で、それに頭部の30％が続く。中間部の108点に対する各部分の割合は、完形約４％、頭部約47％、末端

約11％である。これを原遺跡（完形約８％、頭部約60％、末端約23％）、休場石器文化（完形約12％、頭部約117％、末端約95％）と比較してみると、完形、頭部、末端とも極端に少ない。ほとんどの細石刃には二次加工は施していないが、19、65、81など６点に剝離（blunting）がみられる。

ⅱ）細石刃の大きさ

細石刃の器幅を計測し層位別に分類すると、第18図のようになる。まず大きさを、９㎜以上、８～７㎜台、６～５㎜台、５㎜未満の４グループに分ける。頭部も中間部も８・７グループと６・５グループに各々約４割ずつ集中している。５㎜未満グループは皆無に等しく、９㎜以上グループが約２割を占める。頭部を層位別にみると、２層で６・５グループが49％を占め、８・７グループは29％になっているが、第３層では、８・７グループの62％が６・５グループの25％を大きく上まわっている。中間部は、８・７グループと６・５グループが約４割ずつになっているが、３層では９㎜以上グループが約７割を占める。４層では、８・７グループが多いのが注目される。因みに原遺跡の例をあげると、８・７グループがＡ地点に、４㎜以下グループがＢ地点に各々目立つほどの対称的な集中性をもっている。

ⅲ）形状と使用痕

全体的には安定した形状の細石刃（並行する縁と稜をもち、台形・三角形の断面）が多い。使用痕の観察される石器は第19図のとおりである。全体としては75％の細石刃に使用痕がみられる。中間部で80％、頭部、末端部でも７割弱の細石刃に使用痕がみられる。原遺跡（中間部で80％以上、頭部末端部で50％以上）と比べ、中間部は差はないが、頭部、末端部では非常に高い。

③　台形石器〔Trapeze〕（第23図１～６）

台形石器は第１層（表土層）から２点と２層から６点の計８点が出土した。この中で６点をここでは取上げたい。『原遺跡』の形状分類を基本にして、刃器（Blade）あるいは刃器状剝片（Blade flake）の一部を折断して素材にしている《ａ類》と、不安定の剝片（Flake）を素材にしている《ｂ類》に分けた。ａ類の中で折断した両側縁全体と、部分的には基部にも調整剝離を加えて整形している《ａ１類》と、調整剝離が両側縁のうち部分的にある《ａ２類》に分けるが、ａ１・２類とも出土していない。さらに、《ａ３類》は刃器の中間部を折りとったままの資料である。ｂ類を、不安定な剝片の両側縁全般に調整剝離が施してある資料《ｂ１類》と、ｂ１類の台形石器と同じ機能をそのままで果たし得ると思われる形状を指す資料《ｂ２類》に分ける。

ⅰ）〈ａ３類〉（第23図・１）

１．ただ一点だけの讃岐石（sanukite）製で比較的薄手の刃器状剝片を素材にしてい

第16図　細石刃の計測

番号	図面番号	出土地点	層位	最大器長	最大器幅	切截分類	使用痕の有無	備考	番号	図面番号	出土地点	層位	最大器長	最大器幅	切截分類	使用痕の有無	備考
1	1	II	1	25.5	6.8	完	×	打面線状	32		LO	1	8.0	6.8	中	○	
2	2	15D	1	15.2	8.7	頭	○		33		1L	1	11.2	6.8	中	○	
3	3	13E	1	16.8	7.9	頭	○		34		LO	1	11.6	5.5	中	○	
4	4	LO	1	13.7	6.2	頭	×	打面線状	35		MO	1	6.0	5.5	中	○	
5	5	II	1	8.5	6.6	頭	○	打面調整あり	36		MO	1	8.0	5.0	中	○	
6	6	LO	1	16.6	8.2	頭	—	打面線状	37		II	1	9.8	6.9	中	○	
7	7	LO	1	6.6	7.6	頭	○	打面線状	38		LO	1	6.2	6.0	中	○	
8	8	2L	1	14.2	9.5	頭	×	帯状の細かい打面あり	39		2L	1	11.6	8.8	中	○	
9	9	2L	1	25.2	8.6	中	○		40		12B	1	8.3	10.8	中	○	
10	10	15D	1	10.2	6.9	中	○	ブランティングあり	41		12II	1	9.0	5.4	末	○	
11	11	9II	1	19.4	7.6	中	○		42	22	LO	2	14.7	6.1	完	○	打面線状
12	12	LO	1	22.7	7.3	中	○		43	23	II	2	26.2	6.5	完	○	打面線状
13	13	LO	1	20.1	7.2	中	○		44	24	II	2	18.1	6.3	頭	○	打面線状
14	14	LO	1	22.1	6.4	中	×		45	25	II	2	17.1	7.0	頭	○	打面線状
15	15	15C	1	13.6	7.0	中	○		46	26	II	2	15.5	10.0	頭	×	
16	16	LO	1	12.0	8.1	中	○		47	27	LO	2	13.6	5.1	頭	×	
17	17	10II	1	14.9	8.7	中	○		48	28	II	2	13.1	6.2	頭	○	打面調整あり
18	18	LO	1	8.0	5.0	中	○		49	29	11A	2	16.1	10.5	頭	○	*
19	19	11F	1	12.8	8.5	中	○	ブランティングある	50	30	LO	2	14.2	8.6	頭	○	
20	20	11D	1	7.5	4.6	中	○		51	31	II	2	18.6	5.8	頭	○	打面線状
21	21	9A	1	16.0	8.4	末	○		52	32	10II	2	26.1	6.2	頭	×	打面調整あり
22		LO	1	9.0	8.6	頭	○	打面線状	53	33	II	2	11.7	6.3	頭	○	*
23		II	1	14.7	6.9	中	×		54	34	II	2	20.6	6.6	頭	×	
24		LO	1	12.1	7.0	中	×		55	35	II	2	14.0	9.4	頭	—	打面線状
25		II	1	9.4	5.6	中	×		56	36	LO	2	14.1	7.1	頭	○	打面線状
26		II区	1	11.4	8.6	中	○		57	37	LO	2	15.6	7.2	頭	×	打面線状
27		16B	1	11.3	8.8	中	○		58	38	9II	2	15.7	9.0	頭	○	打面線状
28		LO	1	18.4	9.6	中	○		59	39	II	2	28.3	6.1	頭	○	打面調整あり
29		LO	1	8.4	8.8	中	○		60	40	II	2	9.6	6.4	頭	○	
30		12II	1	7.6	11.7	中	○		61	41	LO	2	11.7	6.1	頭	○	打面調整あり
31		LO	1	12.0	9.4	中	○		62	42	MO	2	23.0	6.7	頭	○	

番号	図面番号	出土地点	層位	最大器長	最大器幅	切截分類	使用痕の有無	備考	番号	図面番号	出土地点	層位	最大器長	最大器幅	切截分類	使用痕の有無	備考
				mm	mm								mm	mm			
63	43	LO	2	10.1	3.9	頭	×	打面線状	94	74	9II	2	8.0	5.6	中	×	
64	44	II	2	15.4	7.6	頭	○	打面線状	95	75	10II	2	23.1	9.8	中	○	
65	45	2L	2	14.8	8.2	頭	○		96	76	10II	2	12.5	11.4	中	○	
66	46	9D	2	11.8	6.5	頭	×	打面線状	97	77	II	2	14.0	6.2	中	×	
67	47	II	2	10.5	9.0	中	×		98	78	LO	2	14.1	7.2	中	○	
68	48	13A	2	11.9	8.5	中	○		99	79	II	2	14.8	6.9	中	○	
69	49	9II	2	20.8	5.7	中	○		100	80	9II	2	9.4	8.4	中	○	
70	50	II	2	7.8	9.5	中	○		101	81	11A	2	14.1	8.0	中	○	プランティングあり
71	51	10B	2	12.6	6.6	中	○		102	82	II	2	13.6	8.6	中	○	
72	52	MO	2	16.4	9.0	中	○		103	83	II	2	14.5	8.0	中	○	
73	53	L1	2	11.6	7.2	中	○		104	84	12II	2	10.1	6.0	中	?	プランティングあり
74	54	II	2	16.9	7.4	中	○		105	85	LO	2	9.4	4.0	中	○	小形
75	55	II	2	13.2	5.0	中	○		106	86	II	2	17.6	7.1	末	○	
76	56	LO	2	11.2	7.4	中	○		107	87	9II	2	22.9	8.4	末	×	
77	57	LO	2	9.0	5.3	中	○		108	88	LO	2	22.9	7.6	末	○	
78	58	II	2	11.0	6.9	中	×		109		1L	2	14.0	8.4	頭	○	打面調整あり
79	59	12II	2	15.2	7.1	中	○		110		II	2	20.6	7.9	頭	○	打面線状
80	60	II	2	15.1	6.7	中	○		111		II	2	18.1	8.6	頭	○	打面線状
81	61	LO	2	18.9	7.0	中	○		112		LO	2	10.7	7.1	頭	○	打面線状
82	62	II	2	18.3	6.9	中	○		113		II	2	9.6	6.0	頭	○	打面線状
83	63	LO	2	16.1	5.8	中	○	打面調整なし	114		12II	2	9.8	5.6	頭	○	
84	64	2L	2	18.6	6.0	中	×		115		13A	2	10.8	9.6	頭	○	打面調整あり
85	65	10C	2	17.4	6.8	中	○	プランティングあり	116		13A	2	11.6	9.8	頭	○	打面調整あり
86	66	9II	2	13.5	6.8	中	×		117		2L	2	9.4	10.6	中	○	
87	67	II	2	24.6	9.8	中	○		118		12II	2	7.2	6.5	中	—	
88	68	II	2	21.6	8.0	中	○		119		II	2	6.1	5.0	中	×	
89	69	12II	2	20.5	6.2	中	○		120		10II	2	6.2	11.4	中	○	
90	70	LO	2	15.4	8.1	中	○		121		II	2	6.4	7.0	中	○	
91	71	II	2	18.7	7.0	中	○		122		9II	2	12.5	7.3	中	○	
92	72	II	2	10.6	6.4	中	○		123		II	2	13.2	7.7	中	○	
93	73	10B	2	20.7	8.9	中	○		124		LO	2	13.1	10.0	中	×	

番号	図面番号	出土地点	層位	最大器長	最大器幅	切截分類	使用痕の有無	備考	番号	図面番号	出土地点	層位	最大器長	最大器幅	切截分類	使用痕の有無	備考
125		LO	2	15.6㎜	5.6㎜	中	○		151	99	II	3	14.8㎜	10.2㎜	中	—	
126		II	2	9.5	6.6	中	○		152	100	II	3	23.3	8.8	末	○	
127		II	2	9.6	7.6	中	×		153		II	3	12.8	7.3	頭	○	打面線状
128		12II	2	8.7	5.9	中	○		154		10II	3	8.4	8.0	頭	—	打面調整あり
129		12II	2	9.6	6.9	中	○		155		16D	3	19.7	11.1	中	○	
130		LO	2	12.4	7.1	中	○		156		II	3	14.0	9.1	中	○	
131		LO	2	8.4	8.3	中	○		157	101	II	4	22.5	7.2	完	×	打面調整あり
132		LO	2	8.4	6.5	中	○		158	102	II	4	20.1	5.1	頭	×	打面調整あり
133		II	2	6.9	7.5	中	○		159	103	II	4	11.2	6.4	頭	○	打面線状
134		12II	2	7.9	7.0	中	×		160	104	II	4	9.0	11.6	頭	×	打面調整あり
135		II	2	10.0	6.5	中	○		161	105	II	4	16.7	8.0	中	○	
136		9 II	2	10.3	8.0	中	○		162	106	II	4	12.0	5.7	中	○	
137		10A	2	14.5	5.8	中	○		163	107	II	4	14.1	7.7	中	×	
138		10B	2	11.6	9.7	中	○		164	108	II	4	7.9	7.6	中	×	
139		12D	2	14.0	6.5	末	×		165	109	II	4	8.6	8.0	中	○	
140		9 II	2	8.0	11.3	末	—		166	110	II	4	19.2	8.4	中	○	
141	89	II	3	21.5	8.2	頭	○	打面調整あり	167	111	II	4	7.6	7.9	頭	○	
142	90	II	3	11.6	8.6	頭	×	*	168	112	II	4	12.3	6.5	末	×	
143	91	II	3	14.8	12.3	頭	×	打面線状	169		II	4	15.3	9.2	頭	○	打面線状
144	92	II	3	8.6	6.4	頭	○	打面線状	170		II	4	18.1	9.2	中	○	
145	93	9 D	3	12.2	6.5	頭	○	打面線状	171		II	4	13.6	7.1	中	○	
146	94	II	3	20.6	8.0	頭	○	打面線状	172		II	4	9.8	6.9	中	○	
147	95	II	3	14.0	6.6	中	×		173		II	4	15.8	5.8	末	○	
148	96	II	3	10.0	6.2	中	×		174	113	II	5	10.7	7.9	中	○	
149	97	II	3	20.2	9.9	中	○		175	114	II	5	9.6	8.5	末	○	
150	98	II	3	6.5	10.4	中	○	片刃部プランティング	176		II	5	7.9	4.9	末	○	

第17図　細石刃の折断部位

（　%）は各層位の合計を100とする
【　%】は総合計の176点を100とする

折断部位＼層位	1	2	3	4	5	計
完成品	1 （2%）	2 （2%）	0	1 （6%）	0	4 【2%】
尾部折断（頭部）	8 （20）	31 （31）	8 （50%）	5 （29）	0	52 【30】
尾部頭部折断（中間部）	30 （73）	61 （62）	7 （44）	9 （53）	1 （33%）	108 【61】
頭部折断（末端部）	2 （5）	5 （5）	1 （6）	2 （12）	2 （67）	12 【7】
計	41 【23】	99 【56】	16 【9】	17 【10】	3 【2】	176 【100】

第18図　細石刃の大きさ（器幅）の分類

（　%）は各層位の合計を100とする
（　%）は総合計を100とする

折断	層位＼大きさ	10mm以上	9mm	8mm	7mm	6mm	5mm	5mm未満	計
尾部折断（頭部）	1	0 (13%)	1	3 (62%)	2	2 (25%)	0	0	8
	2	2 (19)	4	3 (29)	6	11 (49)	4	1 (3 %)	31
	3	1 (13)	0	4 (62)	1	2 (25)	0	0	8
	4	1 (40)	1	0 (20)	1	1 (40)	1	0	5
	5	0	0	0	0	0	0	0	0
	計	4 (19)	6	10 (38)	10	16 (41)	5	1 (2)	52 (100)
尾部頭部折断（中間部）	1	2 (13)	2	7 (40)	5	8 (44)	5	不明 1 (3)	30
	2	5 (21)	8	9 (38)	14	17 (39)	7	1 (2)	61
	3	3 (71)	2	0	0	2 (29)	0	0	7
	4	0 (11)	1	3 (67)	3	1 (22)	1	0	9
	5	1	0	0	0	0	0	0	1
	計	11 (22)	13	19 (38)	22	28 (38)	13	1 (1) 1 (1)	108 (100)

る。両端を折断しているが、とくに右辺は背部を大きく切っている。両側縁の調整は施されていないが形状からみてａ３類に入れる。刃部は使用痕と思われる刃こぼれがみられる。

ⅱ）〈ｂ１類〉（第23図・２）

２．素材に黒曜石の剝片を用いる。調整剝離は両側縁に施されている。左縁にあった打面（Platform）は裏面からの調整剝離で取去され、右縁は正面からの調整が丁寧に行なわれている。基部の加工はみられない。刃部には使用痕と思われる剝離痕が全面に深くみられる。

ⅲ）〈ｂ２類〉（第23図　３～６）

３．幅広の剝片を素材にしている。刃部の断面は比較的に薄手である。調整剝離は右

第19図　使用痕のある細石刃率

折断＼層位	1	2	3	4	5	計
完形品	0/1 (0%)	2/2 (100%)	0/0 (0%)	0/1 (0%)	0/0 (0%)	2/4 (50%)
尾部折断	5/8 (63)	23/31 (74)	5/8 (63)	3/5 (60)	0/0 (0)	36/52 (69)
尾部頭部折断	26/30 (87)	48/61 (79)	4/7 (57)	7/9 (78)	1/1 (100)	86/108 (80)
頭部折断	2/2 (100)	2/5 (40)	1/1 (100)	1/2 (50)	2/2 (100)	8/12 (67)
計	33/41 (80)	75/99 (76)	10/16 (63)	11/17 (65)	3/3 (100)	132/176 (75)

辺に入念に施されるが、左辺は正面からの折断を受けたままである。使用痕と思われる剝離痕は刃部全縁にわたっている。

4．部厚い粗雑な剝片を素材にしている。調整剝離は左縁に施されているが、右縁は打面が残されたままである。背部は簡単な角潰し調整が行なわれている。刃部は山型になっているが使用剝離痕が全縁に見られる。

5．刃器状剝片を素材にしている。調整剝離は右辺に裏面から入念に施されているが、刃部とほぼ直角に交わる左縁は自然面が残されている。刃部には使用痕と思われる刃こぼれがみられる。

6．粗雑な剝離加工が左縁にあり、右縁には上辺に自然面がわずかに残されている。刃部には使用剝離痕が多くみられる。

④ 彫器〔Graver〕（第24図　1～8）

2層で7点、4層で1点の出土があった。黒耀石の刃器（Blade)や剝片(Blade flake)を素材にしているが形態は多様である。打面調整のみられるのは、1～4、8である。59、63は、Graver spallと思われる。全部黒耀石製である。

1．粗悪な幅広の縦長刃器状剝片を素材に、加撃点側と反対側の両側縁に刃潰し加工剝離調整(Retouching)している。そのあと裏面の方から周辺加工(Chipping）を行なって、最後に、数回の加撃で彫刻刀面（Graver facet）を形成している。左辺の方は長軸に平行であるが、右辺の方は右側辺の方に大きく流れている。3層から出土した第29図の58のGraver spaliと接合する。

2．良質の縦長刃器を素材としている。打面調整は上下両端に施し、打撃点部の反対側から加撃（faceting of graver）して彫刻刀面を作出している。両側縁の刃潰し加工（blunting）は小さいが全縁に及んでいる。facetのよじれは小さい。

3．大形の縦長剝片を素材にしている。打面を調整し、右側辺の刃潰し加工（blunting）は入念に施されている。彫刻刀面は長軸と平行に作出している。器長は53.5mmあり、石質は飴色を呈す黒耀石である。

4．粗雑な厚手の剝片を素材にしている。打面と打瘤（Bulb）を除去するような打面調整が行なわれているが荒い。

5・6．両者とも縦長厚手の剝片を素材にしている角形の彫器である。打面調整は、6は不明だが、5は刃器の末端部を折断して打面にしているが調整痕はみられない。両者ともよじれが大きい。

7．大形刃器状剝片を素材に用いる。facetingが反対側の左辺まで走ってしまっている。刃潰し加工（blunting）は右辺は全縁施されているが左縁にはない。

8．自然面を残す粗悪な剝片を素材にする。まず自然面を残す末端部に裏面の方から

細かい剥離を長軸に対して斜めに施して打面調整し、それに二回の加撃によってGraver facet を作出している。右縁には刃潰し加工がみられる。facet のよじれは大きい。

⑤ 細石核 〔Micro core〕（第25図）

細石核は生石遺跡からただ一点だけの出土である。角錐形の細石核で、左側面は自然面を残したままで、右側面にも調整は施されていない。打面調整はまず自然面のある左側面から行なわれたあと、細石刃剥出面側から行なわれており鱗状を呈する。樋状剥離面は５本みられ、細石長20.7㎜、打面長20.5㎜である。

⑥ 石 核 〔Cone〕（第26図 1～15）

石核は、１・２層から各々11点、３層から１点、４層から２点の合計25点が出土した。これらの石核を『度島中山遺跡』の分類を基準にして検討した。

〈ａ類〉特殊な石核であり、打面が線状となっている。剥片剥離（Free flaking）する際に微調整を行ないその後両面剥離を行なっている。〈ａ類〉の中でも片方だけの剥片剥離（もう一面は調整のみ）の石核を〈ａ２類〉とした。

〈ｂ類〉一定の打面（Stniking platform）をもつものであり、ナイフ形石器文化の中で最も一般的なものである。〈ｂ類〉の中でも剥離が全側面に及んでいるものを〈ｂ２類〉とした。側面の周辺全体に剥離が及ばず、剥片剥離した面をあとで平坦打面（Plain platform）として利用している石核を〈ｂ３類〉とした。

〈ｃ類〉基本的には上下面に打面をもち、良好な剥片が得られなくなると他にも打面を作出している石核を〈ｃ類〉とした。この石核の分類一覧は第20図のとおりである。

すべて黒曜石製。

ｉ）〈ａ類〉（第26図 1～４）

１．多気孔で質が粗雑な灰黒色の黒曜石（obsidian）を用いている。剥片剥離する前の打面調整はわずかに観察され、打面は線状になっている。両面から剥片剥離は行なわれているが、階段状剥離（Step flaking）が見られる。良質な剥片が得られなくなったためか、異った方向に打面をもつ剥離痕もある。

２．大形の円礫で良質な黒曜石製である。両面の剥片剥離はすべて一方向からの打撃である。微調整は施さず、平坦打面（Plain platform）を利用している。幅が６㎝を越える横広の剥片を剥離している。末端部に打面（Striking platform）の方からの二撃の剥離痕がある。

３．円礫の黒曜石を用いる。打面が線状を呈する典型的なａ類の石核である。微調整も入念に施し、幅広の剥片を剥離している。

４．円礫を用いた第４層出土の典型的なａ類である。一方向からのみの剥離で、打面

第20図　石核の分類一覧　　（番号は石器番号）

分類／層位	A	A II	B	B II	B III	C
1	1．2	5			12	
2		6．7．8	9．10	11	13	14
3	3					
4	4					15

も線状を呈す。

ii）〈a 2類〉（第26図　5～8）

5．円礫を用い、礫表にそって調整して打面とし、剥片剥離を行なっている。片面のみの剥離であり、良質の剥片が得られなくなったためか最後には、右側位から剥離が行なわれている。

6．小形の片面剥離の石核である。5と同じく礫表にそって打面作り出しの剥離を行なっている。

7．平坦な自然面に対して鈍角に、打面を作出するための剥離調整を綿密に行なっている。そして背面（自然面）に平行に剥片剥離（Free flaking）を同一方向からのみ行なっている。はじめに左右両端部を行ない、その後で中央部の剥片剥離を行なっている。比較的大形の剥片を作り出している。

8．打面調整が行なわれず、線状打面の剥離面側には使用痕と思われる剥離痕があるがCore scrapearとして利用されたのではないかと思われる。

iii）〈b類〉（第26図　9．10）

9．良質の黒耀石の円礫を用いている。まず円礫の一端に打撃を加えて、平坦打面（Plain platform）を形成している。打面調整は行なわず、打面と剥離面はほぼ直角に、L字状に剥離している。

10．9と同じ形の石核で、打面調整は施されず、広い平坦打面をもっている。左右両端の方から内側に向って剥片剥離を行なっている。

iv）〈b 2類〉（第26図　11）

11．不純物は混入しているがやや良質の黒耀石の角礫を素材としている。菱形の打面には両側からの加撃によって調整がなされている。その打面から直角に近い角度をもって、全周で剥片剥離を行なっている。末端からの剥離も行なわれているが、この場合は新しい打面は作り出さず、剥片剥離面を打面に利用している。しかしこの場合良好な剥片は得られていない。

v）〈b 3類〉（第26図　12．13）

12．円礫を用いている。打面調整は行なわずに剝片剝離を行ない、中形の型のそろった剝片が作り出されている。背面には横方向に加撃した剝離もなされている。

13．角礫の平坦な自然面の四方から打面調整を施こし、その一方から剝片剝離を行なっている。打面と剝離面とは約55度の鋭角になっている。背面には横方向の剝離もみられる。

vi）〈c類〉（第26図　14・15）

14．円礫の表面にそって作り出された打面には微調整がみられる。打面は上下にみられるが、下方の打面には調整がみられない。

15．第3層から出土した小形の石核である。上下の打面とも微調整は施されていない。均一形の剝片が作出されている。

⑦　尖頭器状石器〔Point〕（第27図　1～7）

尖頭器状石器は、2層より4点、1・3・4層より各1点の合計7点が出土している。石質は4のみがsanukite製で他は黒耀石製である。

i）粗製有茎尖頭器〔Tanget point〕（第27図　1・2・6・7）

1．半透明の縞状の帯文様をもつが比較的良質の黒耀石を用いている。平坦打面（Plain platform）と、打瘤（bulb）を残している。細部加工はほぼ全縁辺に施し、打面の縁を調整する加工も正面で行なわれている。右基部にはノッチ（Notching）を入れず自然面を残したままである。ほぼ左右対称の形を呈する。

6．原遺跡からも同形の尖頭器が表採されている。厚手の基部に左右からノッチを入れ基部を作出している。打面（Plain platform）の縁加工は表裏から施され、打瘤は除去されている。中央から先端部が大きく欠損している。

2．基部加工は左縁のみであるが尖頭器の基部と思われる。

7．大形の縦長剝片を素材にしている。基部のノッチは左辺は裏面より、右辺は正面側より各々入念に施されて基部を作出している。裏面の打瘤は残されたままであるが、打面の縁加工は施されている。右縁は自然面が残されたままであるが未調整と思われる。尖端部が欠損している。

ii）剝片尖頭器〔Flaking point〕（第27図　3・4）

3．左右辺とも、周辺加工の微調整を施こす。尖端部に使用痕と思われる剝離痕、擦痕が観察される。

4．小形の刃器を素材にしている。右辺は正面に、左辺は裏面に微調整を施している。中央から基部を欠失している。

iii）槍先形尖頭器〔Point〕（第27図　5）

5．sanukite製の横剝大形剝片を素材にした槍先形尖頭器である。周辺の細部加工は

全縁辺に施し、交互剥離を呈している。尖端部と右基部を欠損している。現器長で7.45cm、最大器幅4.84cm、最厚部で0.7cmを測る。

⑧ 掻器・削器〔Scraper〕（第28図　1～22）

典型的な掻器削器の資料は少ないが、刃器や剥片にScraperの刃部に近い調整が施された不定形な資料まであげると、1層から5点、2層から14点、3層から2点、4層から1点の合計22点がある。いずれも黒曜石製である。

ⅰ）掻器〔End scraper〕〔第28図　7・11）

7．正面の右半分に自然面を残す剥片を素材にしている。使用痕と思われる剥離痕を先端部にもつ。

11．刃器状剥片を素材にして、末端部から左辺にかけて調整がみられる。

ⅱ）削器〔Cocave scrapen〕（第28図　1・2・6）

1．薄手良質の刃器を素材にして、右辺中央部に抉り（Notch）がみられる。

2．やや厚手の断面三角の剥片を素材にして右辺末端部近くに抉りがある。末端部にも使用痕がみられる。

6．刃器状剥片の上下端を切断し、左辺全体を入念に調整している。右辺にも使用痕と思われる剥離痕がある。

ⅲ）削器〔Side scraper〕（第28図　3～5、8～12、12～22）

4．小形の剥片を素材にして、右辺全縁に剥離調整している。

8．大形幅広の剥片を素材にして、右辺全縁に入念に調整を施している。末端部にも使用痕がみられる。

20．左右両辺に調整剥離がみられる。末端部には樋状剥離（fluting）がある。

3・13・14．厚手の断面三角の剥片の片辺に調整を施した削器として使用している。

⑨ その他の石器・刃器・剥片（第29図　23～63）

27．安山岩質の切截用のナイフ形石器を想定させる石器である。背部には自然面を残すが、先端部には裏面から剥離調整が施されている。基部にも裏面と並行する三打の剥離加工がみられる。左辺には使用痕と思われる刃こぼれがある。

39．チャート（chert）製の刃器である、基部先端部を折断されている。

40～43・52・53．いずれも薄手で横広の共通性をもつ刃器状剥片である。41～43は先端部に剥離調整を施している。

参考分献

○　杉原荘介・戸沢充則　「佐賀県原遺跡における細石器文化の様相」　東京考古学会考古学集刊第4巻4号　1971

○　杉原荘介・戸沢充則　「佐賀県伊万里市平沢良の石器文化」　日本考古学協会 1961

○　富樹憲次・戸沢充則　「唐津周辺の細石器Ⅰ」　考古学手帳14　1962

○　富樹憲次・戸沢充則　「唐津周辺の細石器Ⅲ」　考古学手帳18　1963

○　下川達弥・久村貞男　「日の岳遺跡」　日本の旧石器文化3収蔵　1973

○　麻生優・白石浩之　「百花台遺跡」　日本の旧石器文化3収蔵　1973

○　萩原博文　「度島町湯牟田中山遺跡」　平戸市教委8号　1977

○　佐藤達夫　「ナイフ形石器の編年的一考察」　1970

○　正林護　「堂崎遺跡調査報告書」　長崎県教育委員会　県教育委員会報告第10集

○　松岡史　「唐津市史・古代」唐津市　1962

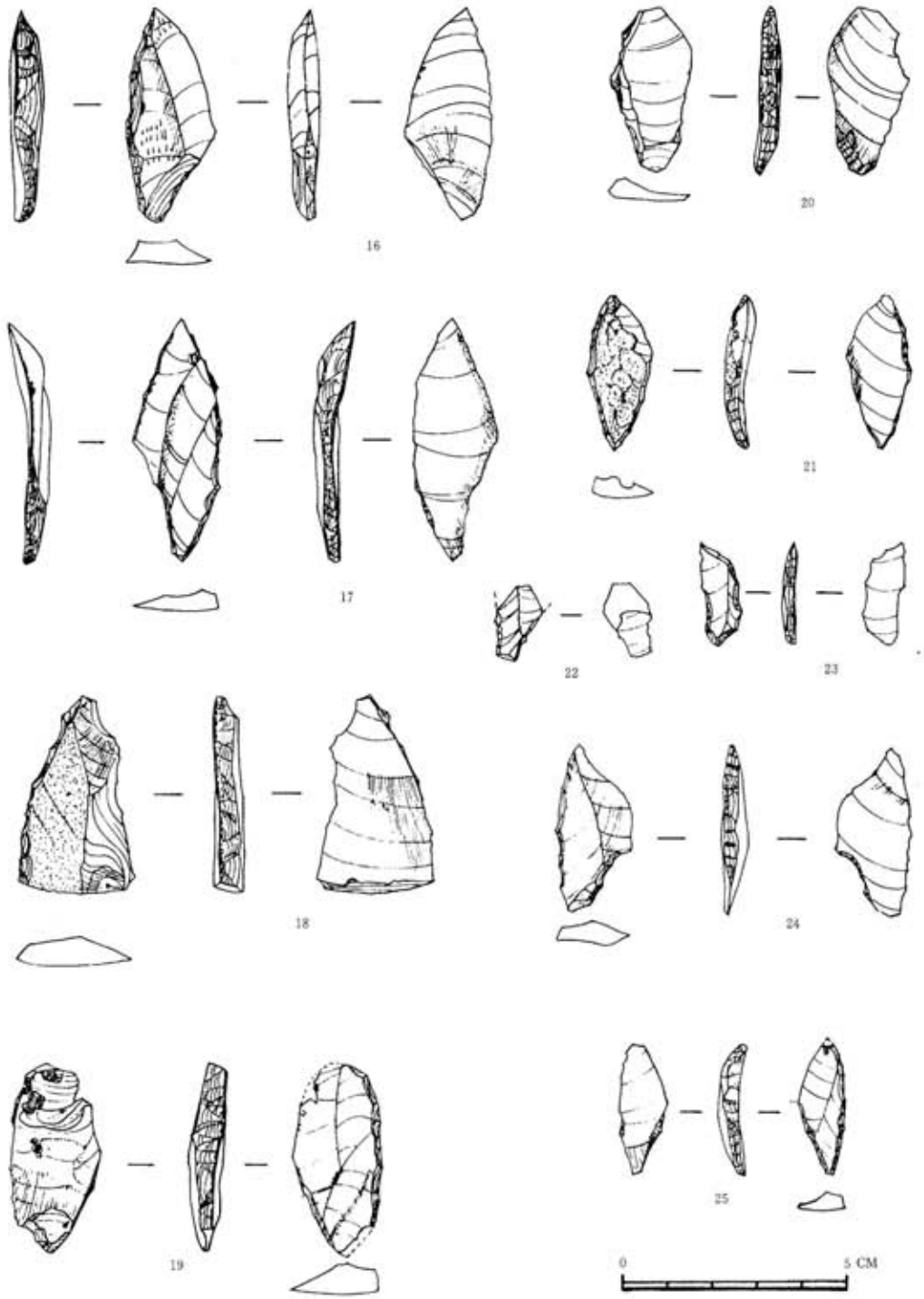
○　米倉二郎　「佐賀県史上巻・佐賀県の地理的環境」　1968

○　杉原荘介他　「日本の考古学・1」　先土器時代　1965

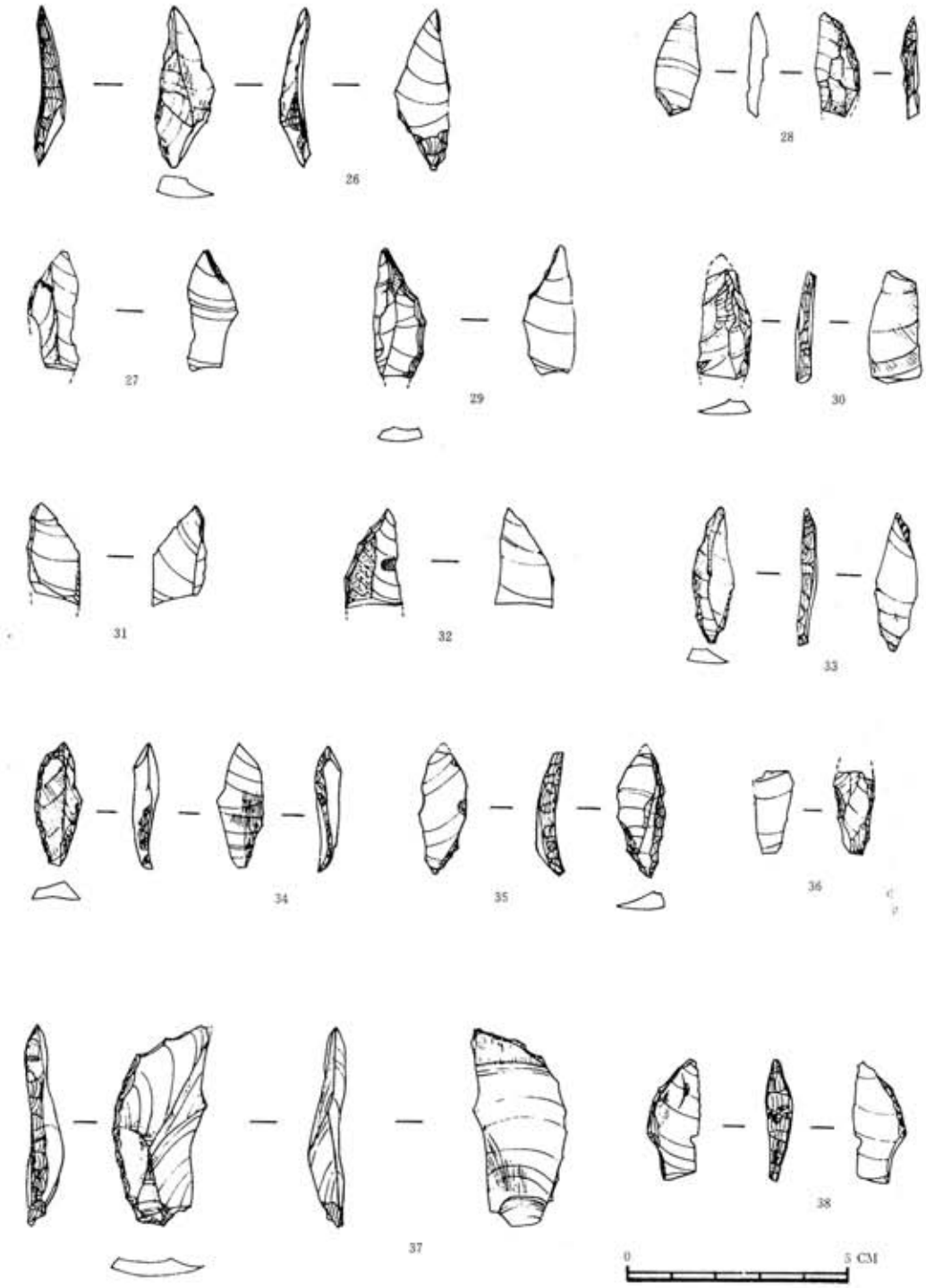
○　下川達弥　「西九州ナイフ形石器文化の概要」　長崎県立美術博物館研究紀要第3号　1974

第21図　ナイフ形石器実測図①

第21図　ナイフ形石器実測図②



第21図　ナイフ形石器実測図③



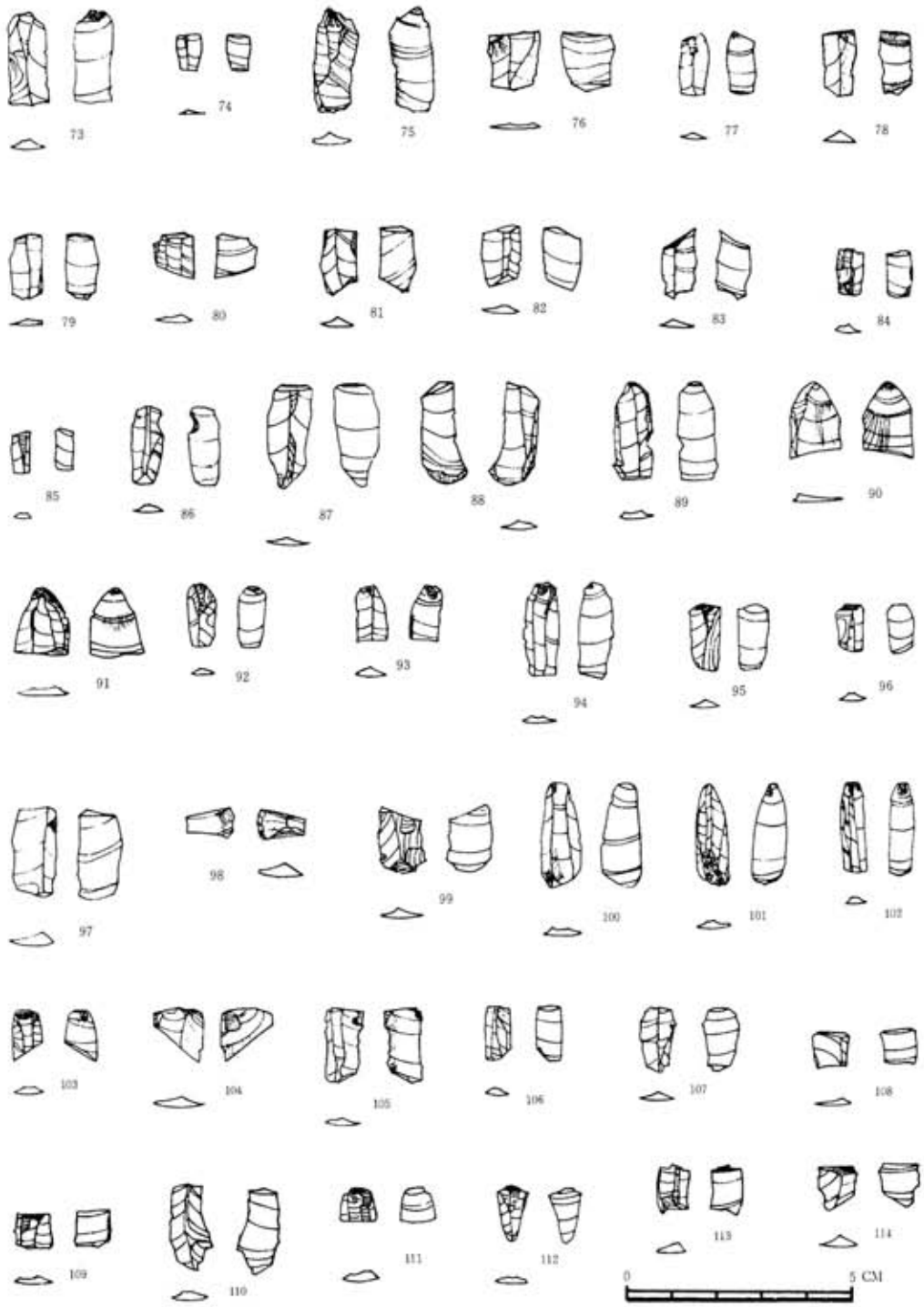
第21図　ナイフ形石器実測図④

第22図　細石刃実測図①　　第１層（１～21）　第２層（22～88）

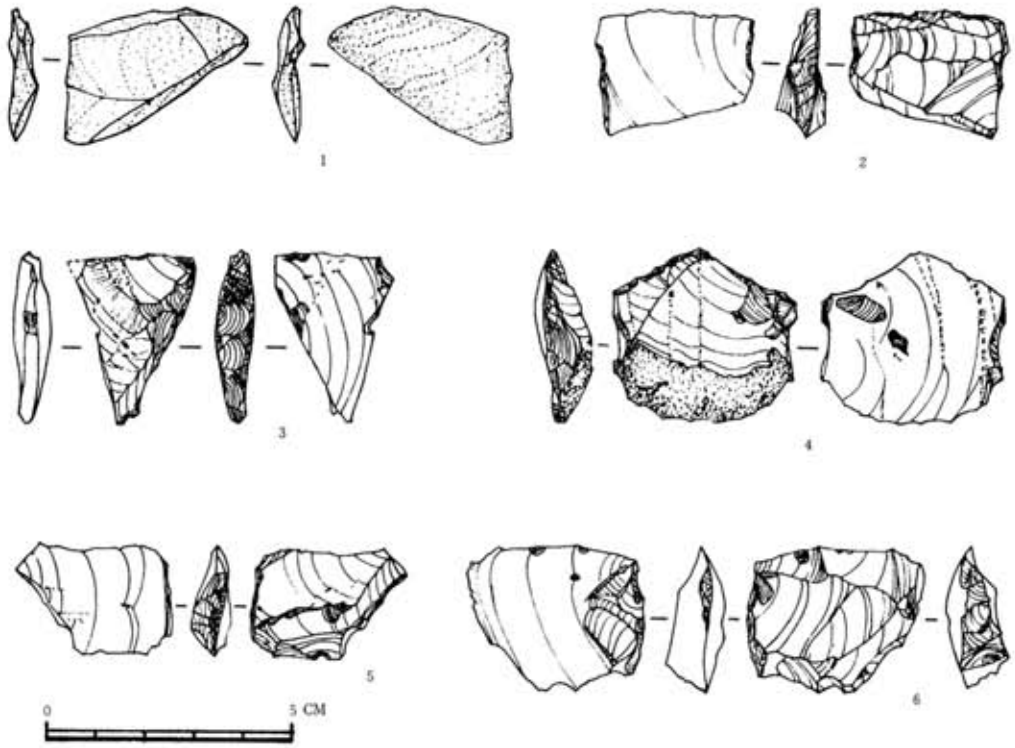
第22図　細石刃②

37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
0
5 CM

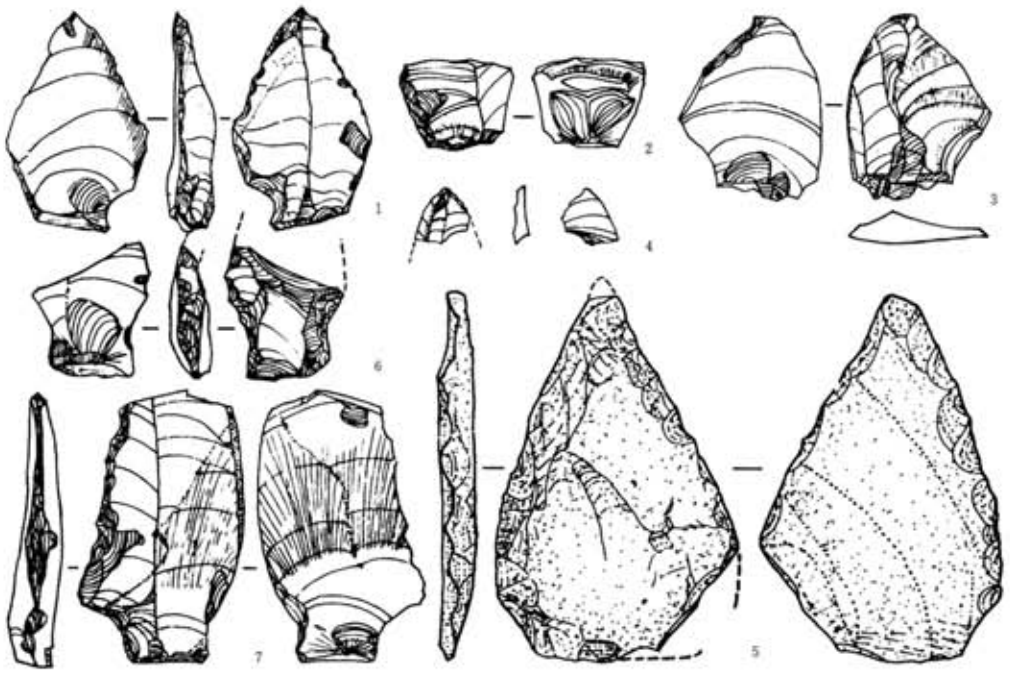
第22図　細石刃③　　第３層（89～100）　第４層（101～112）　第５層（113～114）



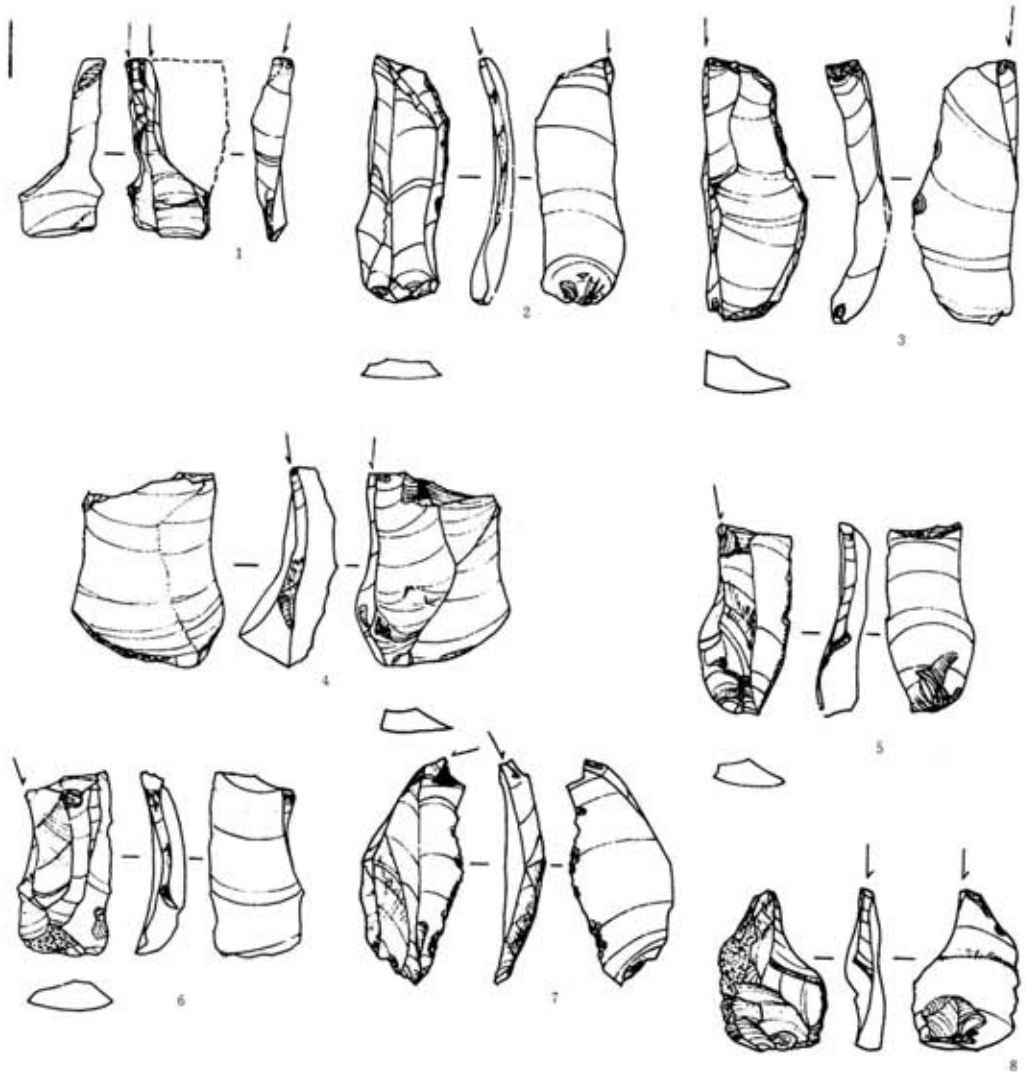
第23図　台形石器実測図　　第1層（3・4）　第2層（1・2・5・6）



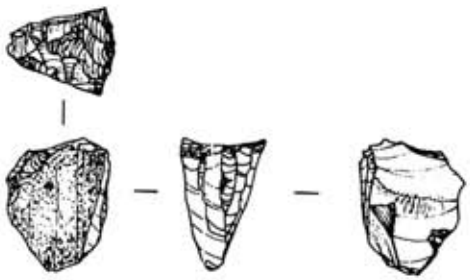
第27図　尖頭状石器実測図　　第1層（4）第2層（1～3）第3層（6）第4層（7）



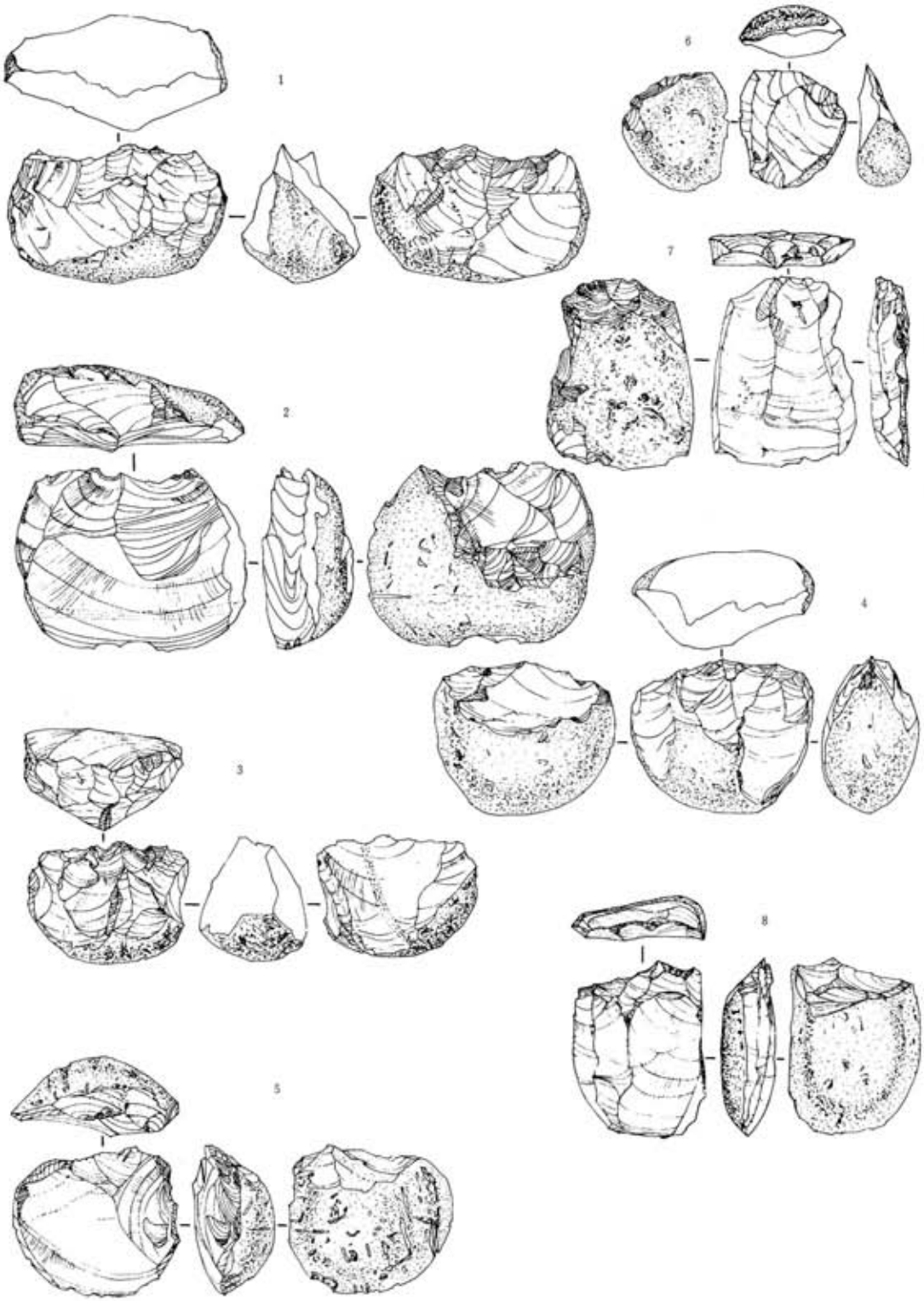
第24図　彫器実測図　　第２層（１～７）　第４層（８）



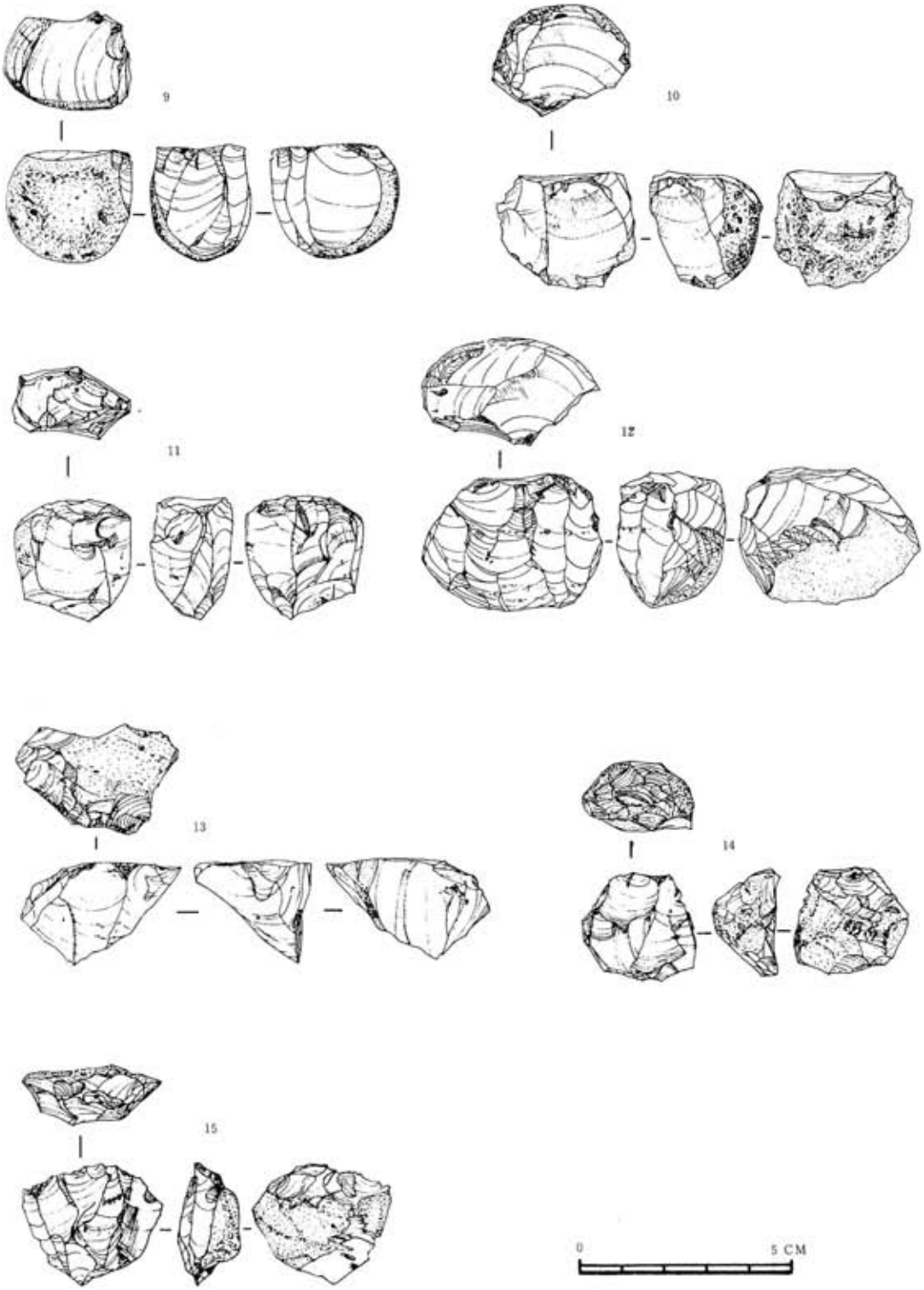
第25図　細石核実測図



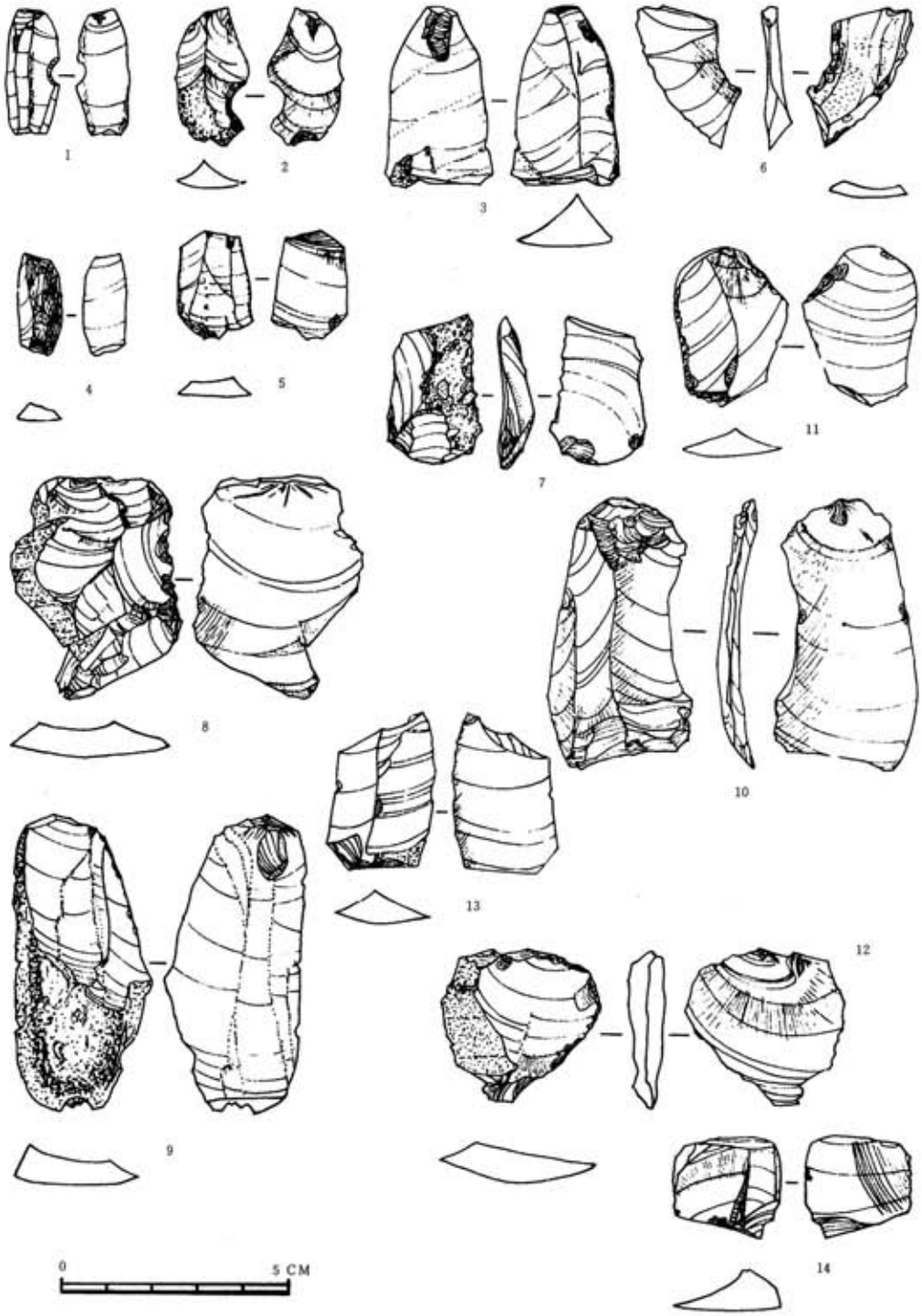
第26図　石核実測図①　　第1層（1・5・12）　第2層（2・6～14）



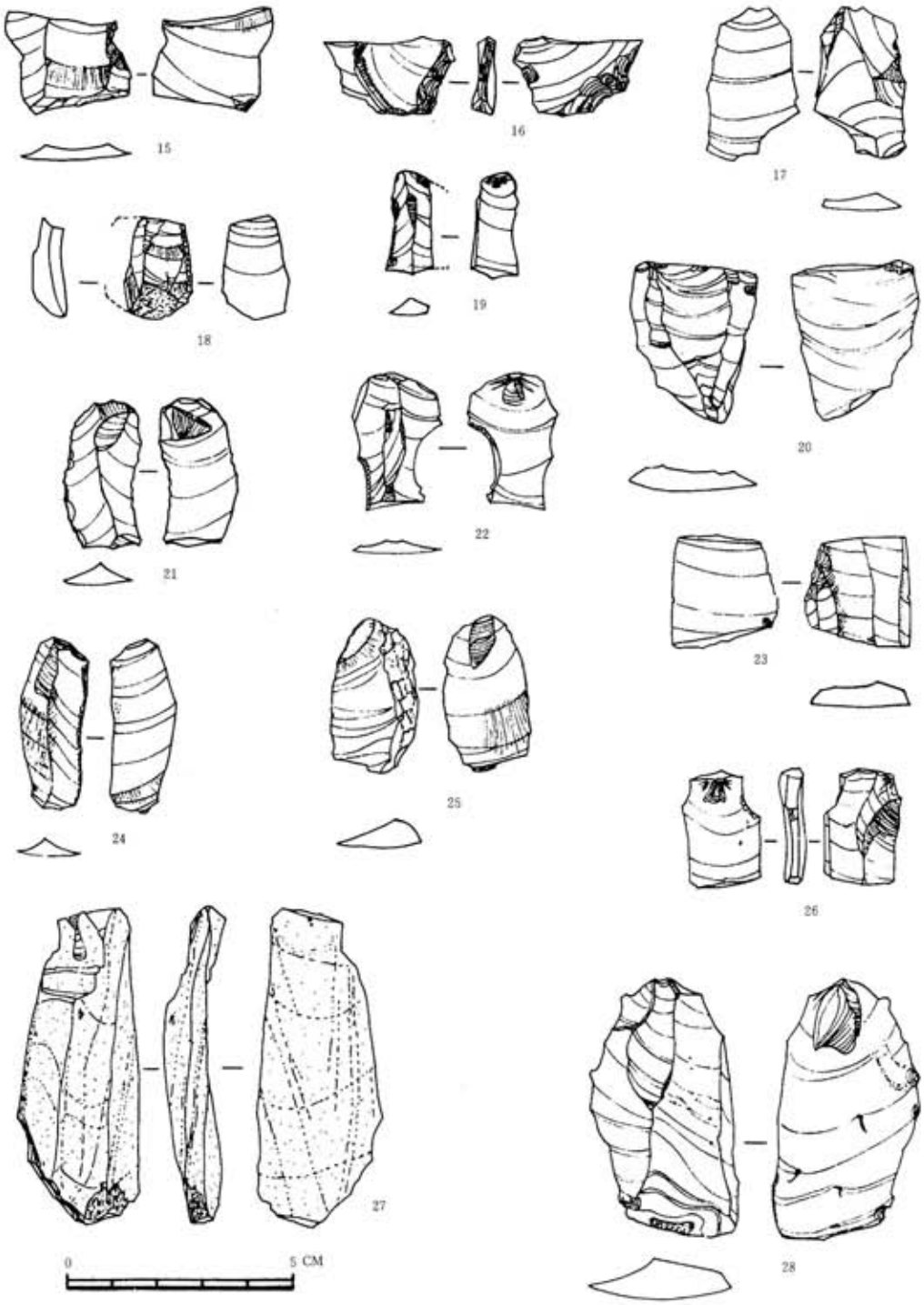
第26図　石核実測図②　　第３層（３）　第４層（４・15）



第28図　掻器・削器実測図①　　第１層（１～５）　第２層　（６～19）

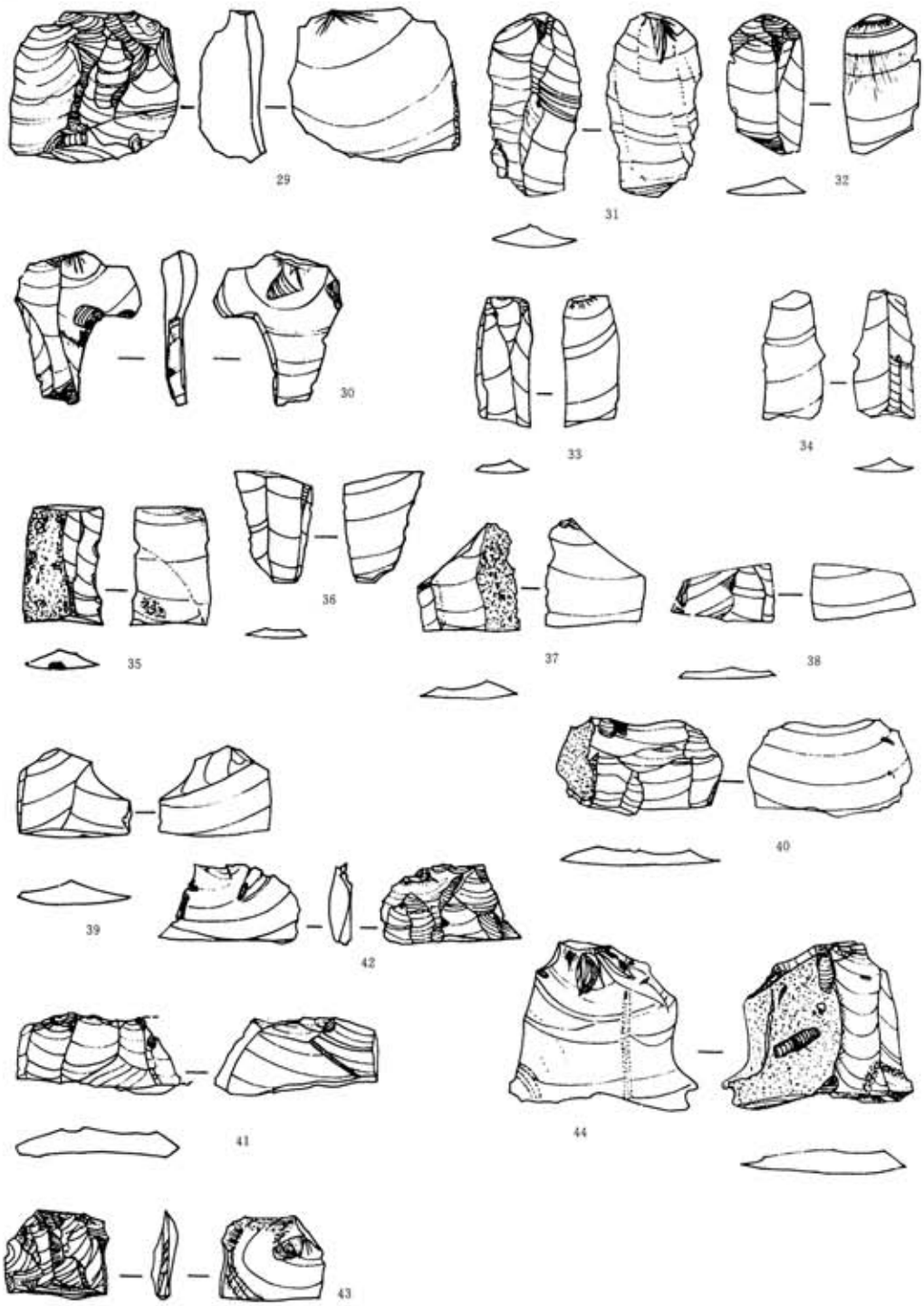


第28図　掻器・削器実測図②　　第３層（20・21）　第４層（22）

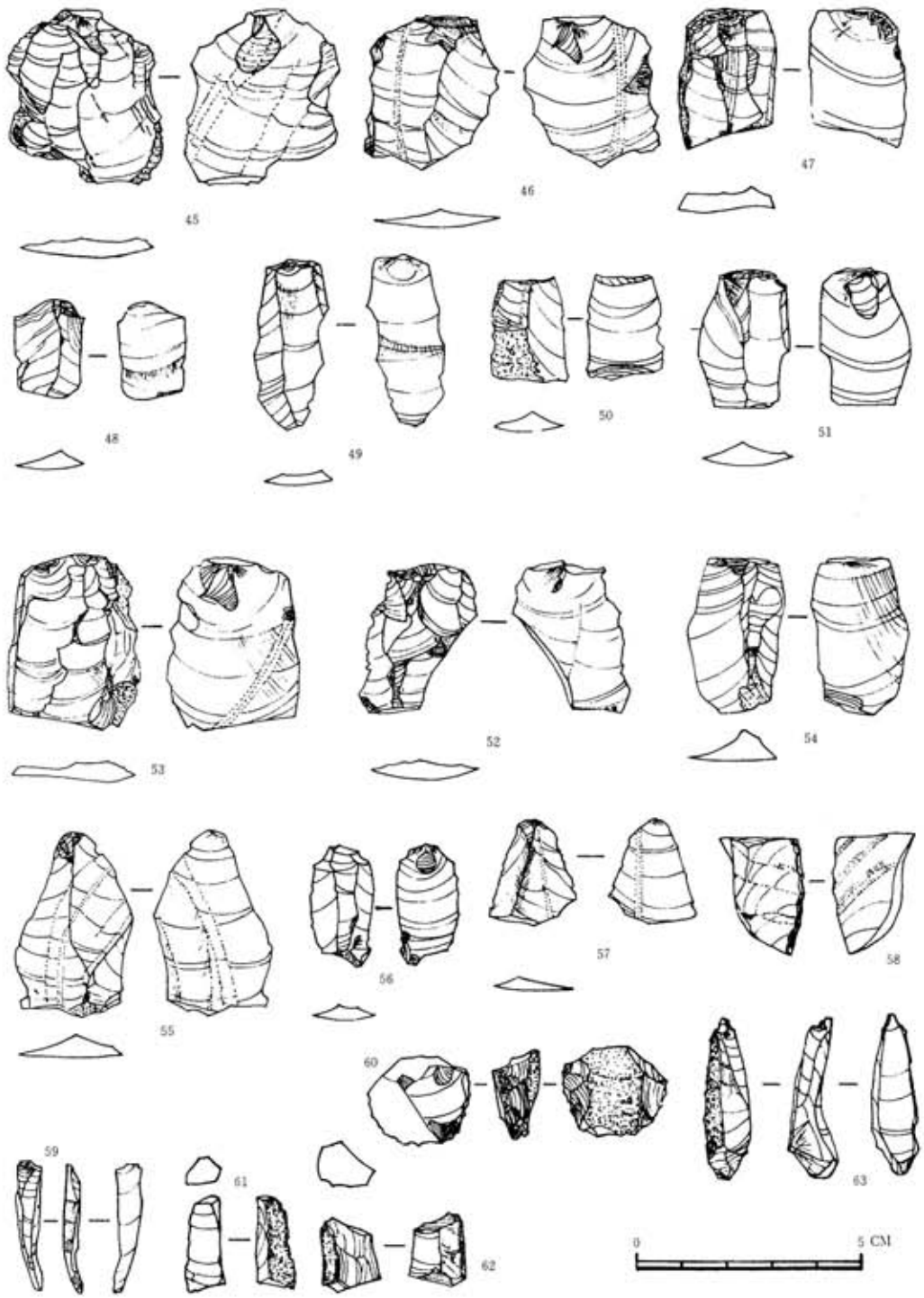


第29図　刃器・剝片等実測図　　第１層（27～43）

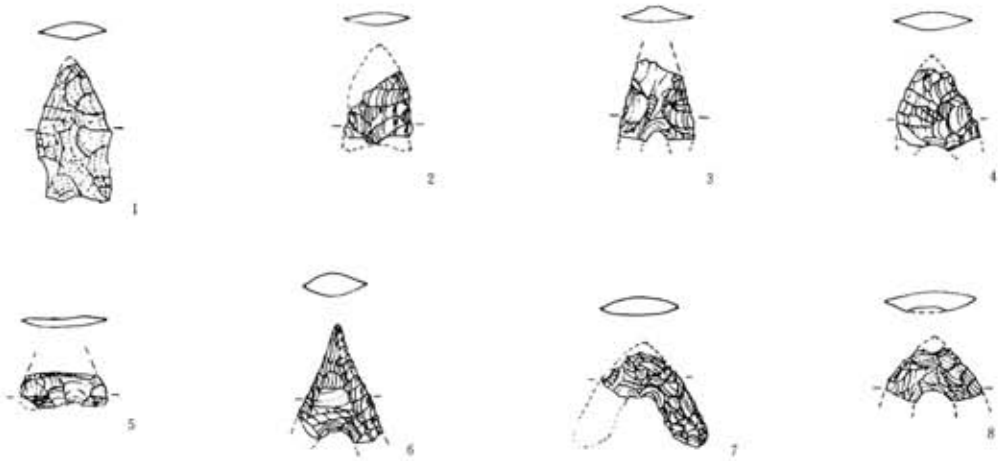
第29図　刃器・剝片等実測図②　　第２層（27～43）



第29図　刃器・剝片等実測図③　　第3層（44～53・61～63）　第4層（54～57）



第30図　石鏃実測図　　第１層（１～５）　第２層（６～８）



【付記】

1．この報告書（第Ⅰ部）は昭和52年度に国庫補助金を得て実施した上場水利事業にかかる発掘調査記録である。

2．執筆・編集は堀川義英が担当し本書の作成は文化課文化財調査第二係で行なった。

3．遺物の実測・整図は堀川が担当した。

4．トレースは主として堀川があたり、山上龍が協力した。

5．写真は木下巧・堀川が担当した。

6．その他、富桝憲次、小野博、山口一秋、前田貞子、坂本マツ子、西美枝の各氏をは始め、唐津市及び上物在住の方々の御協力をえた。厚く謝意を表する。

（昭和53年３月13日記）

第Ⅰ部

生　石　遺　跡

図

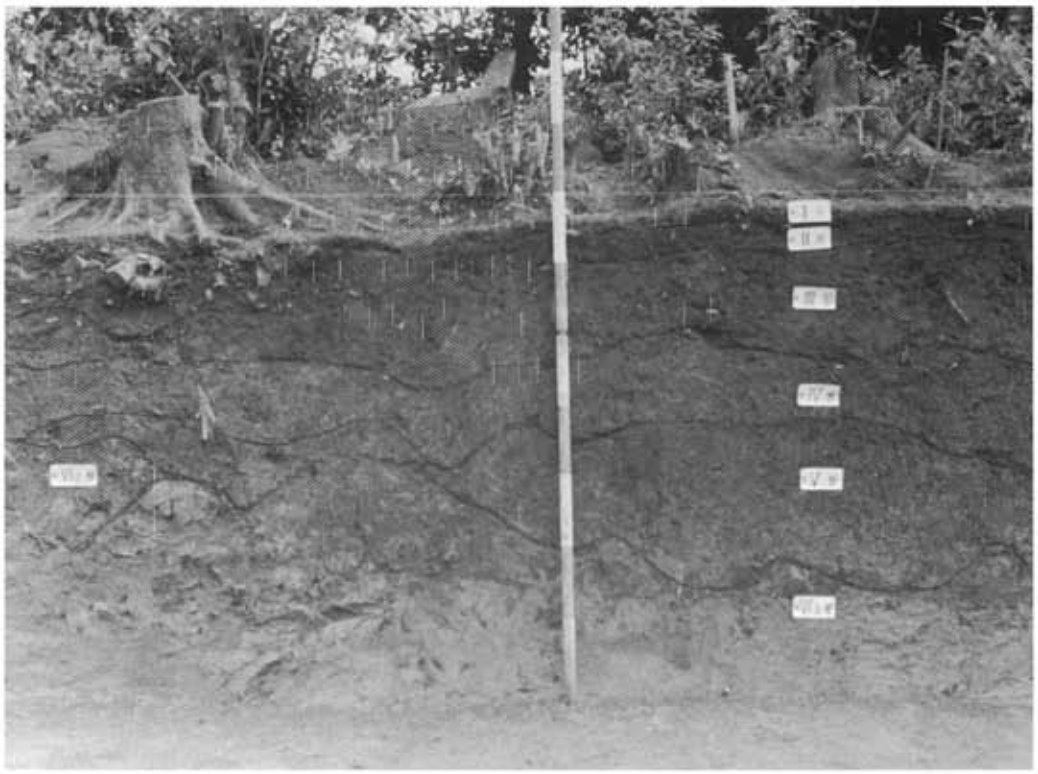
版

図版１－１　遺跡の遠望（西側峰より）

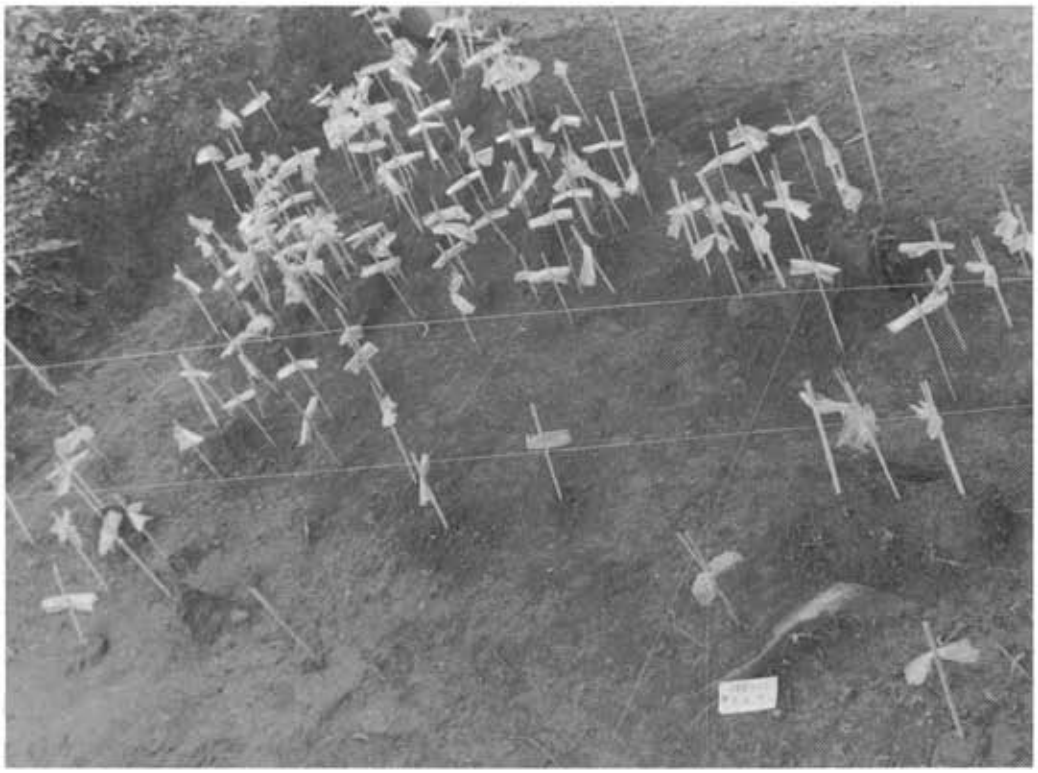
図版１－２　遺跡より伊万里湾を望む

図版２－１　トレンチ

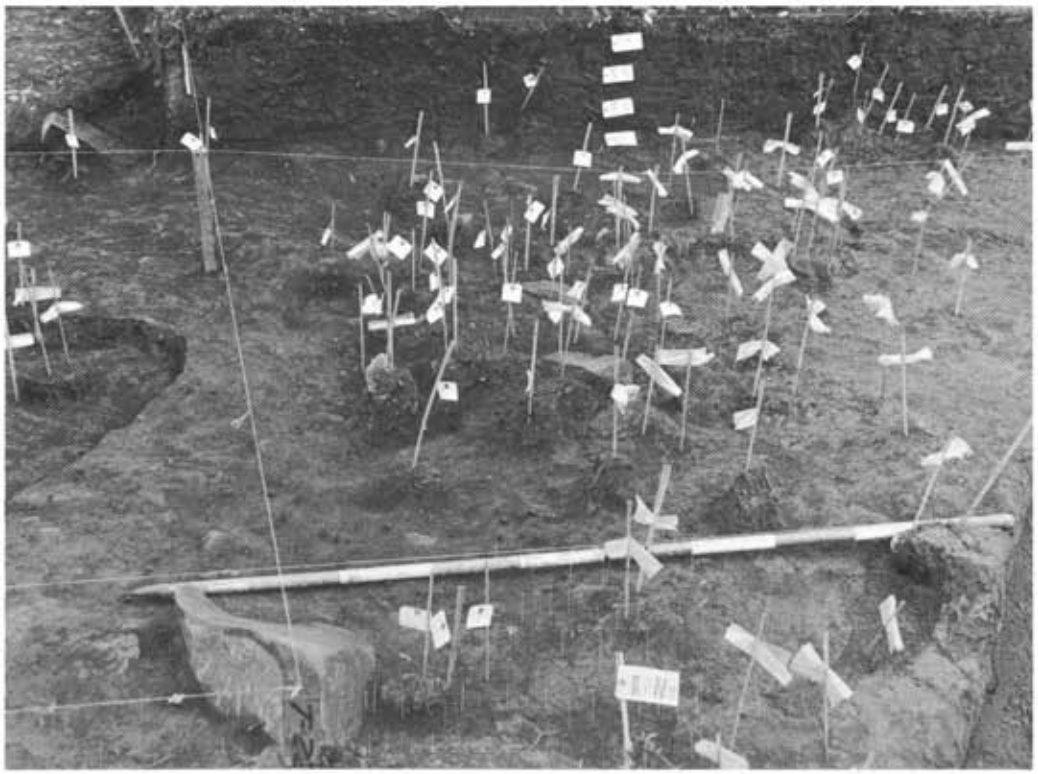
図版２－２　II区南壁土層



図版３－１　Ⅱ区３層出土状況（東側より）

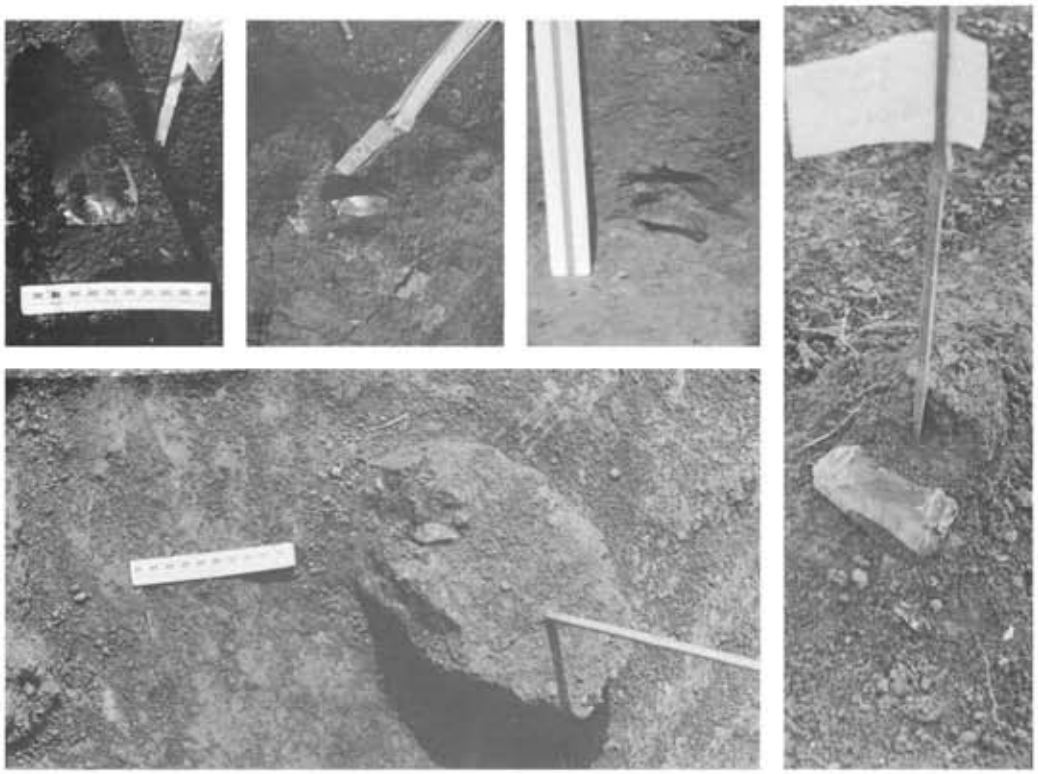


図版３－２　Ⅱ区４層遺物出土状況（北側より）



図版４－１　遺物実測糸張り

図版４－２　遺物出土状況



図版５－１　ＭＯ区配石遺構（北側より）

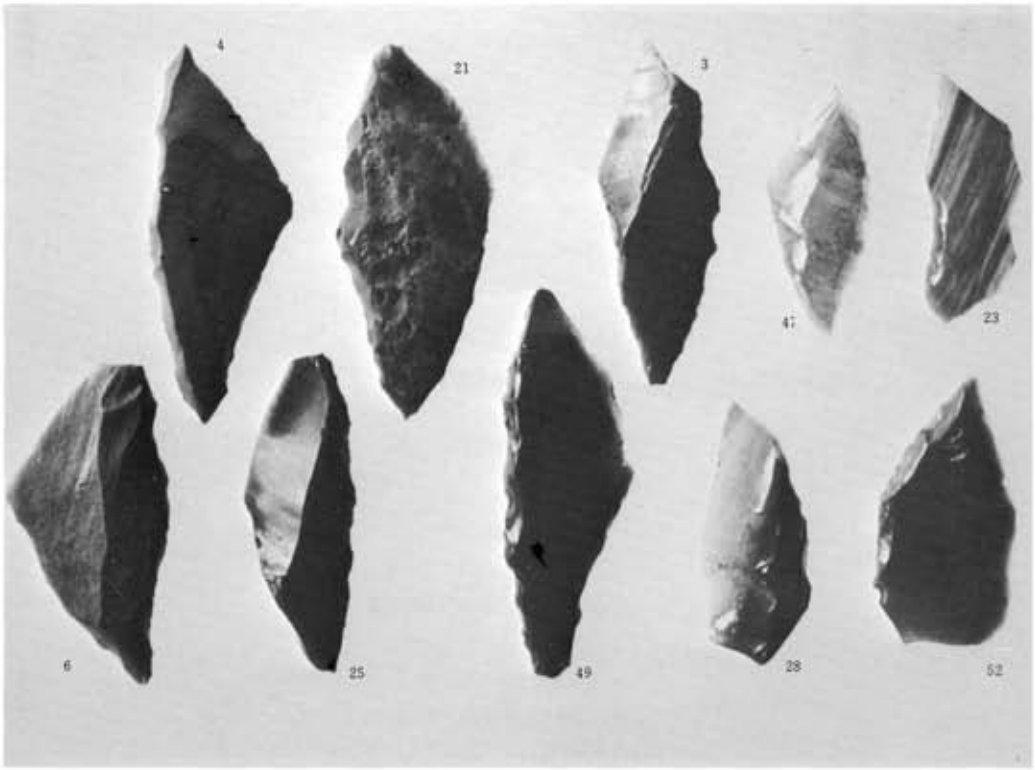
図版５－２　ＭＯ区配石遺構（南側より）

図版６－１　ＭＯ区配石遺構（中央部）

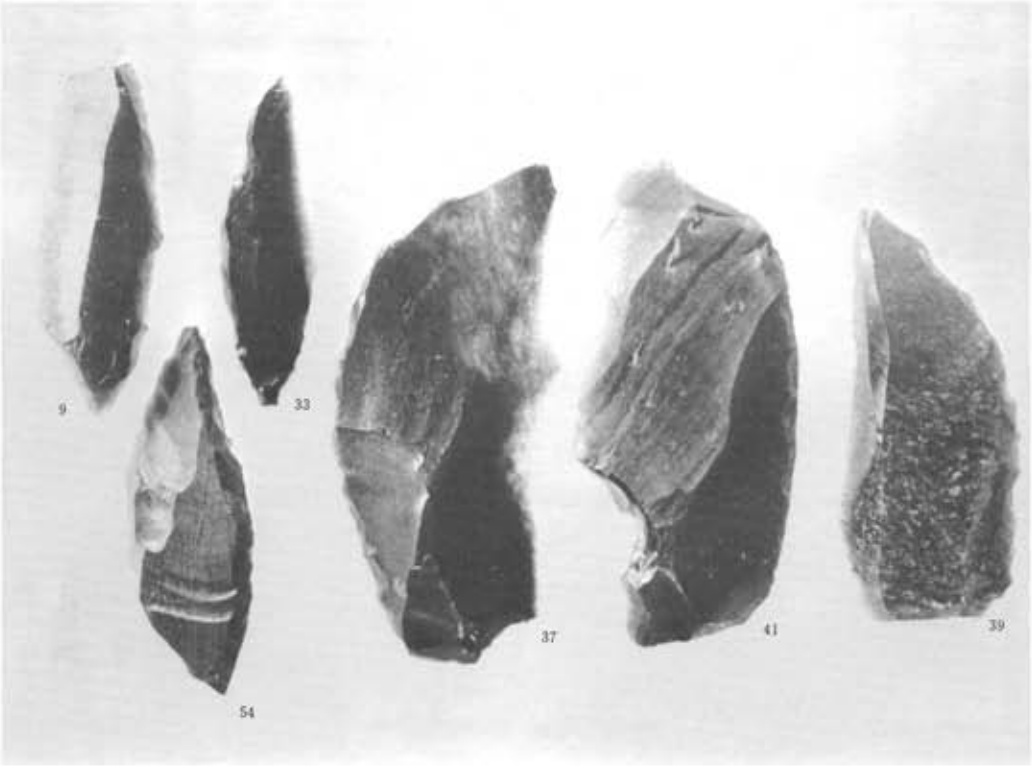
図版６－２　ＭＯ区配石遺構（環状石組）

図版７－１　ナイフ形石器①

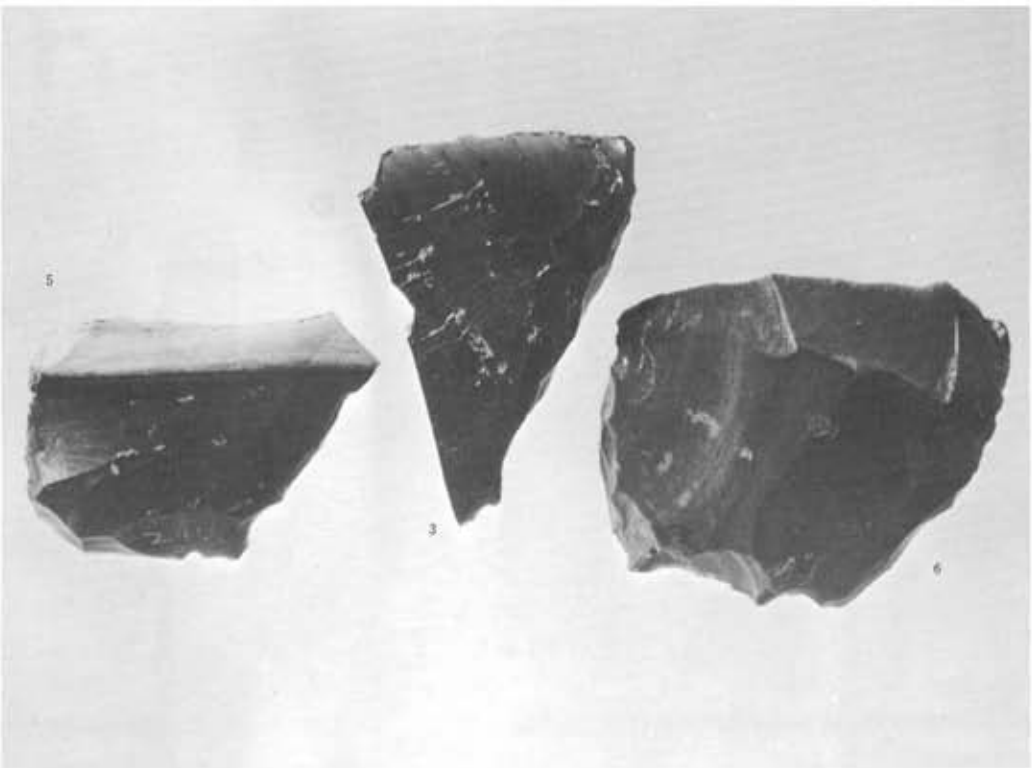
図版７－２　ナイフ形石器②



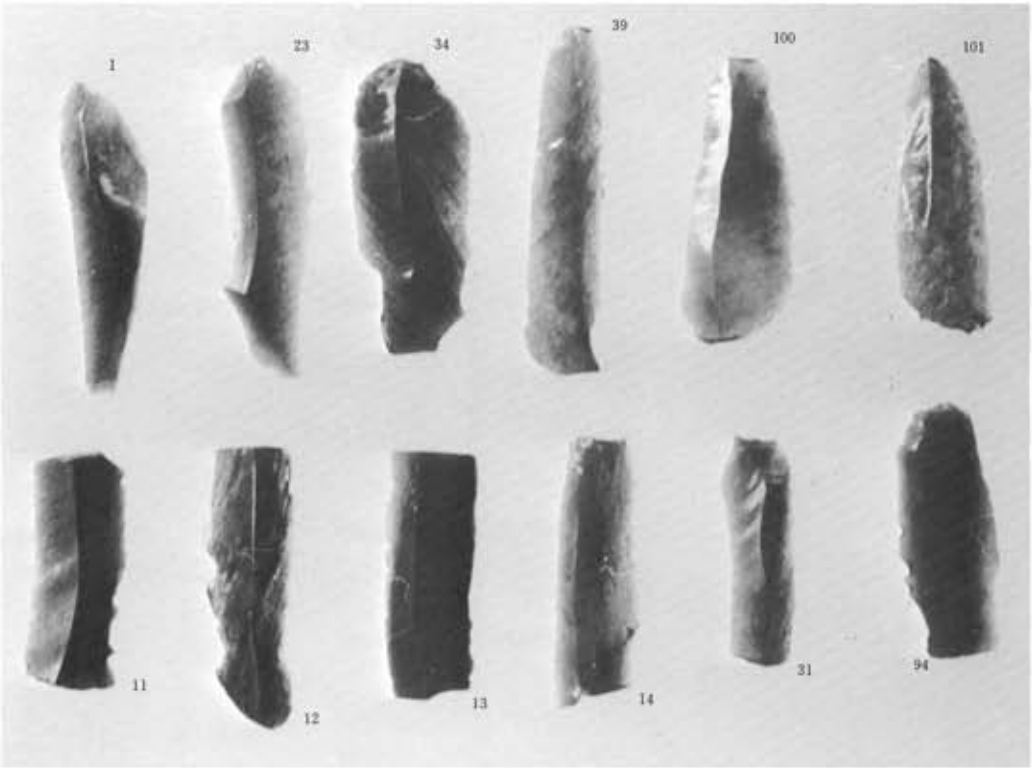
図版８　ナイフ形石器③



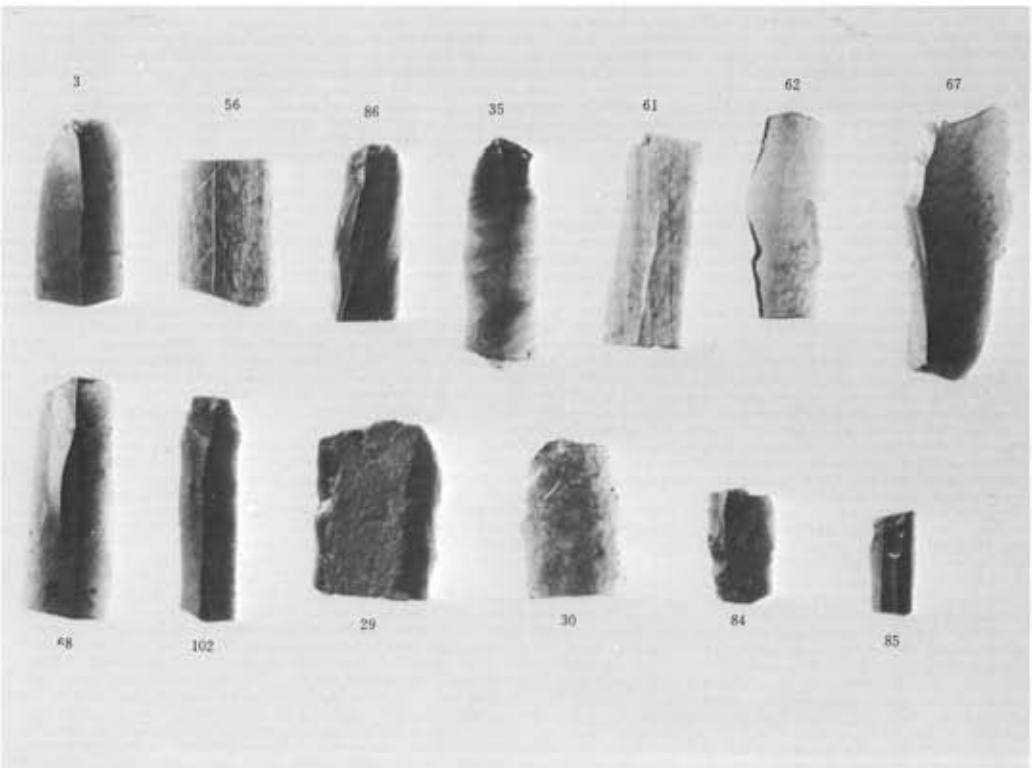
図版８－２　台形石器



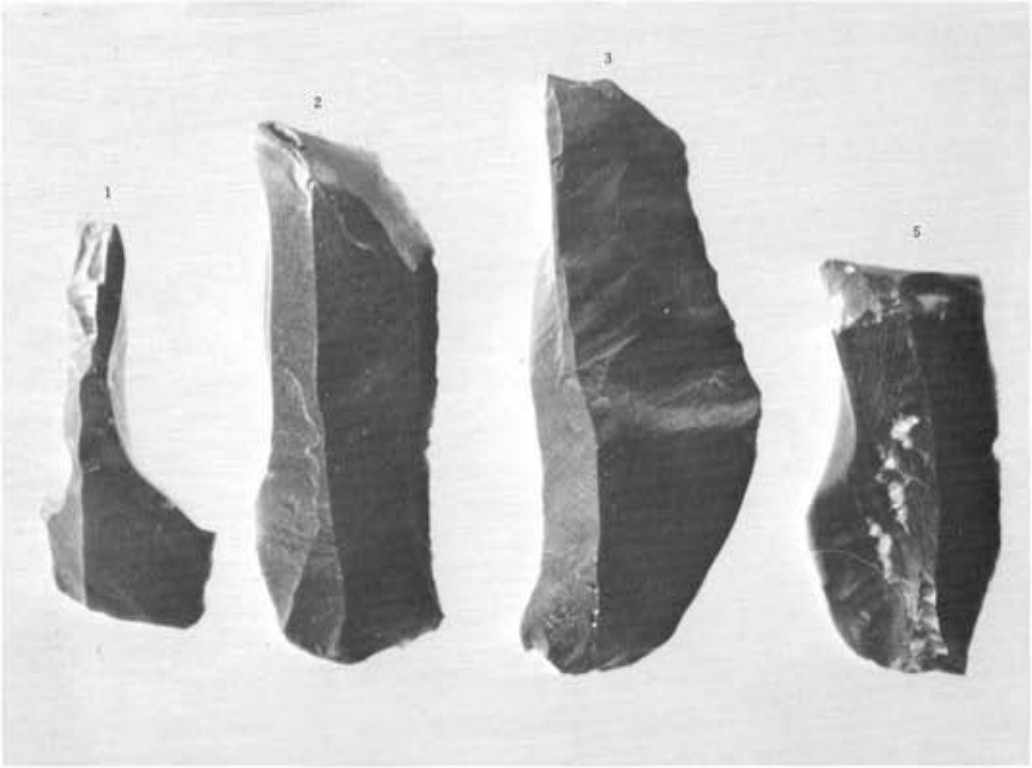
図版 9－1　細石刃①



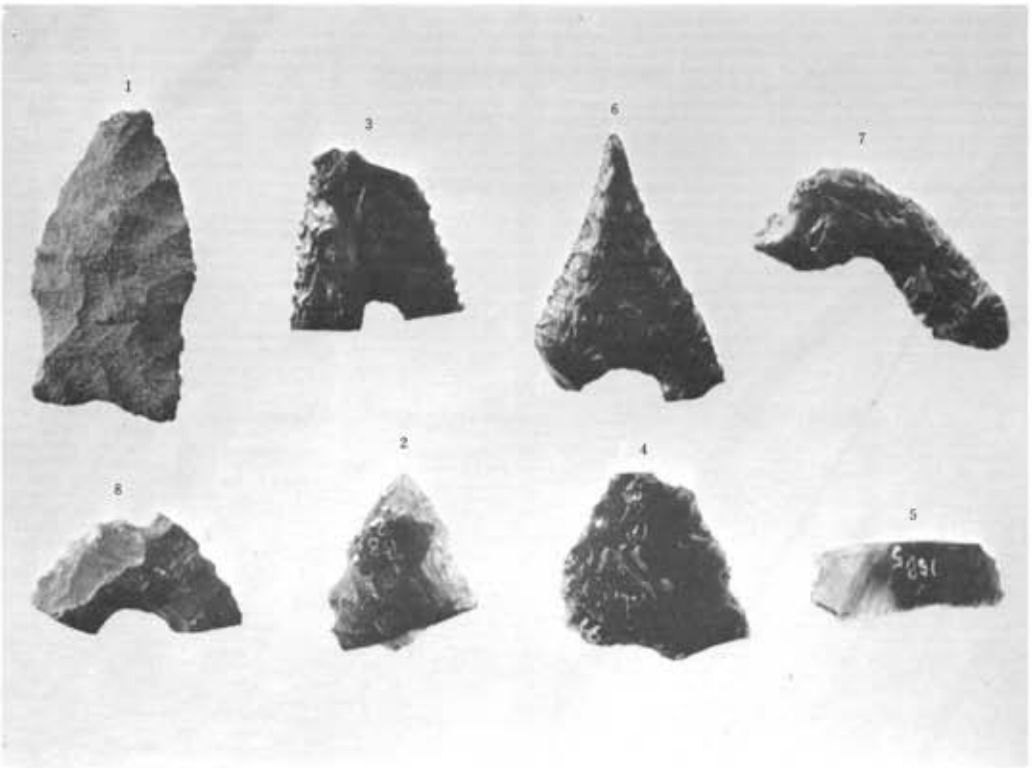
図版 9－2　細石刃②



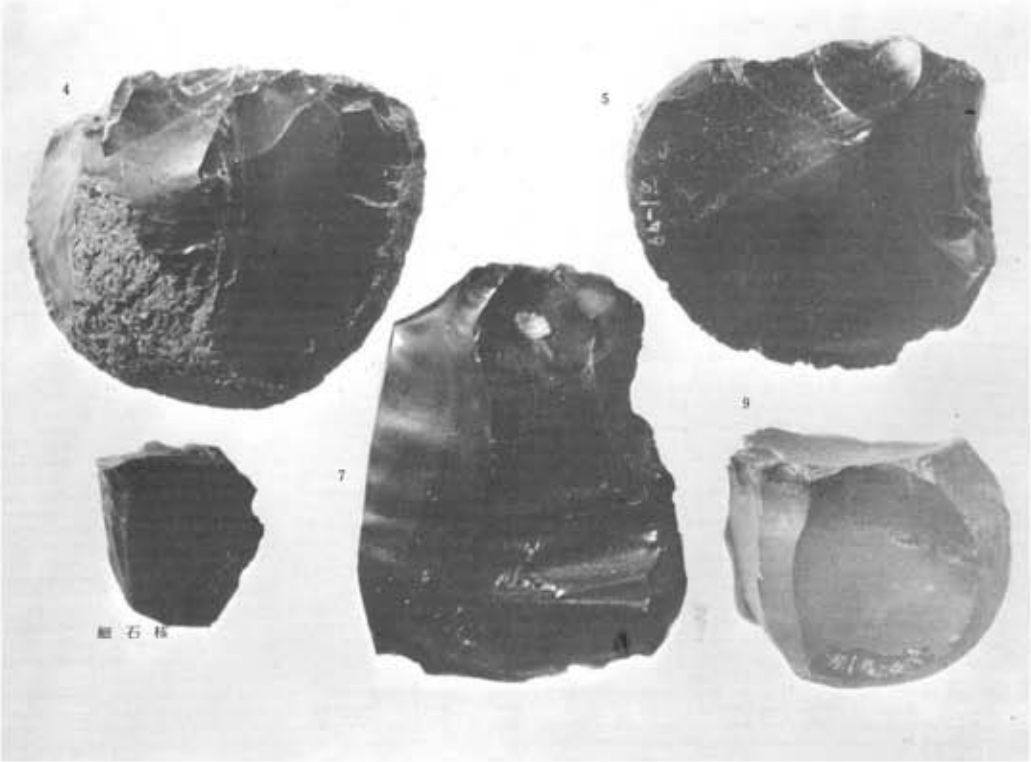
図版10—1　彫　器



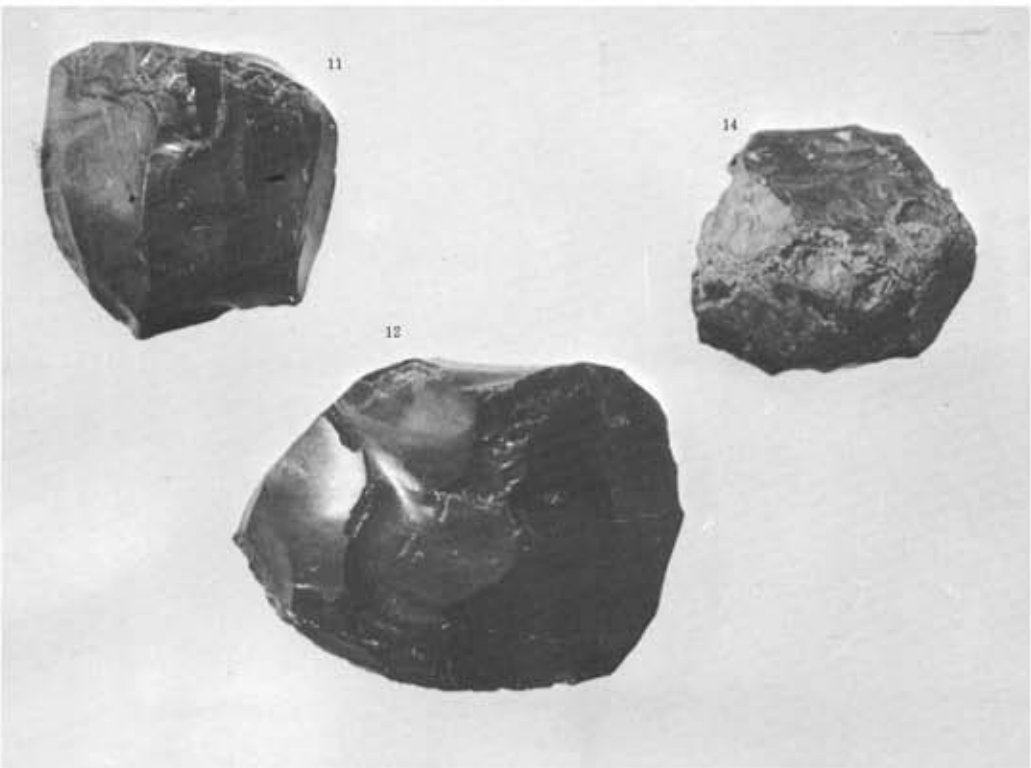
図版10—2　石　鏃



図版11－1　石核・細石核①

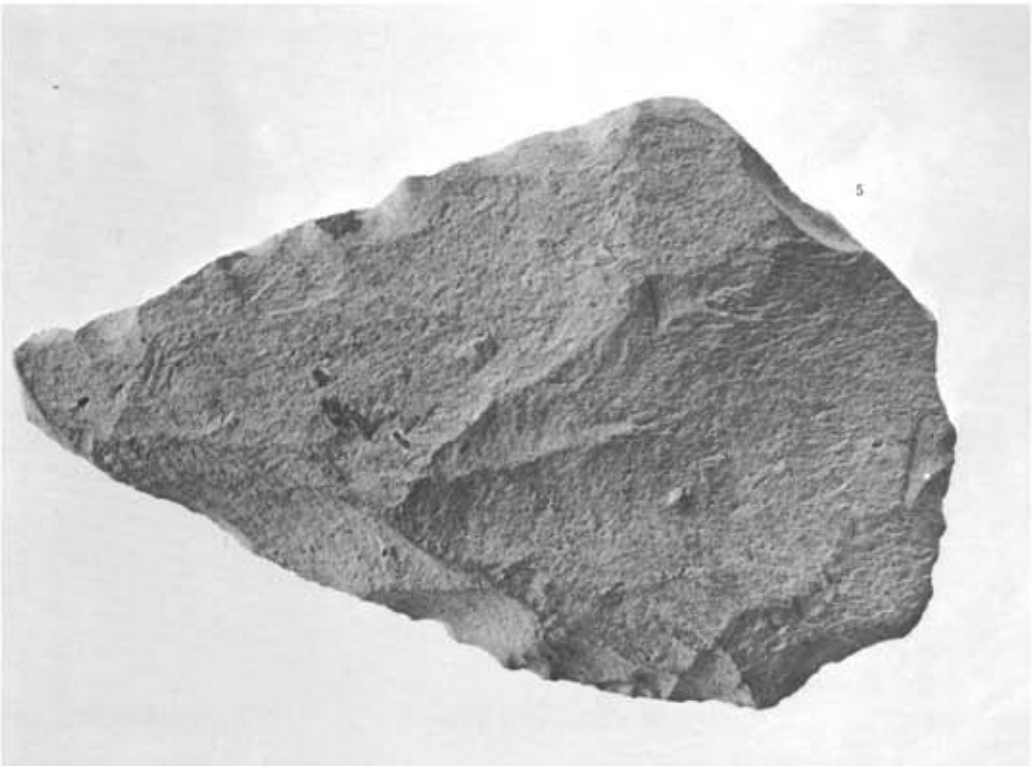


図版11－2　石　核②

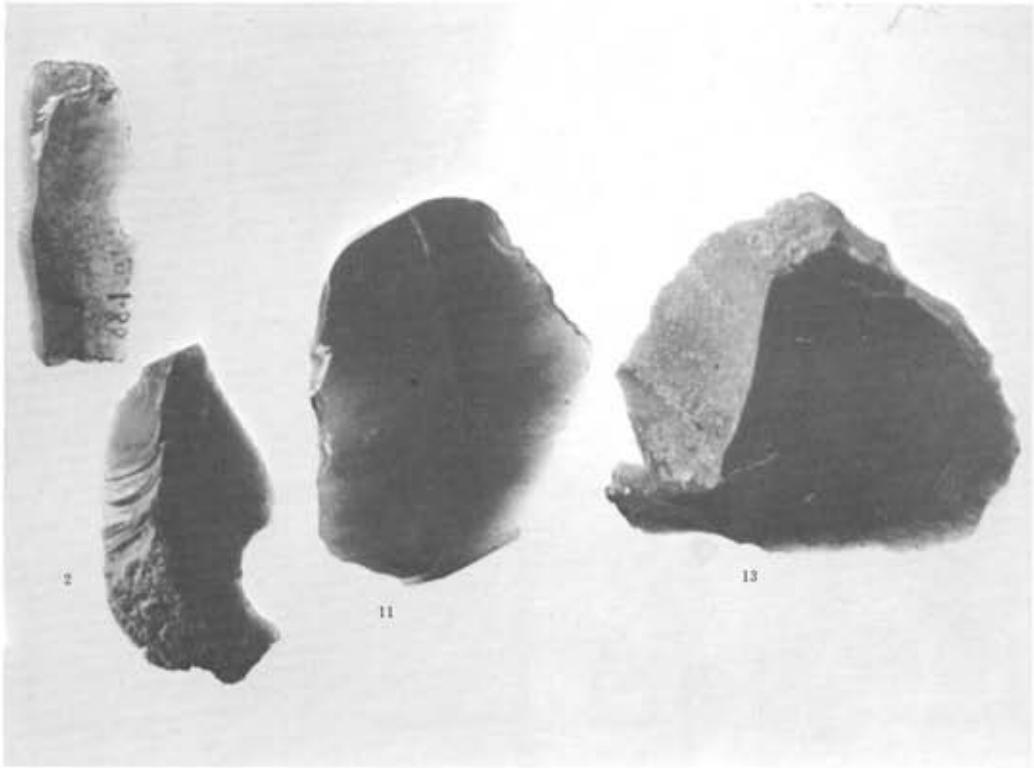


図版12— 1　尖頭器状石器①

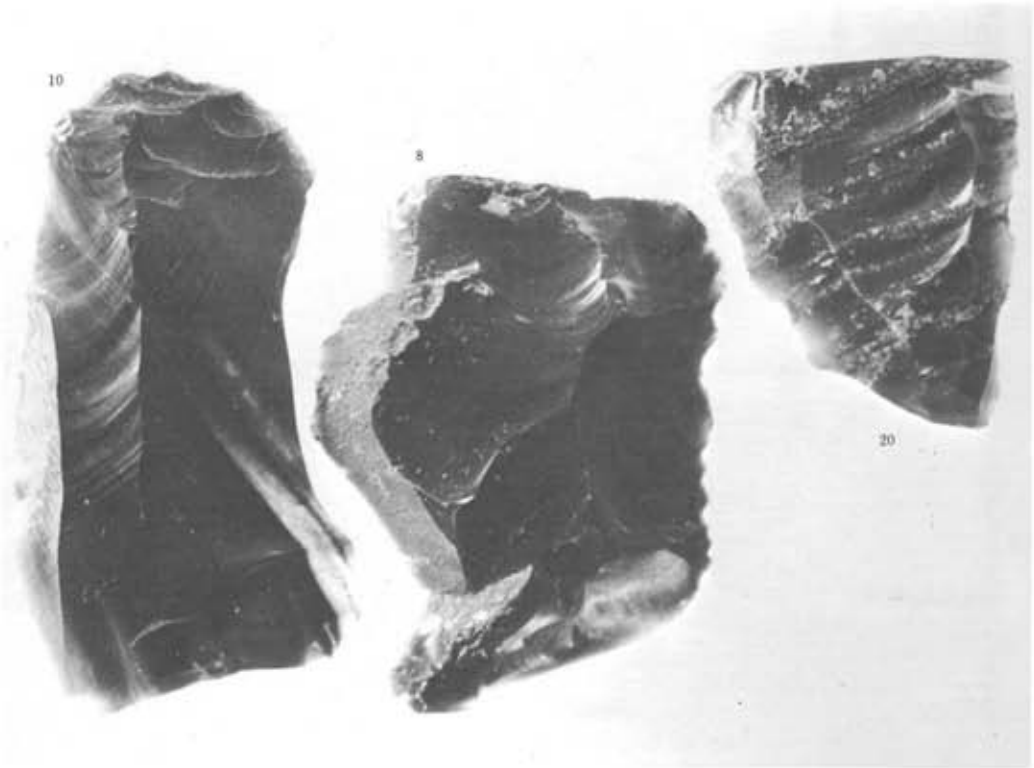
図版12— 2　尖頭器状石器②



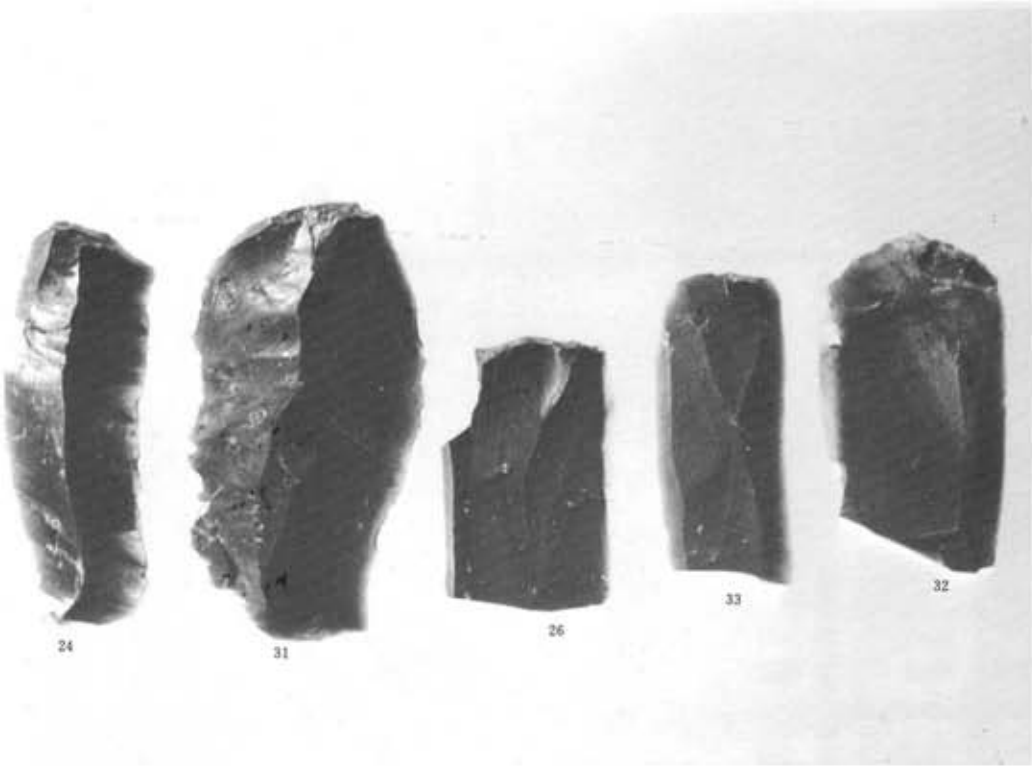
図版13— 1　掻器・削器①



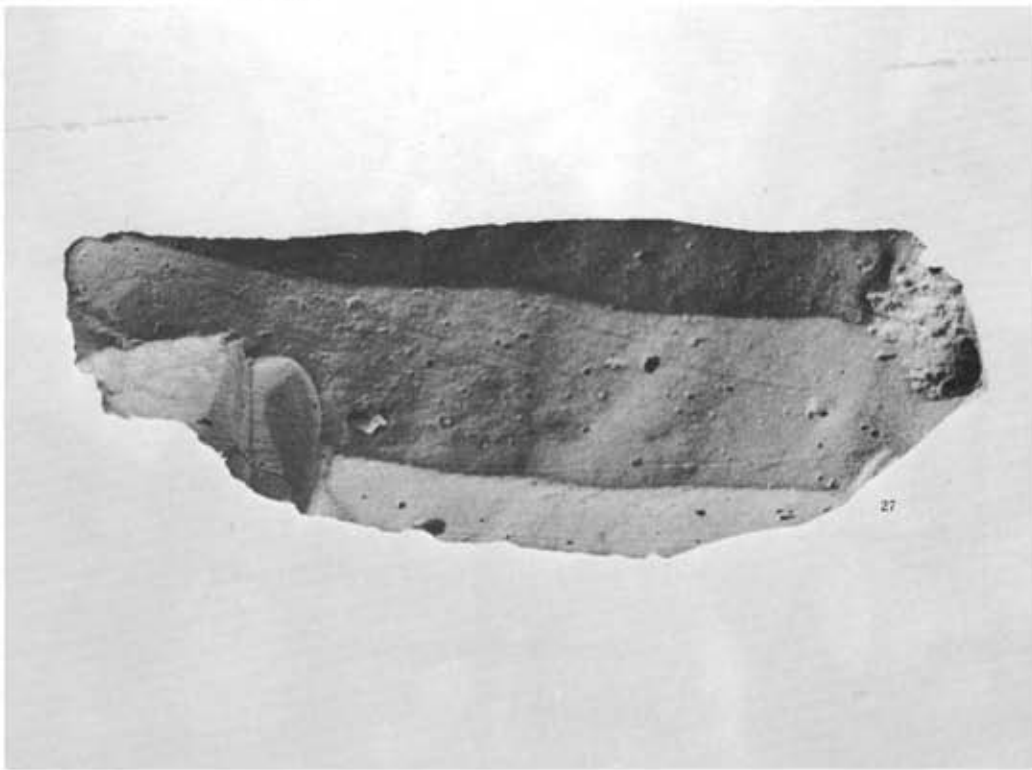
図版13— 2　掻器・削器②



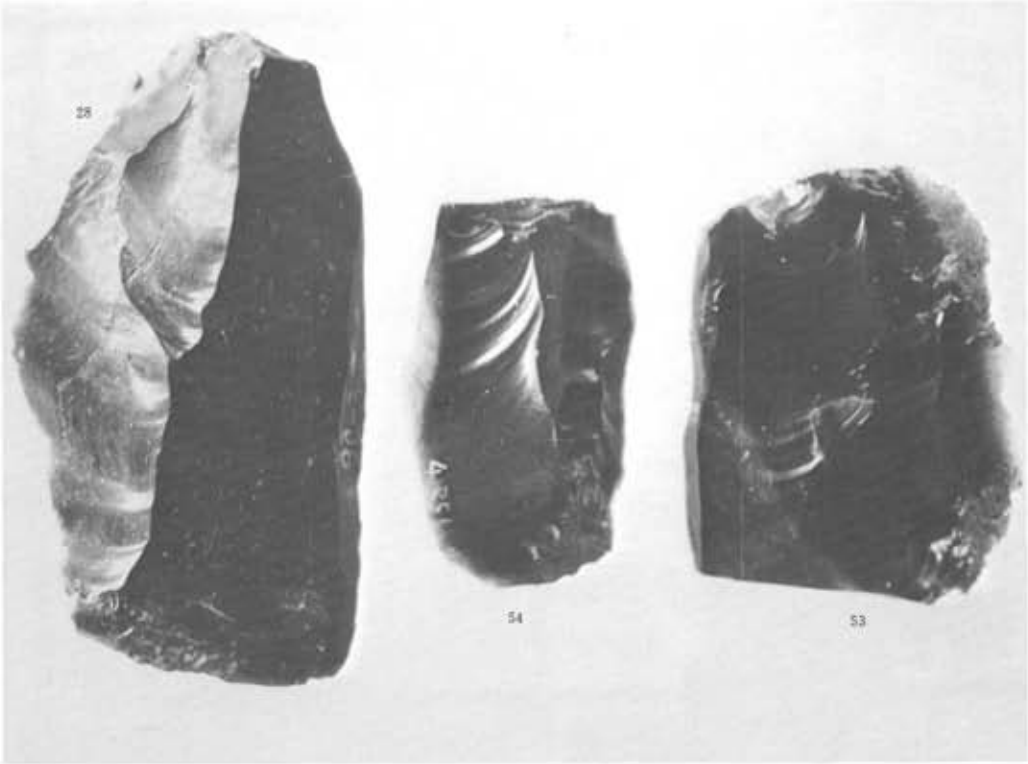
図版14— 1　刃器・剝片①



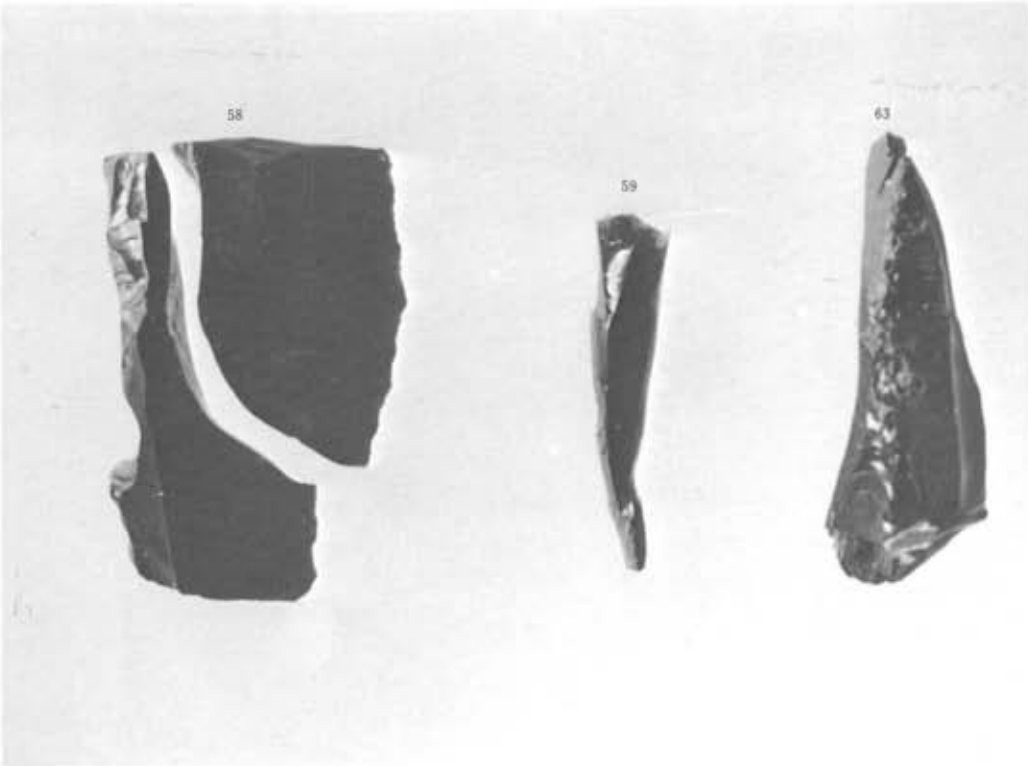
図版14— 2　刃器・剝片②



図版15— 1　刃器・剝片①



図版15— 2　接合資料・スポール



発掘風景

発掘調査団記念写真

第 II 部

森 の 下 遺 跡

＝唐津市鏡・久里地区文化財調査報告書第３集＝

もくじ

１．発掘調査の経果……71
２．歴史的環境……75
３．森の下遺跡……76
　(1) 遺　構……76
　(2) 遺　物……80
４．おわりに……93

挿　図　目　次

第１図　唐津周辺図……72
第２図　鶴崎丘陵周辺図……73
第３図　森の下遺跡遺構配置図……77
第４図　木器出土状況……75
第５図　溝状遺構（Ｍ－１）実測図……79
第６図　溝状遺構（Ｍ－１）出土土器実測図……82
第７図　溝状遺構（Ｍ－１）出土土器実測図……83
第８図　Ｏ区出土土器実測図……85
第９図　その他の地区出土土器実測図……86
第10図　その他の地区出土土器実測図……87
第11図　石器実測図……88
第12図　石器実測図……90
第13図　木器実測図……92

図　版　目　次

1　夕日山より遺跡を望む……97
2　遺構の全景……97
3　溝状遺構（Ｍ－１東側より）……98
4　まな板出土状況……99
5　木製農耕具出土状況……99
6　溝状遺構（Ｍ－１）出土土器……100
7　Ｏ区出土土器……101
8　その他の地区出土土器……102
9　その他の地区出土土器・石器……103
10　石　器……104
11　木製品……105

1．発掘調査の経過

(1) 発掘調査団

調査主任　木下巧　　県教委文化課文化財調査係

調査員　　服部二朗　　〃

　　原田保則　　〃　　嘱託

協力　　県農地整備課・土地改良課・鏡久里土地改良区・唐津市教育委員会東宇木区・他有志

(2) 調査経過

昭和52年

1月24日　O区における遺構検出作業にかかる。

1月29日　O区は丘陵縁辺にあたり、耕地整理による削平、もしくはミカン園造成時の攪乱が濃厚となる。

1月31日　O—W線を基準として、O—W線より南を区割、トレンチ方式の調査に切り変える。

2月1日　O区東端に井戸址状の遺構が検出される。

2月2日　井戸址状遺構は掘り進むにつれ、性格不明の土壙となる。

2月5日　U区南北トレンチより、木製農耕具が5枚重なった状態で検出される。

2月9日　O区清掃作業。

2月10日　U区東西トレンチよりまな板検出。

2月11日　遺構検出作業終了。

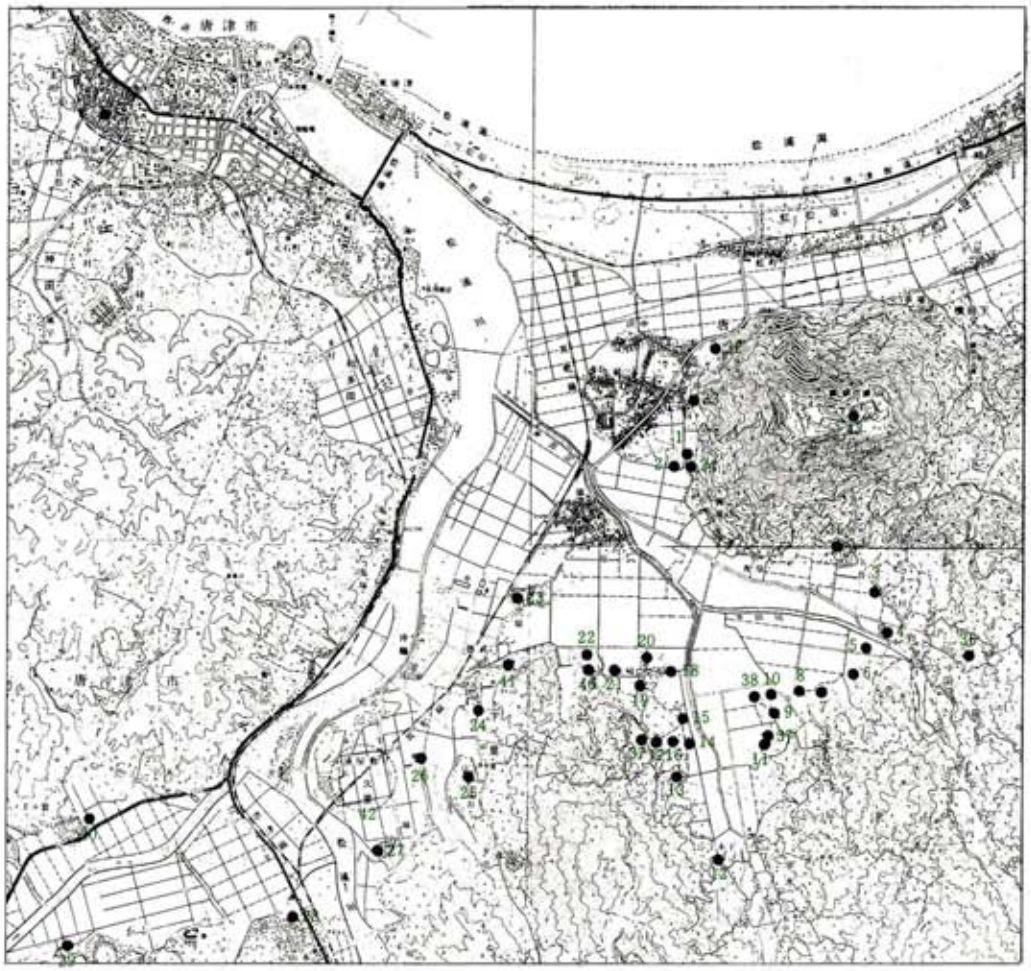
2月14日　写真撮影、実測開始。

2月15日　テント、器材の撤収。

2月24日　実測終了、遺物の取り上げ終了。

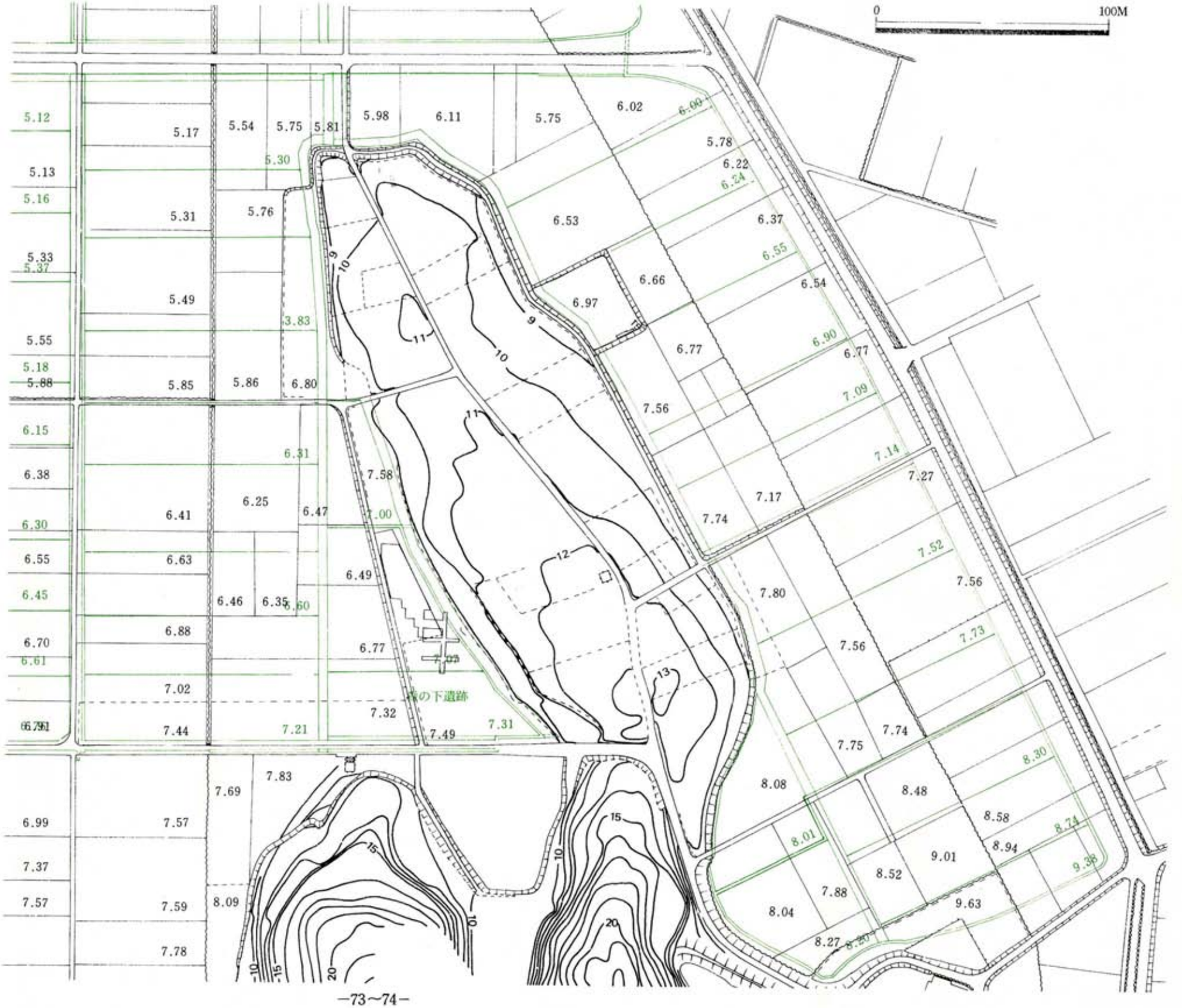
2月25日　遺物整理作業（3月31日迄）

第 1 図唐津周辺図



1）山添弥生遺跡	弥生時代	16）瀬戸口支石墓	弥生時代	31）桜の馬場遺跡	弥生時代
2）山添甕棺 〃	〃	17）長崎山弥生遺跡	〃	32）島田塚古墳	古墳時代
3）鶏の尾・井ケ田〃	〃	18）柏崎遺跡	〃	33）正願寺遺跡	〃
4）撰果場遺跡	〃	19）石蔵弥生貝塚	〃	34）樋の口古墳	〃
5）寺の下 〃	古墳時代	20）外園弥生遺跡	〃	35）杉殿古墳	〃
6）岸高支石墓	弥生時代	21）田島弥生貝塚	〃	36）宮の上古墳	〃
7）葉山尻支石墓	〃	22）割石弥生遺跡	〃	37）迫頭古墳群	〃
8）萬艠遺跡	〃	23）中原弥生遺跡	〃	38）塚サマ古墳	〃
9）鶴崎弥生遺跡	〃	24）石ケ崎弥生遺跡	〃	39）大長崎山古墳群	〃
10）東宇木遺跡	古墳時代	25）広首弥生遺跡	〃	40）割石古墳群	〃
11）迫頭弥生遺跡	弥生時代	26）久里小弥生遺跡	〃	41）部田古墳	〃
12）宇木平尾遺跡	〃	27）城弥生遺跡	〃	42）久里条里遺構	歴史時代
13）森田支石墓	〃	28）中尾弥生遺跡	〃	43）鏡山山頂遺跡	
14）宇木・汲田遺跡	〃	29）石志門田遺跡	〃	➜森の下遺跡	
15）汲田貝塚	〃	30）千々賀弥生遺跡	〃		

第２図　鶴崎丘陵周辺図



2．歴史的環境

松浦川を中心とした狭小な現在の唐津平野の南東部に位置する宇木盆地は、標高7m程度の低地部分とそれに連続する低丘陵末端部の圃場からなり、北は鏡山、南西は夕日山、三方山、南は飯盛山に包まれた地区で、わずかに北西部が海岸線とつながる砂嘴をなしている。この盆地を貫流する半田川と宇木川がここで合流し、西流して松浦川に注いでいる。

この宇木地区の旧石器時代には鏡山山頂遺跡や久里・松の元遺跡が知られている。

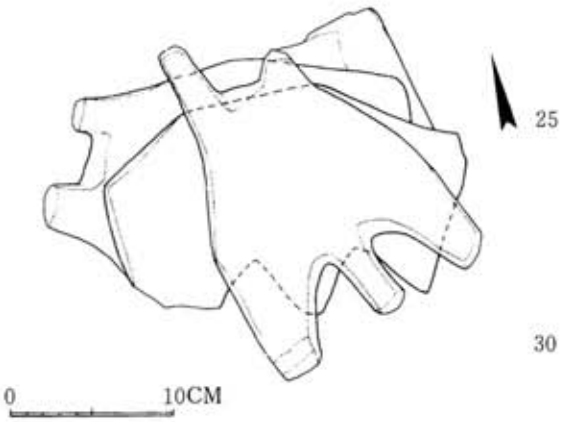
縄文時代には、鏡山山頂や和多田松浦川底、および宇木鶴崎（晩期貝塚）遺跡などがある。

弥生時代に入ると、宇木川左岸の低丘陵端には森田支石墓宇木汲田、柏崎遺跡、宇木川右岸から半田川左岸にかけての低丘陵には迫頭遺跡を始め、東宇木・葉山尻・岸高等の支石墓があり、半田川右岸に山添遺跡などが存在する。

古墳時代では、鏡山の西麓に在る島田塚前方後円墳をはじめ、樋の口古墳、また葉山尻、迫頭、柏崎などの後期古墳が点在し、また居址関係では、寺ノ下遺跡や東宇木遺跡などの住居址群が知られている。

この宇木地区は、弥生時代に入ると同時にその遺跡数は激増する。その中でも青銅器を出土した宇木汲田遺跡・柏崎遺跡・鶴崎遺跡が汲田遺跡を中心に半径1km以内に存在し、「魏志倭人伝」に云う末盧国との関連がうかがえ注目される。

第4図　木器出土状況



3．森の下遺跡

森の下遺跡は唐津市大字宇木字森の下に所在する。標高190m の飯盛山から北に延びた低丘陵一鶴崎丘陵の南西部の丘陵縁辺部に位置する遺跡である。標高は約8m である。

発掘調査は第3図に示すごとく、東西線（O—W、D—E）を基線として、O～W区の区割りを行なった。O区では溝を主体として、柱穴や土壙が検出され、P、R、S、U区において丘陵縁辺部が明確となり、その東側で柱穴などが検出された。

(1) 遺　構

柱穴当遺跡で検出された遺構のうち柱穴は群をなすが柱根を有する柱穴は1個所検出されただけで、いずれも建物を構成する配置関係を明確にすることはできなかった。

溝状遺構

溝状遺構はO区より2条検出された。そのうち南側に在る小溝（M—2）は性格不明である。北側に在る溝（M—1）は、東西に延びその幅が2～3m である。この溝状遺構の北側の壁は2段になっており、上段は東側へ反転しピットにつながって消える。南側の壁は数個の土壙と切り合っている。南壁は東側の大形土壙付近より始まり西側は調査区外にのびる。

この溝状遺構から検出された遺物には土器および勾玉があって、ほぼ床面に接していた。

土壙

P—1は性格不明のピットであるが、中に器台形土器を1個内蔵していた。

P—2はM—1と重複し、検出された土器が浮いていたことなどから、M—1よりも古い時期のものであろう。

P—3は器台や鉢形土器などを検出した。

P—4は横倒しになった柱状の木材や石が詰っており、この東側には板と大型の甕形土器が検出された。この土壙の東側だけをみると井戸址のような感じを受けるが攪乱を受けているようで、性格は不明である。これより出土したものには陶質の甕、土師器皿、須恵器杯などの破片や凹石、砥石がある。

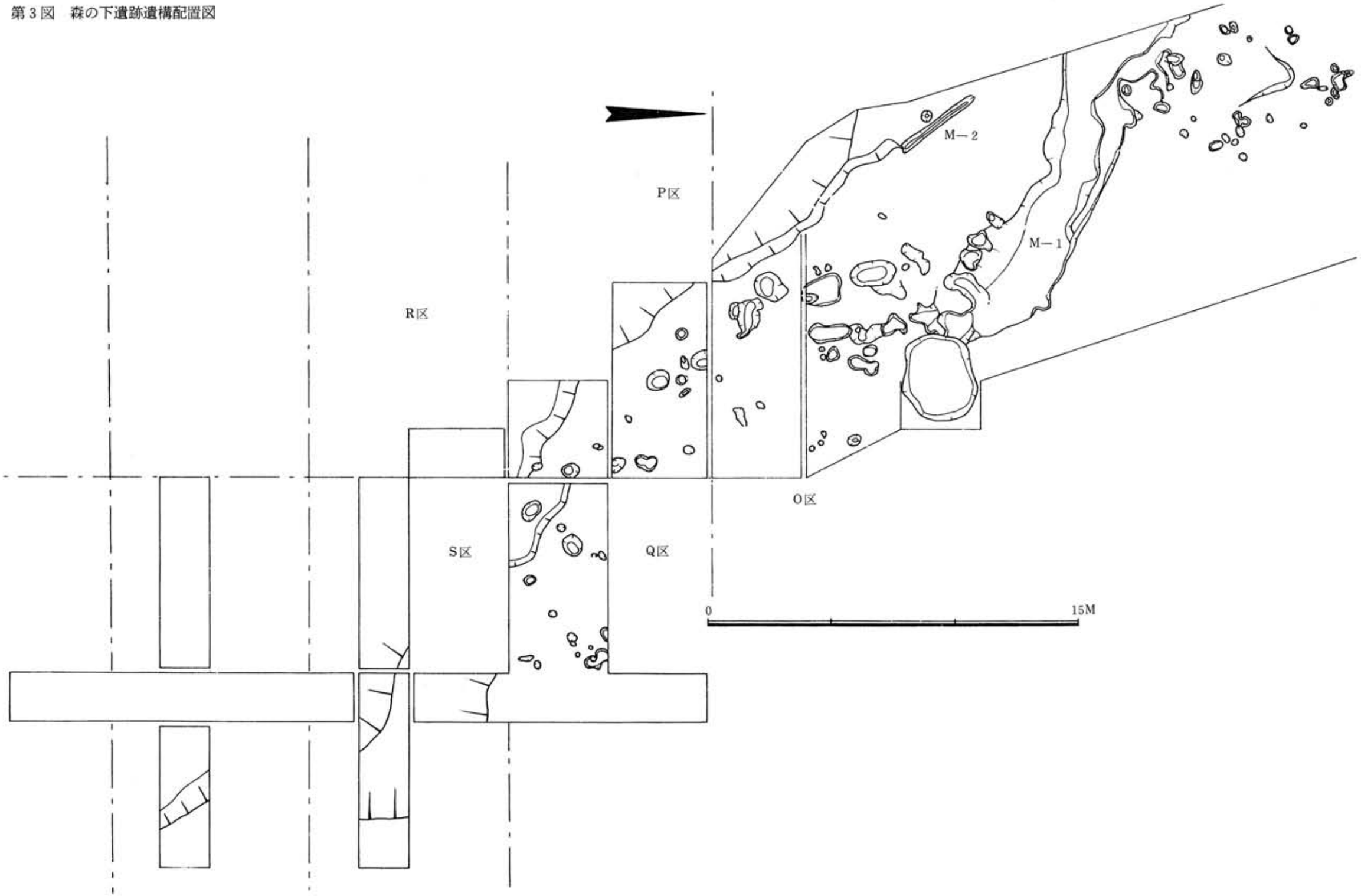
P—5は隅丸長方形を呈し、土壙墓であった可能性も考えられる。

P—6は掘りの浅いもので、壙内より手捏土器が出土しているが、これは流れ込みの可能性が強い。

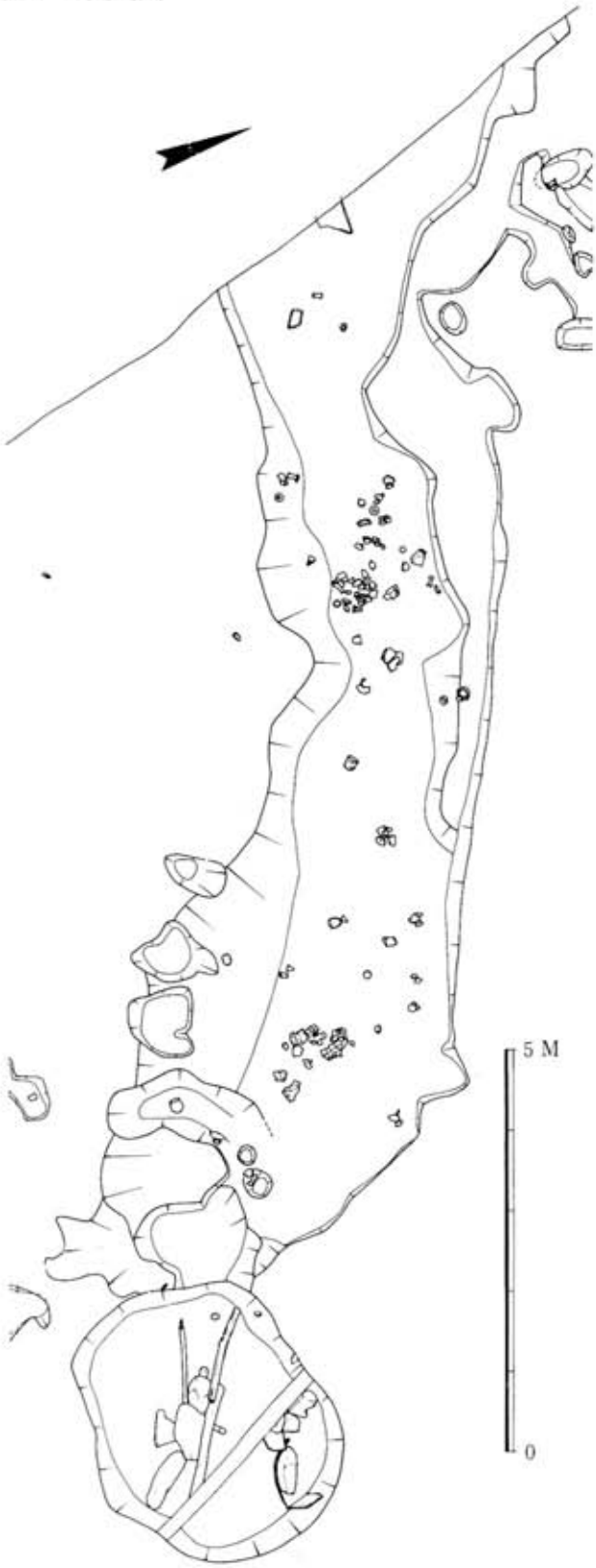
P—7は柱根を検出したものである。柱根の残りは余りよくなかった。

その他、U区南のトレンチ内から木製農耕具が5板重なった状態で出土しており、同じく東西トレンチからはまな板が検出された。

第３図　森の下遺跡遺構配置図



第５図　溝状遺構Ｍ－１実測図



(2) 遺　物

出土した主な遺物は弥生式土器、土師器、須恵器などの土器類、土製品、石器、木製品などである。弥生式土器はO区ピット内やM－2などから検出され、土師器はM－1を中心として遺跡全体から検出された。また、須恵器は後世に攪乱を受けた表層からの検出が多かった。石器類は、O区を中心としてやはり後世に攪乱された状況で検出され、木製品は、丘陵縁辺の下側、黒褐色土層より検出されたものである。

土器

M－1出土土器（第6図・第7図）

甕形土器（第6図1～4．10）　全体に「く」の字口縁のものが多く、④直行する口縁を持つ。①は内面を篦削りによる調整、④は外面の底部付近を篦削り、体部を刷毛目で調整している。③の胎土は大きめの砂粒を多く含み、淡黄色を呈し、胴部外面には煤の付着がみられ、底部は赤褐色を呈する。二次焼成を受けたものであろう。口径12.9cm・器高16.1cm。

壺形土器（第6図7）　口縁が「く」の字形をしたもので、甕形土器に似た器形をもち肩が張るものと思われる。調整は不明である。胎土は砂粒を多く含み、灰黄色を呈する。口径13.8cm。

器台形土器（第6図8）　鼓形の変形したもので、支脚への変化がうかがえる形態である。内外面ともに指押えによる成形を行なっており、端部のみ撫で調整を施している。胎土は、砂粒を多く含み、淡茶褐色を呈する。

椀形土器（第6図9）　丸味を帯びる底部に稜がついて、やや内彎し直行する口縁部をもつ形態である。不明瞭であるが、緻密な撫で調整が施され、表面は薄く剝落した部分がある。また底部中央には1.0×0.4×0.5cm（深さ）程の凹があり、稜から体部にかけてねじったような形跡がある。胎土は砂粒を含み、淡黄橙色を呈すが表面は口径11.6cm・器高3.6cm。

手捏土器（第6図5・6）　⑤は皿形を呈し、⑥は鉢形を呈するもので、ともに砂粒を含む胎土である。⑤は口径8.6cm・器高3.6cm。

高杯形土器A（第7図1）　杯部は、外反する口縁部をもち、平たい底と体部に明瞭な粘土接合のあとが見られ身の深い形態である。脚部は、欠損するが、おそらくエンタシス形の柱状部が下方で広がる形態と思われる。胎土は砂粒を多く含み赤灰色を呈するが、二次焼成を受けていると思われる。口径17.1cm。B（第7図2．6．7）　杯部はゆるやかに内彎する直行の口縁をもつ形態で屈曲部がAより上位に位置する形態である。脚部は、柱状部に孔を有し、その孔の上部付近から、内彎気味に開いて裾部を楕成する形態である。⑥は脚内面の調整に刷毛目が施され、孔は4つで内側に穿孔の際粘土がとび出している。⑦の調整は、器面が荒れており、不明である。4孔で孔間の距離は一定

でない。胎土は大粒の砂粒を含み、赤褐色を呈する。口径17.5cm・器高12.0cm。C（第7図5）　杯部は内彎しながら立ち上る椀形の形態で身が深い。脚部は、杯部との接合部からすぐ裾がひらく形態で、孔を3つ有する。杯上部は横撫でその他の杯部は撫で、杯部と脚部の接合部は横撫で、脚部外面は撫で、内面は不定方向の刷毛目で調整している。胎土は、大粒の砂粒を多く含み、茶褐色を呈する。口径約10.0cm。D（第7図3．4）　杯部は内彎しながら、体部中位の粘土接合部をすぎ、口縁部付近で外反する形態である。脚部は柱状部がほぼ垂直にのび下端に孔が3つあり、裾部はやや大きく広がる形態である。④は器面が荒れており調整は不明瞭だが撫で調整が多いようであり、脚部外面は刷毛目と思われる。全体的に器壁は薄い。胎土は、小砂粒を含み明褐色を呈する。

O区出土土器（第7図・第28図）甕形土器（第8図7～10）　口縁部のみの出土である。⑨・⑩は逆「L」字状口縁を呈する形態で横撫で調整を施したものである。内側の突出はやや退化した感じを受ける。⑦・⑧は口縁が「く」の字状に外反する形態で⑦は外面は叩き、内面を横撫でで調整しており、くびれ部下に輪積みのあとが認められる。口径14.1cm。⑧は横撫でで調整されている。口径23.2cm。

壺形土器（第8図5）　肩が張り、口縁が「く」の字状にやや外反する形態である。外面は縦方向の刷毛目、内面は口縁部付近が斜方向、肩部付近でほぼ横方向の刷毛目で調整されている。胎土は砂粒を含み、茶褐色を呈する。口径15.8cm。

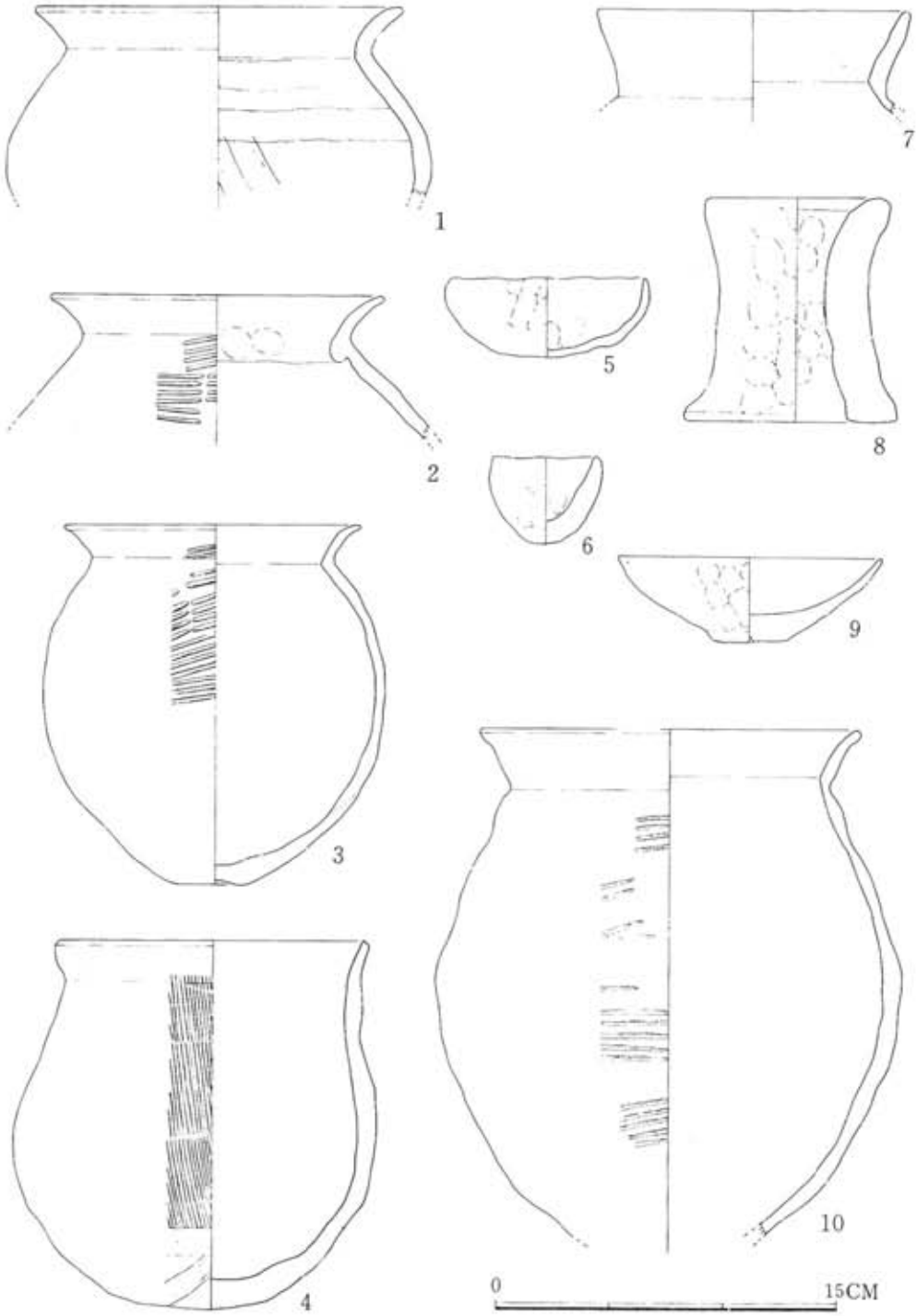
器台形土器（第8図1．2）　①は鼓形を呈する形態であり、下端部の方が上端部よりやや広がっている。内外面とも指押えによって整形し、さらに中央を絞っている。端部は丁寧に仕上げている。上端部径6.9cm、下端部径8.9cm。②は高杯形を呈する形態で、上部を欠失する。下部は、M－2出土高杯のB類に分類される形態で3孔を有する。器面が荒れているが、外面裾部付近は刷毛目を施していたものと思われる。胎土は砂粒を含み、灰白色を呈する。

支脚形土器（第8図3．4）　③は体部が円筒状を呈するものでその両端の内面は大きく外反し、外面は短かく屈接する形態である。外面は指押えによる調整である。④は円柱状を呈し、上下に凹があり、下端部が開く形態である。外面は指押えで整形しており、上下端部と凹み部は撫で調整が施されている。胎土は砂粒を多く含み赤褐色を呈し、一部黒変している。上端部径5.2cm、下端部径7.7cm、器高10.8cm。

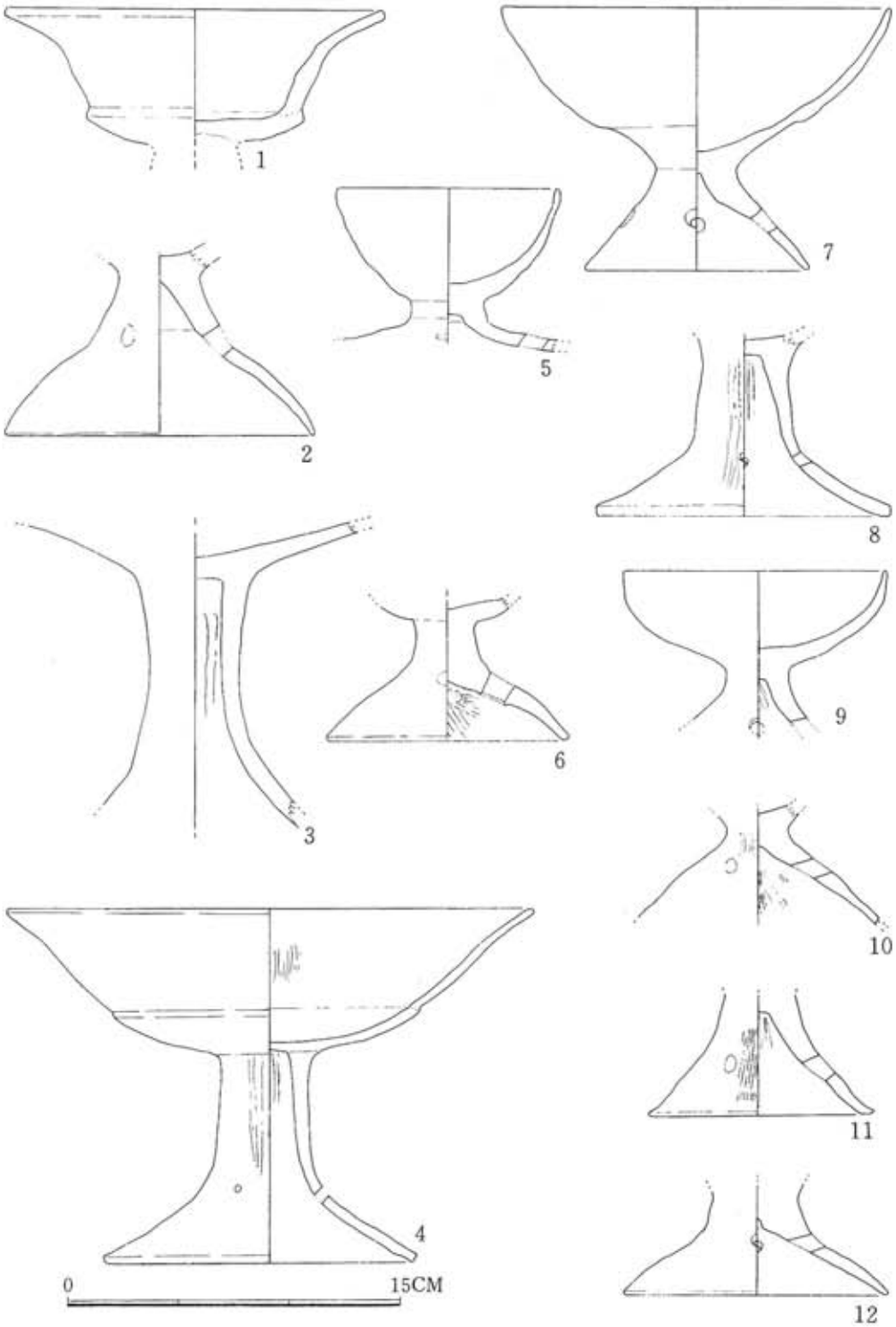
高杯形土器（第7図8～12）　M－2出土の高杯から見ると⑧はD類、⑨は杯部がC類脚部がB類に、⑩はC類、⑪、⑫はB類に分類されると思われる。⑨は器面が荒れているが杯、脚の接合部が横撫でのようであり、脚内面には、絞ったような跡がわずかに窺える。胎土は砂粒を多く含み、淡赤褐色を呈する。口径11.8cm。

手捏形土器（第8．11．12）　ともに鉢形を呈し、砂粒を含んでいる。⑫は灰褐色を呈し、口径6.8cm、器高5.3cm。

第６図　溝状遺構Ｍ－１出土土器実測図



第７図　溝状遺構Ｍ－１出土土器実測図



その他の地区出土土器（第９図．第10図）　甕形土器（第９図３．４．第10図６）
④はＲ区より出土したもので、丸底から胴中位で最大幅となり、口縁部が「く」の字状を呈する。内外面とも刷毛目が施され、口縁部を横に撫でで仕上げている。胎土は小砂粒を多く含み、灰褐色を呈する。口径16.0cm、器高23.5cm。⑥は台付甕の底部付近である。

壺形土器（第９図１．第10図、１．２．３．４）

①はＵ区より出土したもので、短く外反する口縁部と球形の体部と丸底をもつ形態である。外面は口縁部付近まで刷毛目調整、内面は口唇部付近まで篦状のもので磨いている。胎土は砂粒を含み、灰褐色を呈する。③④はＵ区より出土したもので口縁部が「く」の字形を呈し、やや外反し、体部は肩のはる形態である。ともに調整は不明であるが、④の内面にわずかに刷毛目がうかがえる。③の胎土は小砂粒を含み淡褐色を呈する。①は長めの頸部に二重口縁がつく形態である。外面は頸部に刷毛目、口縁部に６条の波状文を施し、内面は口縁部に刷毛目を配し、頸部は横撫で調整している。②はＲ区より出土したもので短かい頸部と二重口縁をもつ形態である。外面と内面の口縁部から頸部までは横撫で調整しており、肩部より下は左から右方向へ横位の篦削りを行なっている。胎土は大粒の砂粒を含み灰褐色を呈する。

台付鉢形土器（第９図８）

Ｕ区より出土したもので、大形の椀形を呈するものに脚台をつけた形態である。外面の台部上半分から体部にかけてと、体部内面に刷毛目を施し、その他を横撫でで調整している。胎土は小砂粒を含み淡褐色を呈する。口径19.3cm、台部径12.4cm、器高11.9cm。

器台形土器（第９図２）

Ｕ区より出土したもので、口縁部が「く」字形を呈する形態である。外面は縦位の刷毛目、内面は横位の刷毛目で調整している。胎土は砂粒を含み淡赤褐色を呈する。

椀形土器（第10図５）

Ｕ区より出土したもので、平底気味の底部に直線的に開く口縁がつく形態である。器体全体に撫で調整しており、内面底部は指押えをしている。

甑形土器（第９図５）

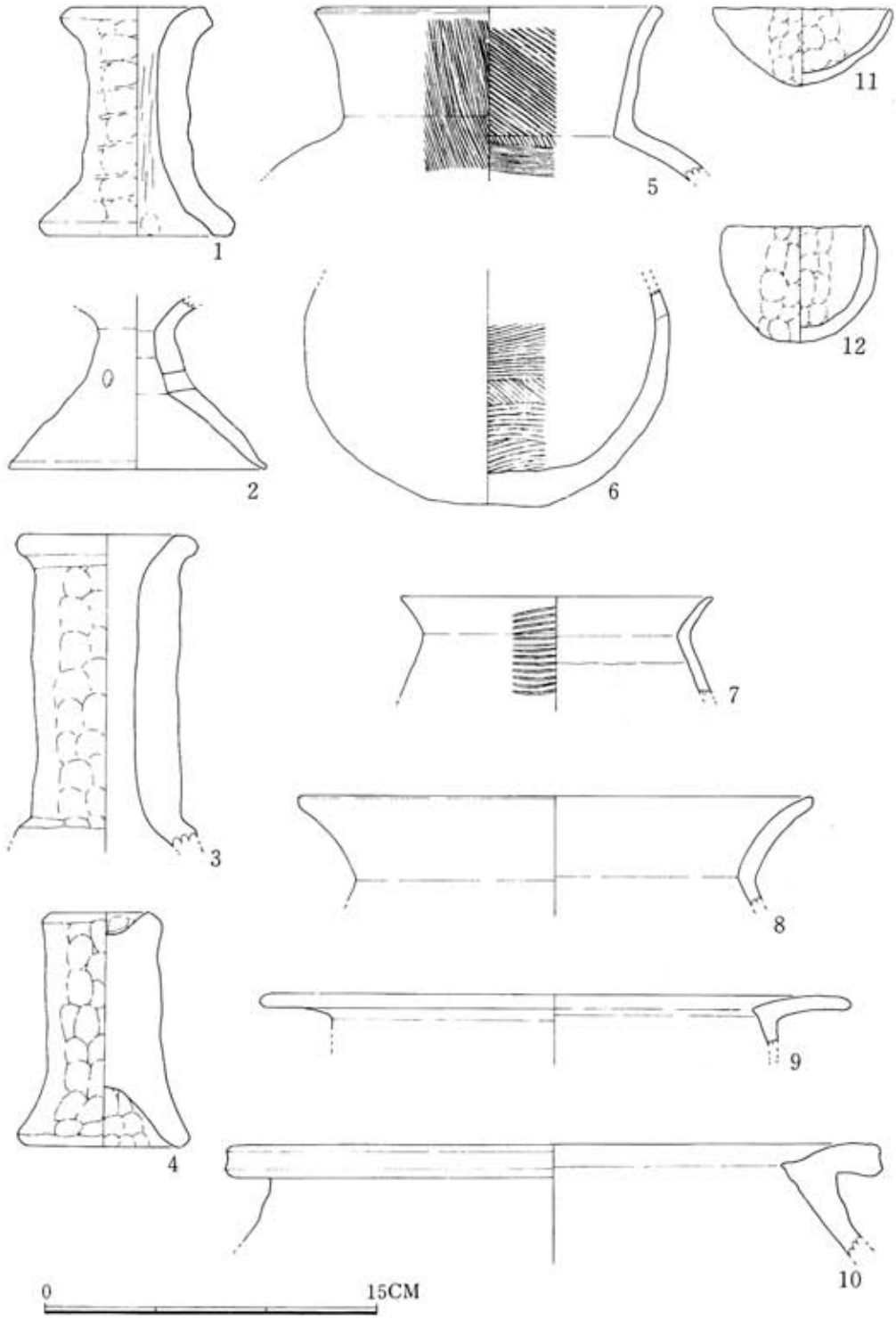
底部そのものが孔となっており、胴上部に把手がつき、やや外反する口縁のつく形態である。器体の外面は撫で調整し、内面は口縁部より胴上部まで横位、それより底部付近まで縦位の篦削りを行なっている。胎土は砂粒を含み、灰色を呈する。口径22.1cm、孔径7.0cm、器高21.0cm。

須恵器（第10図）

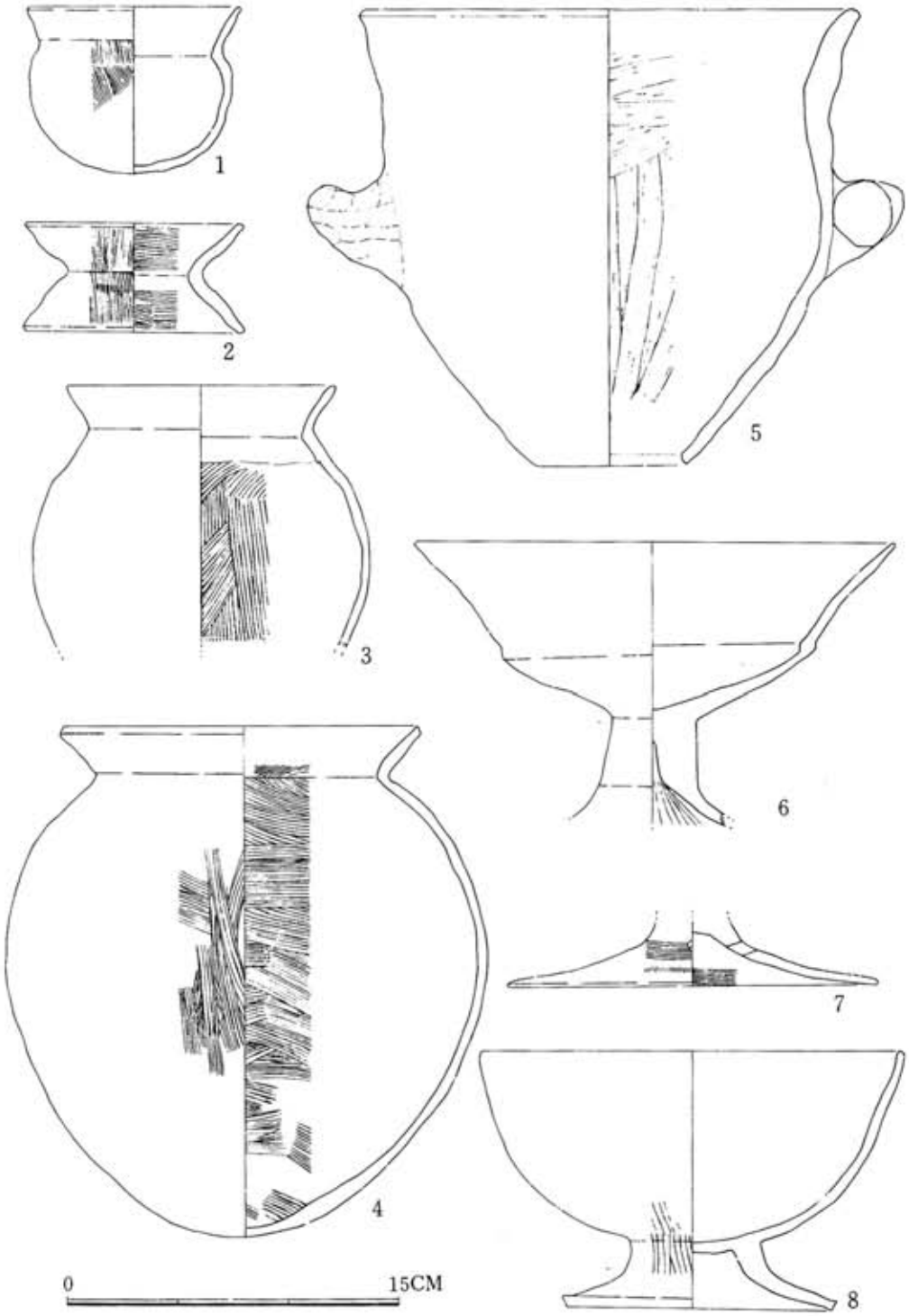
杯（第10図７～13）

全てＵ区より出土したものである。⑦は杯蓋で立ちあがりは垂直に近く、口唇部に段

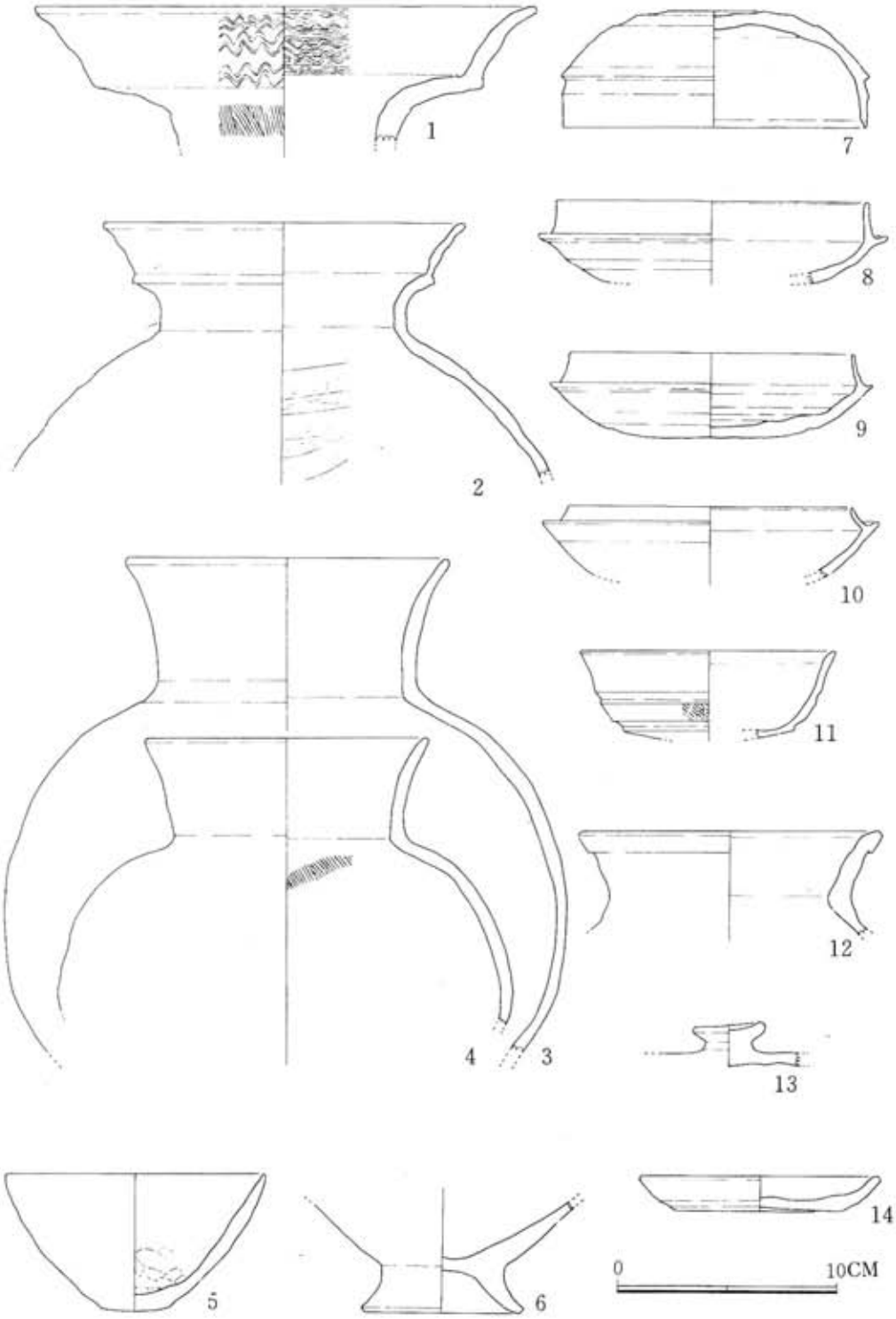
第8図　O区出土土器実測図



第9図　その他の地区出土土器実測図



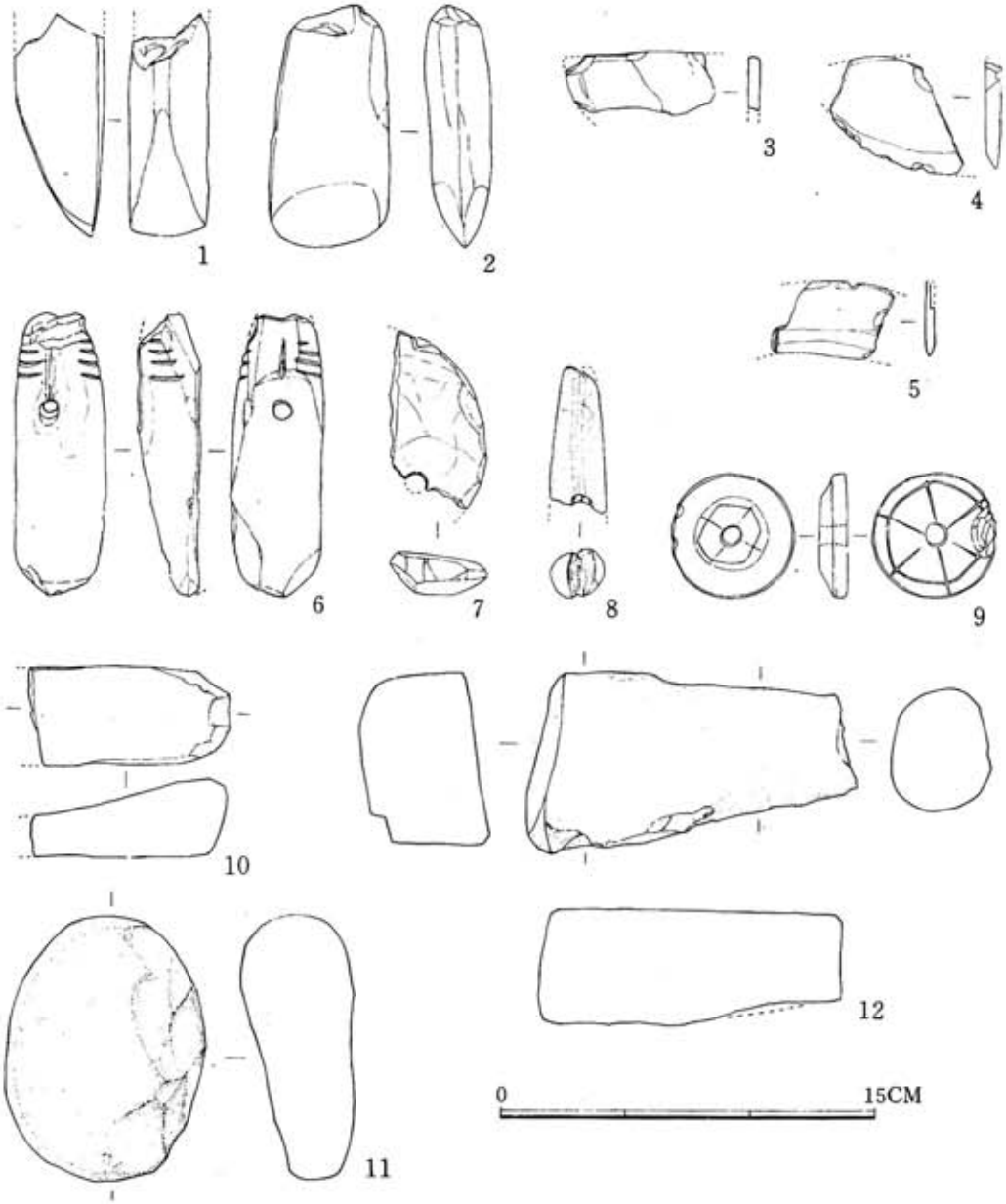
第10図　その他の地区出土土器実測図



を有する。底部は篦削りされている。⑧、⑨、⑩は杯身で⑧が立ちあがりが垂直に近く、⑩になるに従って傾いてくる。体部中位より篦削りされている。ロクロ方向は右廻りである。⑪は高杯の杯部で、体部中位と底部付近に2条沈線が回る。下側の沈線から篦削りが行なわれ、それまでは横撫で、撫で調整されている。⑬は蓋で疑宝珠形のつまみを有するものである。⑦の胎土は砂粒を含み、白灰色を呈する。

⑭はO区より出土したもので、土師の小皿である。底部は糸切痕がある。胎土は砂粒を少し含み、灰白色を呈する。

第11図　石器実測図



石製品（第11図、第12図）

M－1から出土した石製品は勾玉（ヒスイ製）が唯一のもので、他のほとんどがO区からの出土であった。石斧（第11図1．2、第12図9）①は方柱状片刃石斧である。基部を欠失するため不明だが、扶入になるものと思われる。粘版岩系のもので偏平部と刃部を研磨している。現在長9.1cm、幅3.2cm、厚さ3.6cm、②はほぼ完形品で蛤刃形態を呈する。白色に近いやや軟かい感じの石材を使用しており、刃部のみを研磨したものである。刃部に使用痕らしき擦痕を認め得る。現在長9.9cm、幅4.9cm、厚さ2.6cm。⑨は偏平片刃石斧であり、その中でも手斧（チョウナ）に属するものであるが、基部と刃部の一部を欠失する。石材は粘板岩で全体が丁寧に磨かれている。厚さ0.6cm。

石疱丁（第11図3．4）

ともに破片であるが、外彎刃半月形態に属するものである。①はP区より出土したものである。スレートを石材としたもので刃部は片刃を呈する。②は粘板岩系の石材であり、片刃である。

石鎌（第11図5）

内彎刃形態の両刃式のものである。石材はスレートで風化が著しいため使用痕などは不明である。現在長4.8cm、幅3.1cm、厚さ0.4cm。

石錘（第11図6．7．8、第12図6）

⑥は基部と縦半分を欠失したものである。円柱状を呈し、先端が尖り気味となり、中央部に孔を穿ち、その孔より基部にかけて溝をつけた形態である。基部に横に入る小溝は装飾を施したものと思われる。石材は赤褐色の滑石を使用している。⑦も滑石製であるが、その形態は不明である。ただ中央部と思われる付近に孔が認められる。⑧は⑥と同様の形態を呈するが、小品である。6は両端を尖らした円柱形態のものである。両端に2～3条の小溝を穿っているが、これは溝が交り合っている。灰色を呈するが石質は不明である。長さ5.3cm、径1.2cm。

紡錘車（第11図9）

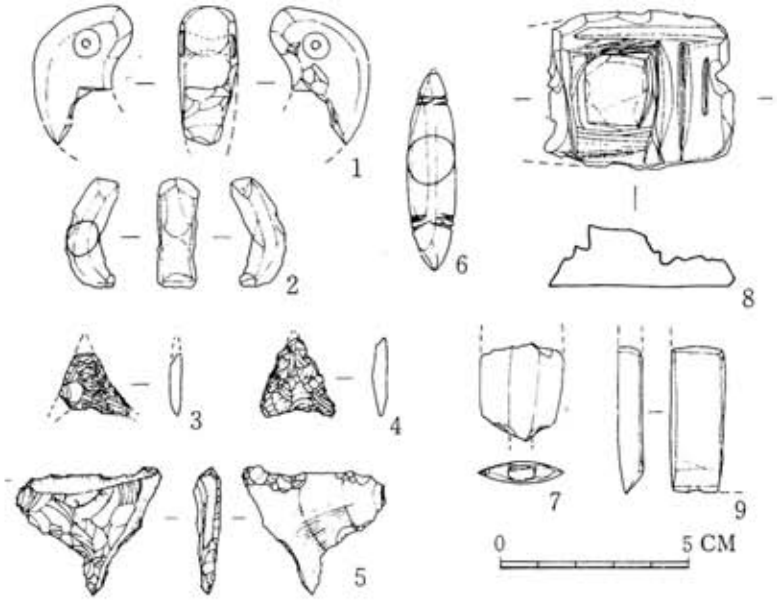
有段形態で、二段形式のものである。上段と裏面に各々線刻文様を施している。石材は青味がかった滑石を使用している。直径5.1cm、孔径0.9cm。

砥石（第11図10）

平面が長方形を呈し、中程から欠失しているが、4面を使用している。幅の広い面はよく使用された形跡があり、中央付近が凹んでいる。石材は砂岩質であるが堅く微密である。現在長8.0cm、幅4.0cm、厚さ3.1cm。

凹石（第11図11）

平面が楕円形を呈し、中央がやや凹んでいる。凹み部分はほぼ円形を呈する。乳白色の砂岩系の石材を使用し、両面を利用している。長さ10.8cm、幅8.0cm、厚さ4.5cm、凹



み部分の直径約3.1cm。

石鏃（第12図３．４．７）

③、④は黒曜石製で比較的抉りの浅いものである。③は半磨製であって、縄文時代早期や前期に多い手法である。⑦は茎と先端を欠失するが磨製有茎石鏃で、やや大きめの柳葉形のものになると思われる。石材は灰白色の粘板岩系のものを使用している。

石錐（第12図５）

黒曜石の縦長剝片を素材とし、右裏面に折瘤がありカットされている。中央部よりやや下方にノッチがいれられブランティング調整が施され、先端部加工はやや粗雑である。また、左表面の上部と右側には自然面が残る。長さ3.4cm、幅3.8cm、厚さ0.7cm。

勾玉（第12図１）

硬玉製で、孔は両面穿孔している。下半を欠失する。

用途不明石器（第11図12、第12図８）

⑫は基部（右側）が円柱状を呈し、柄のようなものとなり、一方（左側）は柱状を呈するものである。二次的利用が考えられ横槌的用途が考えられる。石材は砂岩系のものである。長さ13.4cm、幅7.4cm。⑧はU区より出土したもので滑石製品である。

(3) 土製品

土製品としてはO区より出土した勾玉（第12図２）がある。これには孔はなく、尾は指でとめたような痕跡があり、頭部は指で折り曲げた感じを受けるが詳細は摩耗が著しいため不明である。胎土は細砂粒を多く含み、暗灰褐色を呈する。長さ2.9cm、幅0.9cm。

(4) 木製品（第13図）

検出された主な木製品は、U区より出土した。木製農耕具は5枚重なった状態で、二又鍬、三又鍬などがあり、材質は樫類であろうと思われる。

①と②は二又鍬で上から1番目と4・5番目に重なっていたものである。歯部が板状をなし基部から歯にかけて肩をもつ形態である。①は4・5番目からの出土で歯を折ったものと思われ、また、上部だけに歯をつけたようであり、二次的加工を行なったものと思われる。柾目に近い木取りをしており、①上部の現在長は21.0cm、基部孔の幅 3.2cm。②は20.0cm。

③は三又鍬で歯部先端を欠失する。2番目に出土したもので、板状をなし、基部から歯にかけて肩をもつ形態である。基部から歯にかけて縦のチョウナ痕がわずかにうかがえる。柾目材を使用しており、現在長は20.3cm、最大幅15.2cm、基部孔の幅2.9cm。

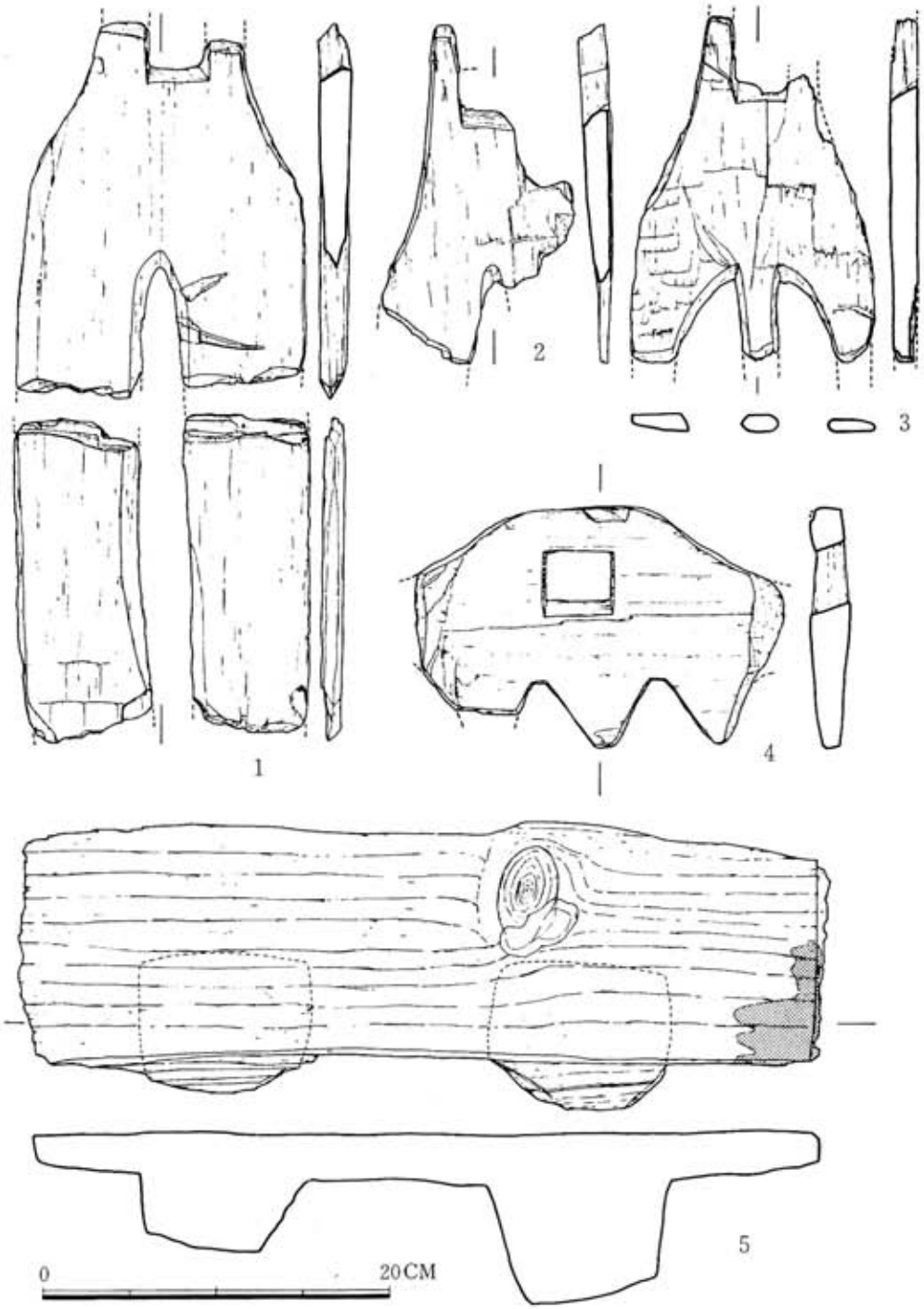
④は柄振で3番目から出土したものである。歯部をわずかに欠失するが、3本歯ではない可能性が強い。基部から歯にかけて肩もつ形態で歯は平面でほぼ正三角形を呈する。柾目材を横に木取りしている。現在長14.2cm、現在最大幅21.3cm、基部孔の幅3.8cm。

⑤はまな板で半分を欠失する。板状の身部と方柱状の脚台のつく形態である。脚台の現存は2個であるが、本来は4個あったものと思われる。柾目材を横に木取りしている。現在長14.2cm、現在最大幅21.3cm、基部孔の幅3.8cm。

⑤はまな板で半分を欠失する。板状の身部と方柱状の脚台のつく形態である。脚は2脚であるが、本来は4脚であったものと思われる。身部表面には節があり、また一隅は焼けて黒くなっている。材質は不明であるが、やや軟かめのものを使用したと思われる。現在長46.5cm、現在最大幅13.0cm。

（原田保則）

第13図　木器実測図



4 おわりに

唐津市鶴崎丘陵には、銅戈を出土したと言われる鶴崎弥生遺跡を始め、東宇木遺木遺跡、迫頭遺跡など弥生時代から古墳時代の遺跡の存在が知られている。この丘陵が原始時代から生活の舞台としての好条件を具備していたことを物語るものであろう。

今回発掘調査を行った森の下遺跡は、溝状遺構を主体とするものであるが、住居址等の生活遺構を明確化することはできなかった。この区域が削平され水田化された時点で遺構の破壊がなされたためであろう。この溝状遺構の周辺には、小規模な住居址の存在が推察されるのである。

この遺構は、古墳時代前期の所産になるものと考えられるのであって数少ない木製農耕用具を出土している。隣接する寺ノ下遺跡には竪穴式住居址群・東宇木遺跡における井戸址とともに当時の生活様式を探る手掛りが得られたことは注目される。

また、遺構に伴って出土する土器は古式土師器の範疇であって、この唐津地域の古式土師器の系譜や、佐賀平野における古式土師器との系統、さらには中国・畿内地方との関係などの考察など今後の研究課題であろう。

鏡・久里地区の圃場整備事業に伴う文化財調査報告書第３集を刊行するが、この地区の調査が終了した時点で総括時に考論したい考えである。　　（木下　巧）

あとがき

１．本部報告書第Ⅱ部は昭和51年度農業基盤整備事業に伴う、発掘調査の報告書である。

２．本報告書の作製は県教育委員会文化課文化財調査第２係で行なった。編集は原田保則が主に当たり、服部二朗・山本タカ子が協力した。執筆は原田が行なったものを木下が補足修正した。

３．遺物実測は、原田・山本・池田高子・福島憲子・古賀啓子・中尾とし子、トレースは服部・七田忠昭・藤原新子・馬場悦子が行なった。

４．写真は服部・原田・田平徳栄・中島直幸が撮影した。

第Ⅱ部

森の下遺跡

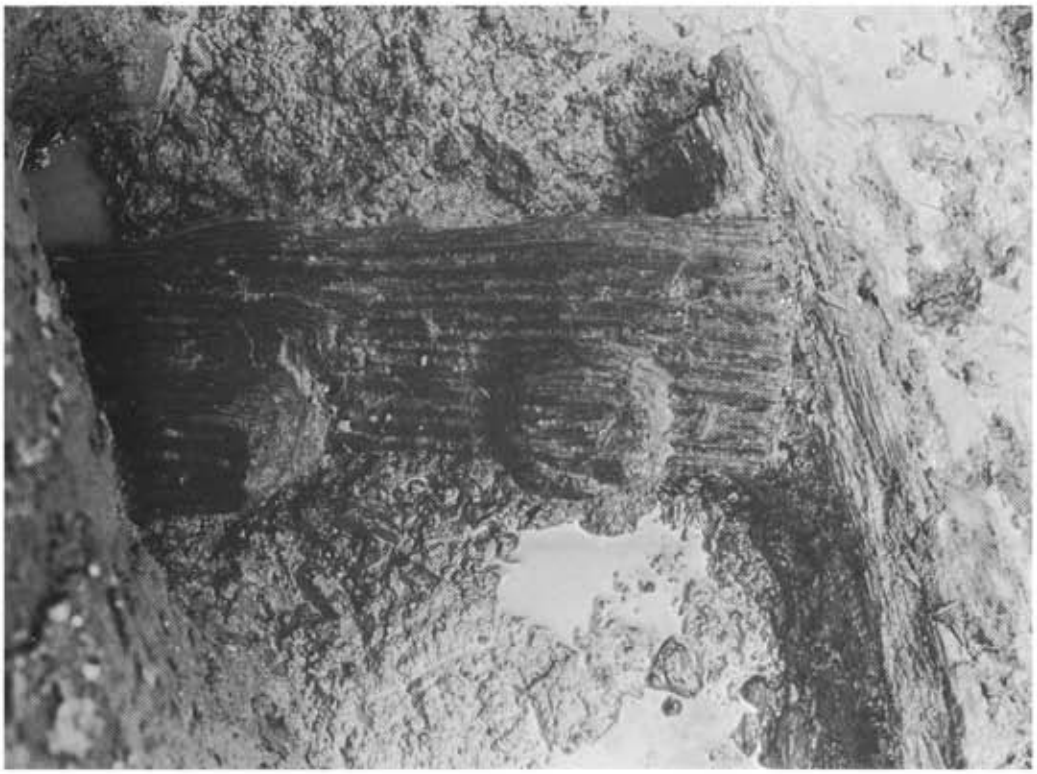
図版

1．夕日山より遺跡を望む

2．遺構の全景

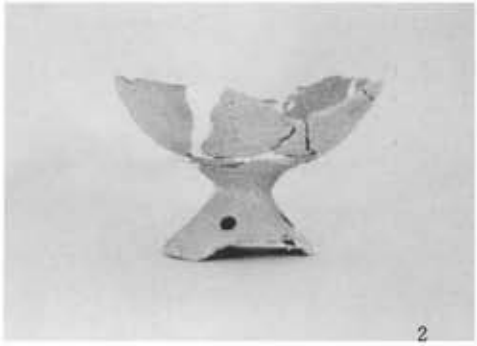
3．溝状遺構（M－1）（東側より）

4．まな板出土状況



6．溝状遺構（M－1）出土土器

1

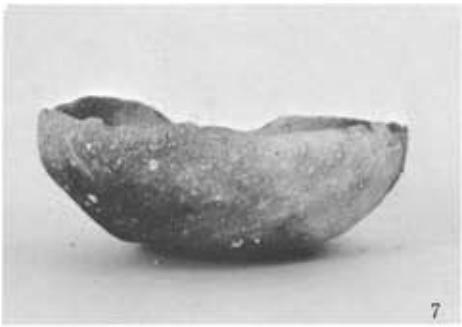

2

3

4

5

6


7

8

7．O区出土土器

1

2

3

4

5

6

7

8

8．その他の地区出土土器

1

2

3

4

5

6

7

8

9．その他の地区出土土器・石器

1

2

3

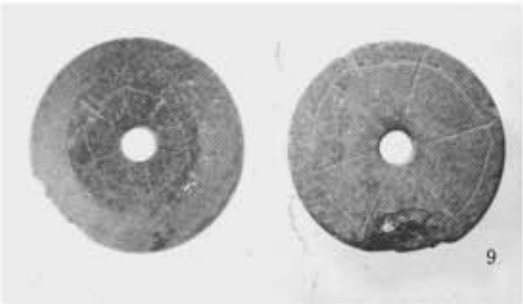
4

5

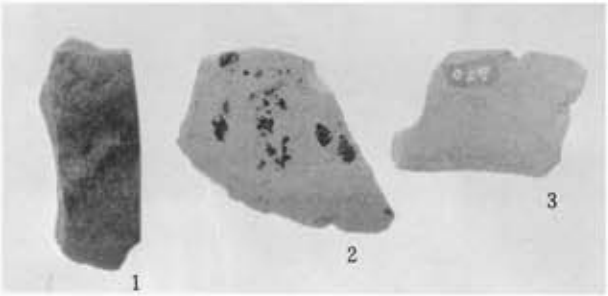
6

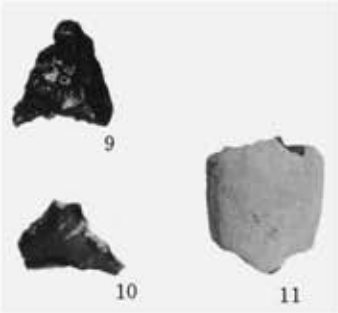
7

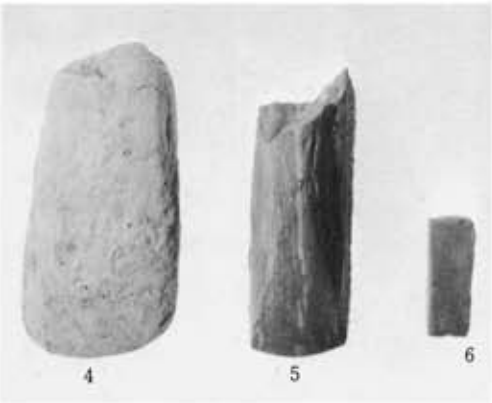
8

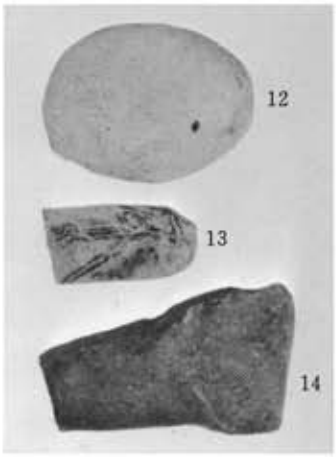

9

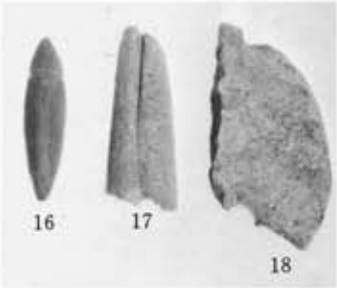
10. 石　器











11. 木 製 品

1

3

2

4

1

5

佐賀県文化財調査報告書第43集

生石・森の下遺跡

発行　昭和53年3月31日

編集　佐賀県教育庁文化課

発行　佐賀県教育委員会

印刷　佐賀県印刷局